天神山古墳群

2001. 12

三木町教育委員会

天神山古墳群

2001. 12

三木町教育委員会

はじめに

郷土に残されている文化財は，歴史や文化を理解する上で，欠く事のできない貴重な歴史的遺産であります。これらの文化財の適切な保存・活用を図り，文化的向上を資することがわれわれの責務と考えます。

このたび，花崗土採取に伴い，香川県教育委員会文化行政課指導の下，発掘調査が実施されました。当遺跡を含む丘陵は，遺跡の包蔵地として古墳の存在は知られていましたが，その性格・構造等については不明でした。今回の調査により，横穴式石室の上半は破壊されているものの，須恵器や鉄器，勾玉などの残りが非常に良い１号墳および３号墳など計３基の後期古墳と，その下層で検出された10基以上の弥生時代の土壙墓群を確認することができました。

本報告書が本庁の地域史解明の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いと存じます。

最後となりましたが，発掘調査及び報告書作成に際し，ご指導・ご協力いただきました関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成13年12月28日

三木町教育委員会
教育長　小　川　　和　夫

例　　言

1．本書は，花崗土採取に伴い実施された，木田郡三木町鹿伏に所在する「天神山古墳群」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査の期間は平成６年10月31日～平成７年１月６日までである。

3．発掘調査は香川県教育委員会國木健司氏の指導の下，三木町教育委員会主任主事石井健一が担当した。

4．発掘調査において，下記の関係諸機関から助言，教示を賜った。記して謝意を表する。（敬称略，順不同）

香川県教育委員会，財団法人　香川県埋蔵文化財センター，高松市教育委員会

5．現地調査において，下記の方々の協力を得た。（敬称略，順不同）

黒川　巌，岩田　明，高橋秀男，久保安雄，坂井理明，森山隆正，石原サヨ子，
高橋キヨ子，櫛田英子，岡田藤子，森山京子，安部利恵子，東条貴美，松尾　歩，
松田重治（佛教大学学生）

6．本書の作成は，三木町教育委員会から大旺建設㈱に委託され，同社の松田重治，田所希代江がこれを実施した。作成期間は平成13年５月１日～同年12月28日である。

7．遺物の基礎整理に際し下記の機関および方々の協力を得た。（敬称略，順不同）

近森美樹，尾崎圭子，三重野久美，大旺建設技術研究所

8．本書の作成に関連して，遺物写真撮影をカタオカカメラに委託した。

9．本書の執筆は第１章を石井，第２章を石井，松田，第３章第２節（４）出土遺物（玉類）を田所が行い，それ以外を松田が行った。

10．編集は石井の総括の下，松田が全般を行い，田所がこれを補佐した。

11．出土遺物ならびに図面，写真は三木町教育委員会において保管している。

12．本書の作成において下記の方々および諸機関にご教示，ご協力を得た。記して謝意を表する。（敬称略，順不同）

國木健司，片桐孝浩，川畑　聰，蔵本晋司，坂本憲昭，前田光雄，森田尚宏，山元敏裕，
大島和則，山中美代子，㈶香川県埋蔵文化財調査センター，高松市教育委員会，
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター

13. 本書における表記および記述に関する凡例は以下のとおりである

(1) 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

土壙墓：ＳＴ　　溝　　：ＳＤ

(2) 遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。

1．遺物法量中で（　）をつけているもののうち，径は復原値，高は現存値である。

2．表記中の”／”は，その左側に外面，右側に内面の状況を示す。

3．土器胎土の粒度表記の基準

微砂：非常に細かい　　細砂：0.5㎜以下　　中砂：0.5～１㎜　　粗砂：１㎜以上

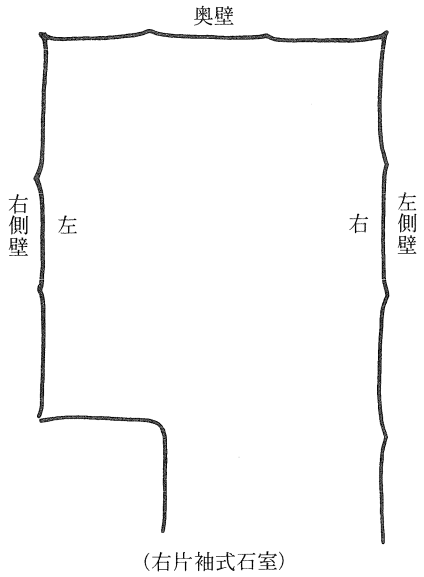
(3) 古墳に付設する遺構および古墳の下層において検出した遺構には遺構番号の先頭に古墳の号数を付して示している。

(4) 本書に掲載した遺物実測図について，須恵器の断面を黒く着色することで土師器，弥生土器と区別した。

(5) 本書に用いる高度値はすべて海抜であり，方位は磁北を示す。

(6) 本書第２図「周辺の遺跡」の作成に当たり，国土地理院発行1／25,000地形図「志度」を使用した。

(7) 古墳の石室における左右については下図に示すとおりである。



〈石室の左右〉

本 文 目 次

はじめに

例　　言

第１章　調査に至る経過 …… 1

第２章　遺跡の立地と環境 …… 2

第３章　調査の成果

１．天神山１号墳 …… 6
(1) 墳丘と外部施設 …… 6
(2) 埋葬施設 …… 8
(3) 遺物の出土状況 …… 12
(4) 出土遺物 …… 17
２．天神山２号墳 …… 27
(1) 墳丘と外部施設 …… 27
(2) 埋葬施設 …… 30
(3) 遺物の出土状況 …… 31
(4) 出土遺物 …… 31
３．天神山３号墳 …… 38
(1) 墳丘と外部施設 …… 38
(2) 埋葬施設 …… 42
(3) 遺物の出土状況 …… 45
(4) 出土遺物 …… 46
４．その他の遺構・遺物 …… 61

第４章　まとめ …… 62

遺物観察表 …… 76

写真図版 …… 93

報告書抄録

図版目次

第１図　三木町位置図
第２図　周辺の遺跡
第３図　古墳配置図
第４図　１号墳周溝土層図
第５図　１号墳平面図
第６図　１号墳石室内土層断面図
第７図　１号墳石室平・断面図
第８図　１号墳墓壙
第９図　１号墳石室内礫床配置状況
第10図　１号墳墓道および閉塞石平・断面図
第11図　１号墳石室内遺物出土状況
第12図　１号墳棺体配置の推定復原図
第13図　１号墳周溝内遺物出土状況
第14図　１号墳出土遺物（1）
第15図　１号墳出土遺物（2）
第16図　１号墳出土遺物（3）
第17図　１号墳出土遺物（4）
第18図　１号墳出土遺物（5）
第19図　１号墳出土遺物（6）
第20図　１号墳出土遺物（7）
第21図　ＳＴ101平面・土層断面図
第22図　ＳＴ102平面図
第23図　２号墳平面図
第24図　２号墳石室跡平面・土層断面図
第25図　２号墳墳丘土層図
第26図　２号墳周溝土層断面図
第27図　２号墳石室および墓道復原図
第28図　２号墳出土遺物（1）
第29図　２号墳出土遺物（2）
第30図　２号墳下層土壙墓群平面図
第31図　周溝墓周溝土層図
第32図　ＳＴ201平面・土層断面図
第33図　ＳＴ202出土遺物
第34図　ＳＴ202平面・土層断面図
第35図　ＳＴ203平面・土層断面図
第36図　ＳＴ204平面・土層断面図
第37図　ＳＴ205平面・土層断面図
第38図　ＳＴ206平面図
第39図　ＳＴ207平面・土層断面図

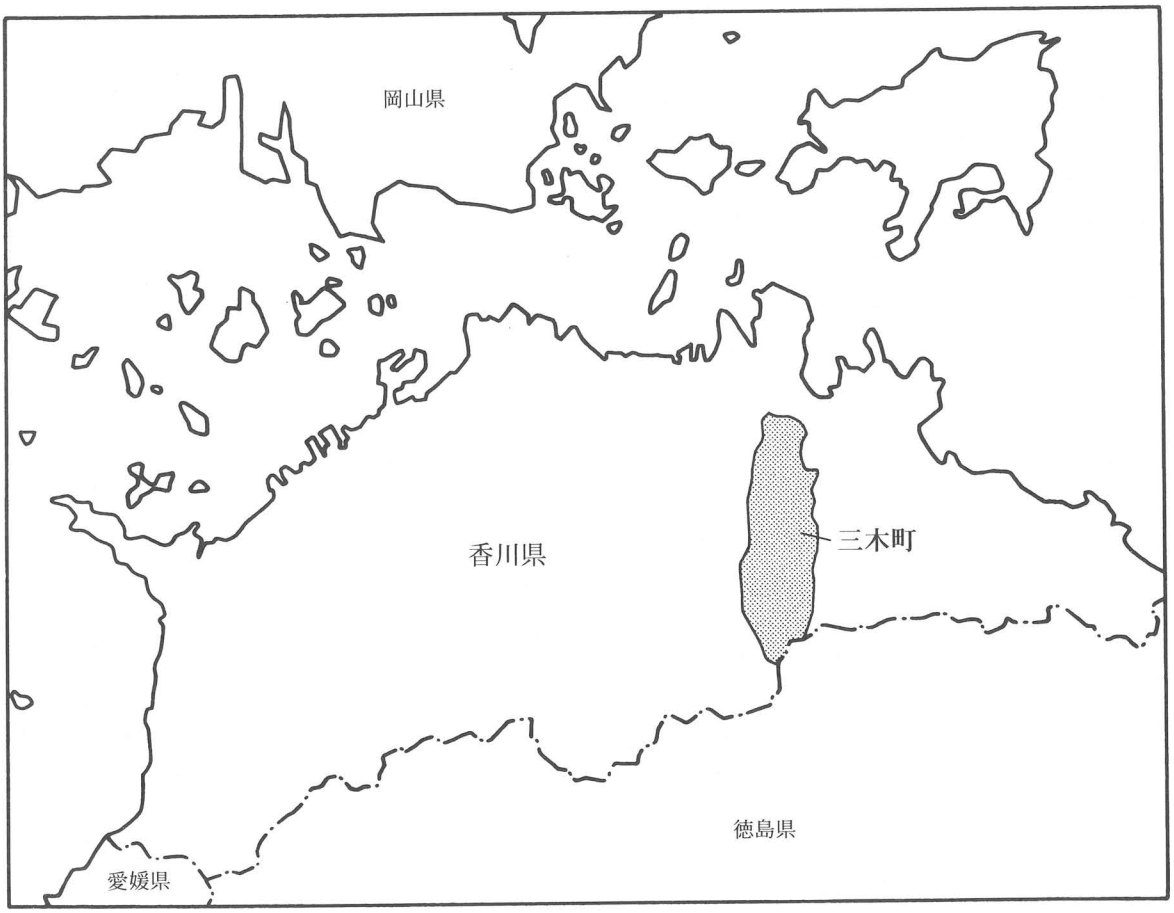
第40図　ＳＴ208出土遺物
第41図　ＳＴ208平面・土層断面図
第42図　ＳＴ209平面図
第43図　ＳＴ210平面・土層断面図
第44図　３号墳周溝土層図
第45図　３号墳平面図
第46図　３号墳墳丘及び石室内土層断面図
第47図　３号墳石室平・断面図
第48図　３号墳石室内礫床配置状況
第49図　３号墳墓壙平面図
第50図　３号墳石室内遺物出土状況
第51図　３号墳棺体配置の推定復原図
第52図　３号墳出土遺物（1）
第53図　３号墳出土遺物（2）
第54図　３号墳出土遺物（3）
第55図　３号墳出土遺物（4）
第56図　３号墳出土遺物（5）
第57図　３号墳出土遺物（6）
第58図　３号墳出土遺物（7）
第59図　３号墳出土遺物（8）
第60図　３号墳出土遺物（9）
第61図　３号墳出土遺物（10）
第62図　ＳＴ301・302平面・土層断面図
第63図　ＳＴ302出土遺物
第64図　ＳＴ303出土遺物
第65図　ＳＴ303平面・土層断面図
第66図　ＳＴ304平面・土層断面図
第67図　その他の遺物
第68図　１号墳における追葬過程
第69図　３号墳における追葬過程
第70図　土壙墓群配置図
第71図　天神山遺跡周辺の弥生時代の遺跡

第１章　調査に至る経過

香川県教育委員会では三木町鹿伏地区中所において，平成８年度開校を目指し，県立高校を建設する計画を進めていた。そこで三木町は同地区山田において新設高校用地造成に伴う花崗土採取を計画した。この計画にかかる事業区域は天神山古墳群が所在する丘陵として知られていたが，その内容については不明であった。

そのため三木町教育委員会は，埋蔵文化財の包蔵状況を把握するため，香川県教育委員会文化行政課のご指導を仰ぎ，平成６年７月11日に試掘調査を実施した。調査は近現代の墓地付近に設定したトレンチにおいて，古墳周溝や石室石材などの検出とともにサヌカイト，須恵器などを検出した。このため事業計画10,142㎡のうち，保護措置が必要とされた1,000㎡について，事前調査を実施することとなった。

発掘調査は三木町教育委員会が調査主体となり，県教育委員会文化行政課のご指導により平成６年10月31日から翌年１月６日までの期間で実施した。



第１図　三木町位置図

第２章　遺跡の立地と環境

三木町は香川県の東部に位置し，東西5.8km，南北18.4kmで南北に細長く，面積は75.78km²である。町の面積の2/3を山地が占め，その1/4が北部に，3/4が南部に分布している。北部山地には立石山（標高272.5m），小野ヶ原山（標高252.0m）など標高200～300mの山塊によって構成される立石山脈が連なり，南部山地は当町最高峰の大相山（標高881.1m）を筆頭とする，標高500～600mの山々が四国を東西に二分する阿讃山脈を形成している。山地の大部分が花崗岩類で，一部が約7,000万年前の海底堆積物（和泉層群）と約1,000年前の火山噴出岩類（讃岐層群）からなり，南北両山地間には洪積台地と沖積平野が広がる。台地は山地の前縁部に発達し，約200～100万年前の三豊層群および，それ以降の扇状性砂礫層（洪積層）によって，また沖積平野は南方の阿讃山脈を源流とする新川水系の諸河川および長尾町との町境を北流する鴨部川がもたらしたもので，扇状地性，氾濫原性の砂礫や粘土層によって形成されている。

町の北は木田郡牟礼町と大川郡志度町，西は高松市，東は大川郡長尾町，南は香川郡香川町と徳島県美馬郡美馬町に接する。

歴史的な側面では，七ツ塚４号墳の周溝墓からはサヌカイト製翼状剥片が出土し，池戸八幡神社内小丘陵南裾部ではサヌカイト製ナイフ形石器を表採するなど三木町の歴史は古く，旧石器時代にまで遡ることが明らかになっている。その後，町内の歴史は一旦途切れるものの，縄文時代晩期になって再開する。南天枝遺跡（18）からはこの時期の土器が出土し，尾端遺跡や西浦谷遺跡（2）では同時期の落とし穴状遺構が検出されている。次の弥生時代になると遺跡数も増大する。鹿伏東古川堤防では，河川改修工事の際に遠賀川式土器が見つかっている。香川大学農学部遺跡（15）では前期後半の土器包含層が確認されており，集落域が広範に及んでいることを示唆する。また農学部遺跡の南東に位置する福万遺跡（19）でも前期末の土器片が出土している。中期の遺跡としては中葉の集落である鹿伏・中所遺跡（21）が新川東岸に広がる。中期末になると各地で高地性集落が展開するが，当町においては白山山頂付近に所在する白山２遺跡（33）や集落が後期前半まで継続して営まれる，前述の西浦谷遺跡が知られている。白山には当該期の遺跡が数ヶ所で確認されており，南麓から派生する斜面上には小集落であり，箱式石棺も検出された白山３遺跡（34）や「六区袈裟襷文銅鐸」を出土した白山１遺跡（32）が立地する。後期の遺跡としては集落内で墓域が確認され，多くの土器棺が検出された前述の鹿伏・中所遺跡や砂入遺跡（16），西土居遺跡群，池戸鍋渕遺跡（7），田中南原遺跡などが近年の調査で確認されている。特に鹿伏・中所遺跡および田中南原遺跡は，当該期から古墳時代前期に至る長期的な拠点集落であり，方形台状墓や土壙墓群からなる西土居遺跡群は当該期から弥生終末期にかけての遺跡である。

古墳時代になると，各地で前方後円墳が築造される。東接する長尾町では発生期の丸井古墳をはじめ，中代古墳，稲荷山古墳など，地域色豊かな多くの前期古墳が営まれ，中期では多くの鉄製武器や武具，馬具などを出土した円墳の川上古墳を含めて塚原古墳群を形成している。また，西接する高松市東部地域には新田町，前田東町，東山崎町の３町にまたがって，全長72mの大型前方後円墳である高松市茶臼山古墳が２期に比定されている。一方，町内の前期古墳は近年の測量調査で唯一の前方後円墳であることが確認された池戸八幡神社１号墳（6）が低平な前方部よ

り前期初頭に位置付けられている。中期古墳としては香川医大病院建設に伴って調査された，古式群集墳として著名な権八原古墳群（3）が知られる。

古墳時代後期になると古墳の数は爆発的に増加し，その多くは町の南北に広がる丘陵上に立地する。北部丘陵の南麓には風呂谷古墳や深谷古墳，椿社古墳，塚谷古墳など比較的大きな古墳が単独で築造され，南部丘陵の丘陵先端には単一の古墳が点在するが，蛇の角古墳群，諏訪カンカン山古墳群，西土居古墳群など，十数基から成る群集墳が構成されている。当古墳群の立地は白山西方約１㎞であるが，この付近には白山の北から派生する丘陵上に立地する鳥打古墳（24），鳥打大谷古墳群（25）や狸地蔵南丘古墳（30）が所在し，また東接する長尾町には緑ヶ丘古墳群（27）や陰浦古墳群（26）など小規模な群集墳が点在する。

古代に入ると，白鳳期から奈良時代にかけて始覚寺（11），長楽寺，上高岡廃寺といった古代寺院が建立され，前述の南天枝遺跡では同時期の集落が確認されている。律令体制が確立してくると，地方行政区分として畿内七道制度が全国的に整備された。『延喜式』によると，讃岐には南海道が東西に抜け，６駅が設定されていたようである。奈良時代，三木郡内に官道南海道の駅は設置されていなかった。しかし，推定南海道は白山の南を通っており，白山付近は交通上の重要な位置を占めていたものと考えられている。南海道に沿った行程を記した，高野山の学僧・道範の日記である『南海流浪記』からは，白山が宿駅的な意味を持っていたことが窺える。おそらく白山権現が宿坊として使われていたのであろう。

争乱が全国的に波及する南北朝期には細川清氏が北朝側から離反して南朝につき，白山で挙兵したが，細川頼之との戦いに敗れ，戦死した。白山西麓に所在する香川県畜産試験場の北入り口にある，新田神社の傍らには細川清氏を祭る五輪塔が現存している。また，明治24年には白山南麓の白山神社境内東側，境内外社有墓地にあった柏木の下から古銭壺が出土し，宋銭１万枚が出土したという。これは当時の白山権現の経済力を誇示するものであったろう。

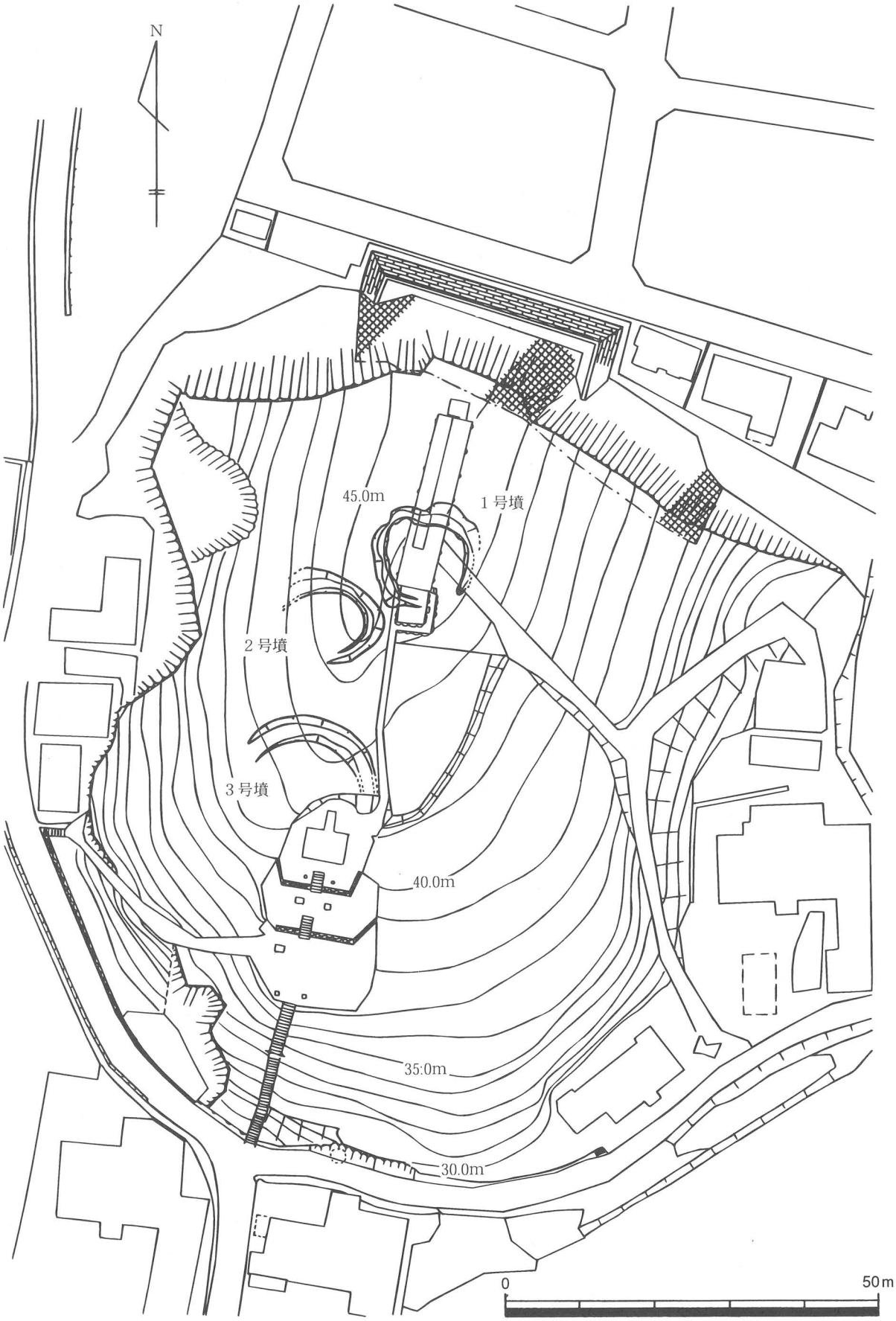
戦国期には白山には白山城が所在した。『全讃史』，『讃岐国名勝図会』には「白山に在り往古，細川掃部これに居る」との記載が見られるが，その所在は不明である。また，細川掃部とあるが，掃部頭直之のことであるという。

天正５年，十河一存は篠原自遁・重清豊後守を討つため，先陣に陣内右京進清宅・植松ら50騎，総勢500余人，中軍には三谷・大熊・池田各50騎，総勢600余人，大殿には一存自ら50騎，総勢500余人，その他三木郡の兵を多数従えて白山で大合戦が行なわれたと伝えられる。篠原氏に従うものは七条賢信，板東・板西のものども，ならびに阿波川島一族であった。一存の豎子植松万寿はわずか13歳であったがよく戦い，敵の勇将坂東八郎の首を獲り，その他のものも敵の首386級もあげた。これを白山合戦というが，その場所は不明である。

このように，白山周辺地域は弥生時代以降，常に三木町の歴史の中心であった。白山の鎮座する下高岡地区に西接する鹿伏地区に当古墳群は所在するが，以上に述べたような歴史の展開において鹿伏地区も当然，深く関連しているものと考えられる。鹿伏地区は古代中世には井上郷に属していたが，近世に至り当初の生駒領から寛永19年には高松藩領「鹿伏村」となった。その後明治18年，池戸郷の池戸村と井上郷の井上・平木・鹿伏の４村が連合して「平木村外三ヶ村」と称し，また同23年の町村制施行や昭和29年の町村合併促進法により周辺の村との合併を繰り返して現在の三木町が生まれた。そして旧町村の領域を地区と称し，かつての「平木村外三ヶ村」を構成した４地区を大字として現在の鹿伏地区に至っている。

1	天神山古墳群	11	高尾遺跡	21	鳥打大西谷古墳群
2	福万遺跡	12	権八原古墳群	22	陰浦古墳群
3	旧長楽寺跡	13	西浦谷遺跡	23	緑ヶ丘古墳群
4	鹿伏・中所遺跡	14	権八原遺跡（包蔵地）	24	小倉東丘古墳
5	高岡城跡	15	七ツ塚古墳群	25	長谷古墳
6	高野八幡社古墳	16	尾崎塚（中世）	26	狸地蔵南丘古墳
7	農学部遺跡	17	始覚寺跡	27	鎌倉塚
8	池戸八幡社古墳群	18	富士の越山頂古墳	28	白山1遺跡（銅鐸出土地）
9	池戸八幡社裏古墳	19	野越古墳	29	白山2遺跡
10	池戸鍋渕遺跡（包蔵地）	20	鳥打古墳	30	白山3遺跡

第２図　周辺の遺跡（Ｓ＝1／25,000）



第３図　古墳配置図（S＝1／750）

第３章　調査の成果

１．天神山１号墳

（1）墳丘と外部施設

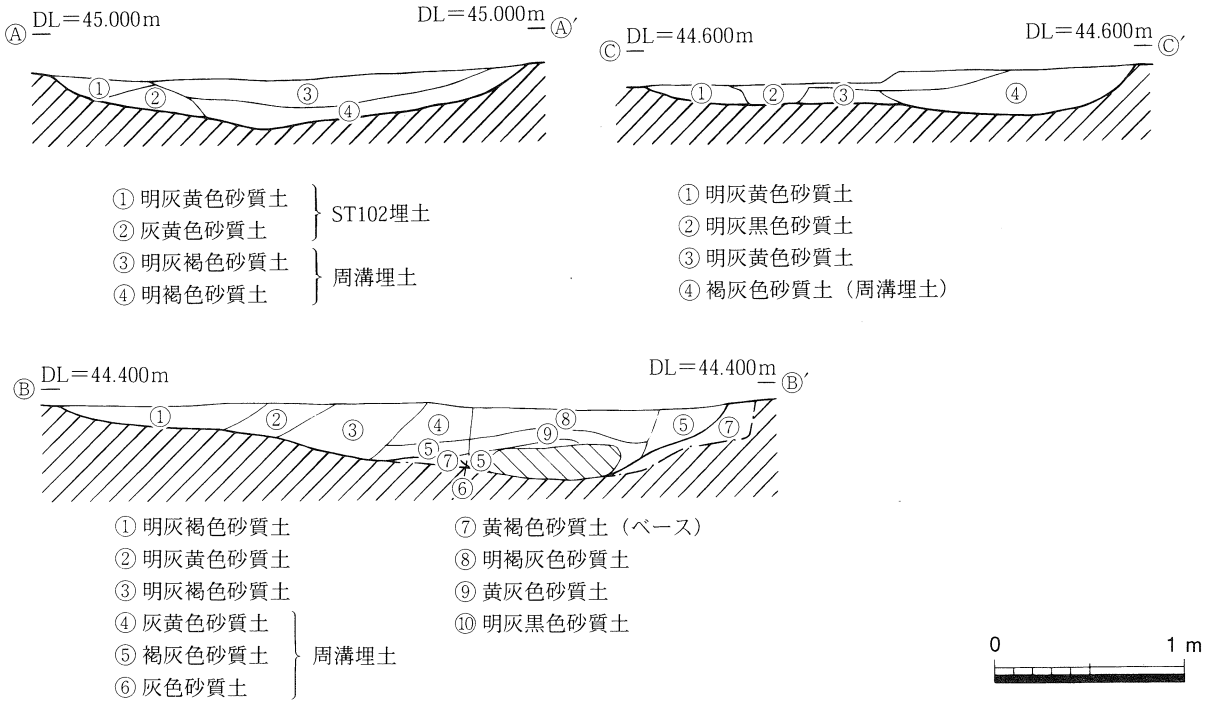
墳丘（第５図）

天神山古墳群の最北端に立地し，丘陵の最高所の平坦面に位置する１号墳は，２号墳に北接している。調査開始時には墓地であり，墓の基礎を取り除くと，直下に横穴式石室の石材が露見していた。墳丘は全面に削平が及び，北東半に15cm程度の盛り土が残る程度であった。南東半は表土直下が地山である。墳丘の規模は，基底部で見た場合，東西11.5m，南北10.5mである。また墳丘の北東部には張出しが認められ，墳丘形態はいびつな円形を呈する。基底部の標高は北部が最も高く44.750mであり，最も低い南部の44.250mとは比高差で約0.5mの差がある。

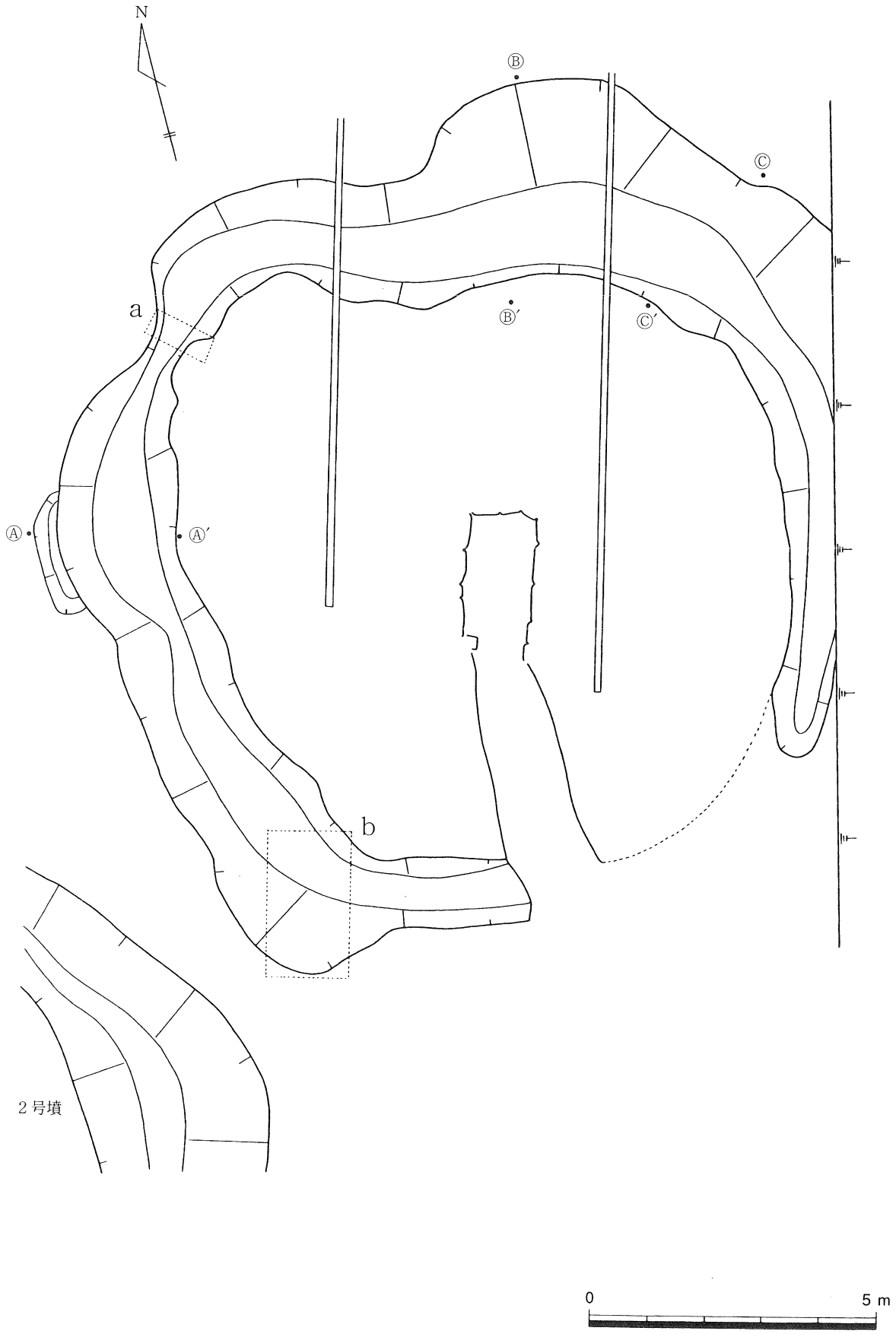
周溝（第４，５図）

一部に削平や撹乱を受けているものの，石室を取り囲むように，ほぼ全域において確認できた。規模は場所によってかなりの開きがあり，最も狭い個所は北東部で幅約1.1m，最も広い個所は北部の約3.8mで，全体にいびつな形状である。また，周溝の西部と北部はともに直線的な印象を受ける。この２辺の交差する個所が，前述の幅の最も狭い個所であると同時に，周溝内で最も浅い。また，後述するように，ここから甕（39）が出土している。

土層は第４図のⒶ，Ⓑ，Ⓒ地点で観察した。このうちⒷ，Ⓒでは後世の削平や掘削があり，Ⓑでは②が，Ⓒでは⑧，⑨がこれにあたる。またＡでは古墳に先行する土壙が確認できる。しかし，いずれも堆積状況の観察を著しく阻害するものではない。周溝内は全体として墳丘側から外側に向かっての自然堆積である。



第４図　１号墳周溝土層図（Ｓ＝1／40）



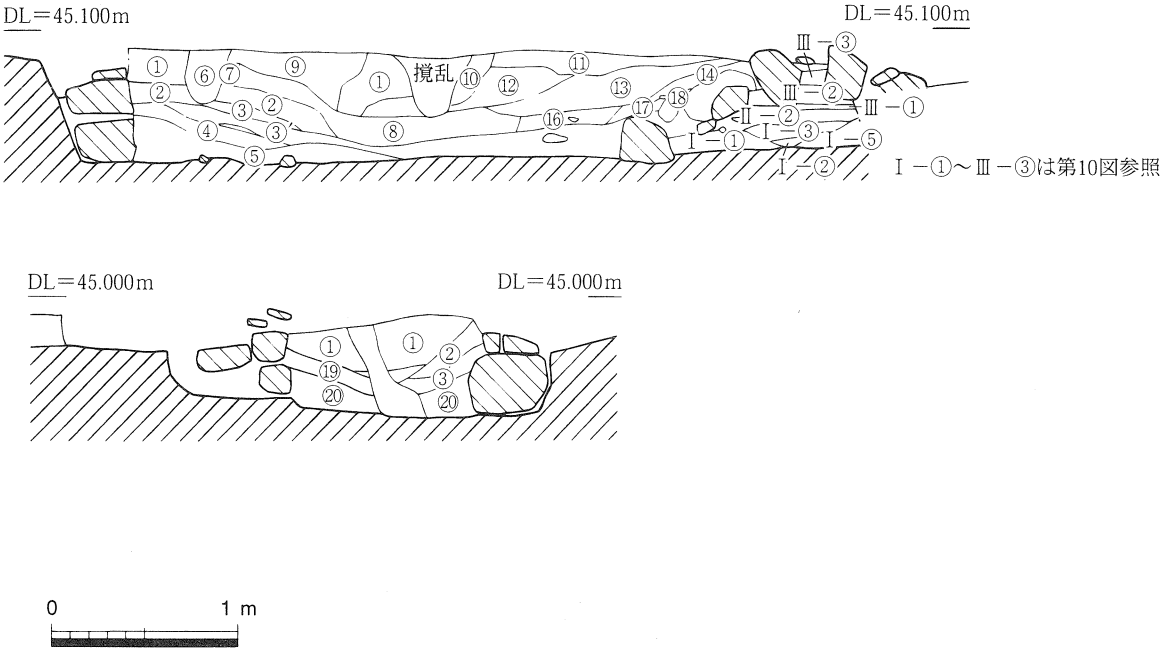
第５図　１号墳平面図（Ｓ＝1／100）

（２）埋葬施設

石室（第６，７，９図）

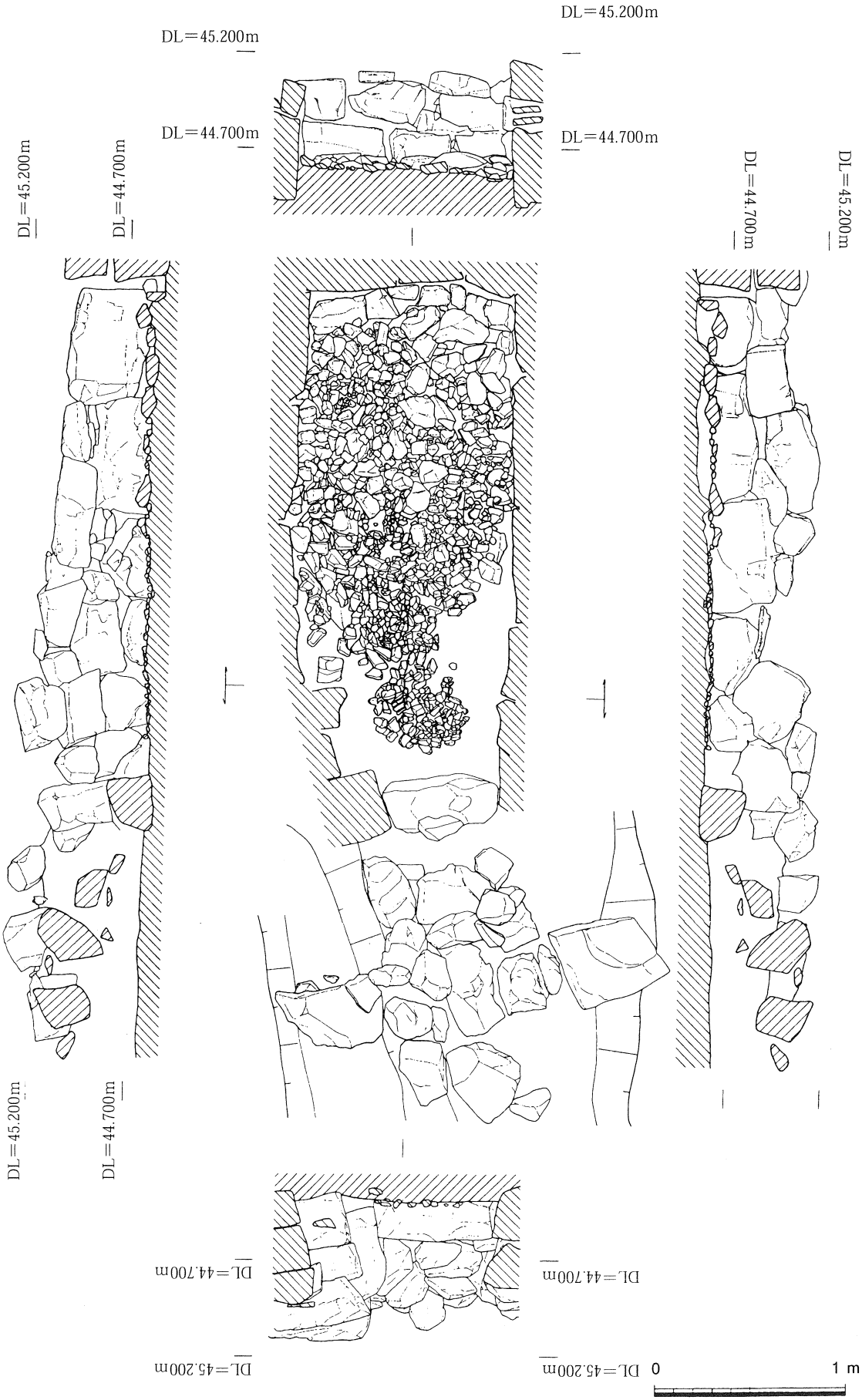
１号墳の埋葬施設は主軸をＮ20°Ｅに採る右片袖式横穴式石室である。石室内法は玄室長が2.7m，右側壁長約2.7m，左側壁長約2.8m，玄室幅は奥壁側で約1.1m，玄門側で0.8m，玄室中央部で約1.2mを測る，やや胴張りな長方形を呈する。

石室壁体は削平により上部の大半が失われており，両側壁および奥壁は下から１～３段を残すのみである。石材は小児頭大～上半身大の塊石で，大きさには開きがあるが，小児頭大程度のものが一般的なようである。最も大きい石材は左側壁の奥に据えられ，この左奥の石を基準に基底石が設置されて平面プランを確定，石室が構築されたと考えられる。基底石敷設後，そこから上に１～２段，左奥の石の高さにほぼ揃うように，持ち送り気味に積み上げられている。積み方と

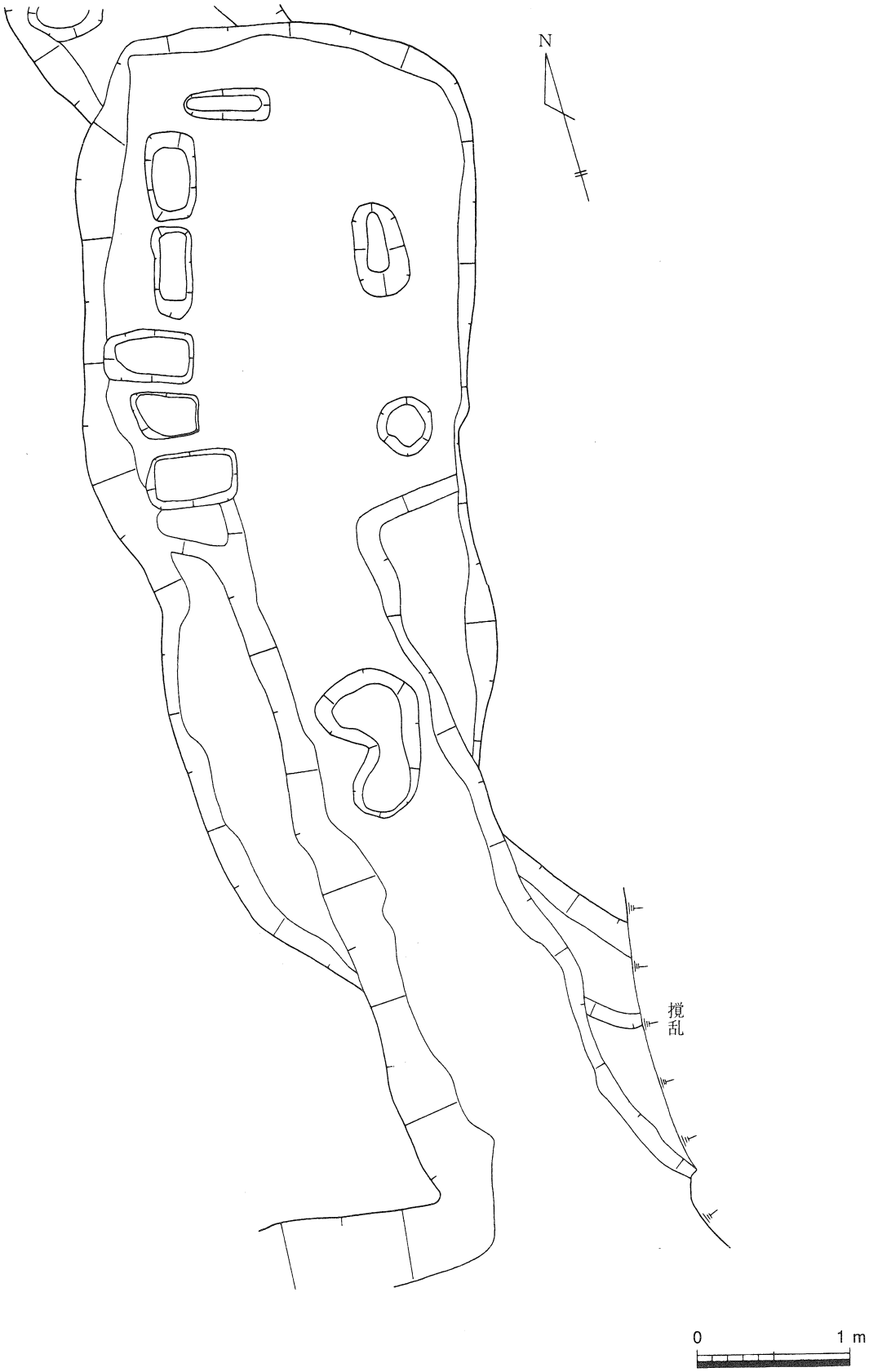


① 黄灰色砂質土（やや堅くしまる）
② 暗灰黄色砂質土（やや堅くしまる）
③ 淡灰黄色砂質土（やや堅くしまる）
③′ 淡灰黄色砂質土（やや堅くしまる）
④ 暗灰黄色砂質土（やや堅くしまる）
⑤ 灰黄色砂質土（やわらかい）
⑥ 淡黄灰色砂質土
⑦ 暗灰黄色砂質土
⑧ 黄黒色砂質土
⑨ 灰黒色砂質土
⑩ ⑥に似る
⑪ 灰茶褐色砂質土（非常に堅くしまる）
⑫ 茶褐色砂質土（非常に堅くしまる）
⑬ 暗茶褐色砂質土（非常に堅くしまる）
⑭ ⑫に似る
⑮ ⑧と同じ
⑯ ⑫に似る
⑰ 灰黒色砂質土
⑱ 灰黄褐色砂質土
⑲ 灰黒色砂質土（非常に堅くしまる）
⑳ 灰黄褐色砂質土
Ⅰ－⑤ 暗黄灰色砂質土

第６図　石室内土層断面図（Ｓ＝1／40）



第７図　１号墳石室平・断面図（Ｓ＝1／30）

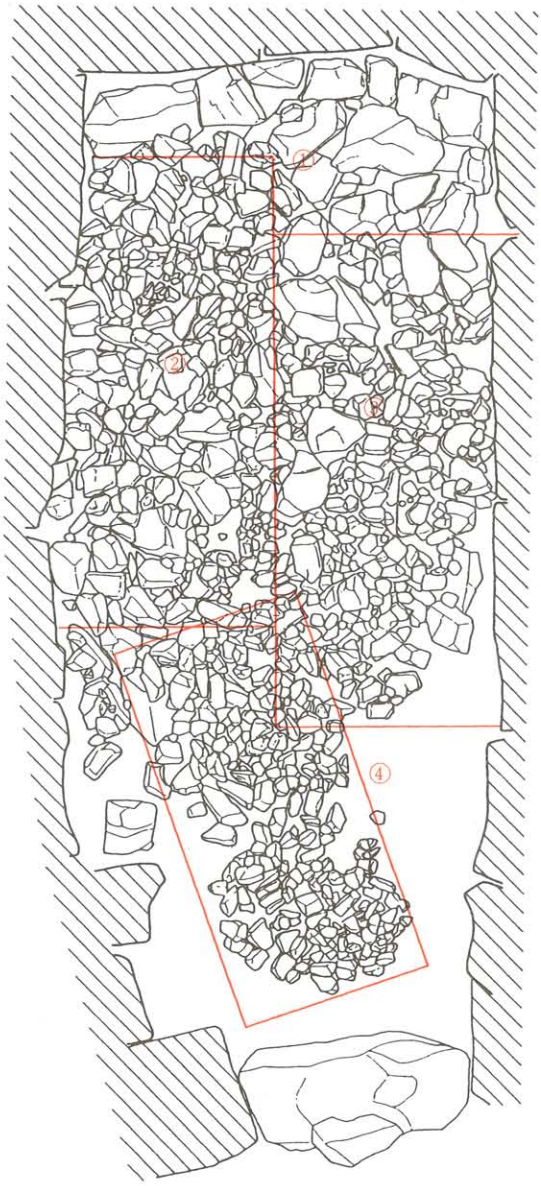


第８図　１号墳墓壙（Ｓ＝1／40）

しては小口積みもしくは横長積みの双方が確認され，現況で規格性は見出せない。また，石室壁面には控え積みは行なわれておらず，裏込め土が充填されている。

袖石は右側壁から20cm内側に，仕切り石と接するように立てて設置される。また，この石とは別に袖石から30cmほど内側に，袖石状に配置された石材が見られる。この石は３段残存しており，いずれも玄室右側壁より20cmほど内側にせり出している。袖石とこの袖石状に配置された石材との間には奥まって側壁石が配置されている。このように，玄室内において一部の側壁石を内側に設定することは非常に珍しく，また位置的にも玄室を複室構造状に分割したとは見なし難い。石室の安定性を指向したもの，あるいはこの部分の天井石が小規模であった等の理由も考えられるが，合理的ではない。最も妥当な解釈としては当初，内側の袖石状石材を玄門に設定したが，追葬スペースが不足したために，現存の袖石へと玄門を移動させたという解釈であり，これは追葬に際し，玄室を拡張した結果であろうというものである。このことについては第４章「まとめ」で改めて詳細に検討したい。

床面には礫が敷き詰められていた。礫の大きさは２cm～30cm程度とばらつきがあるが，第９図に示すように，礫の大きさによって分布が異なっている。これによると，奥壁沿いの意図した部分には15～20cm程度の塊石が中央から西半では幅約20cm，東半は約30cmの範囲で敷かれている。境界は直角に折れ曲がり，ここが石室内に並列して並べられた2棺の，北側の棺押さえになったと考えられる。②，③には３～５cm大の礫に混じって10cm程度の塊石が置かれている。②は①の西半から南へ約1.3m，③は①の東半から南へ1.5mの範囲に長方形に広がっており，礫は３～５cm大のものに10cm大のものが混在している。3の南辺の東半には10cm程度の礫が並べられる。②と③の境界には20cm大の塊石が直線的に並んでいる。④とした範囲は石室の中心を北東角にする長方形で，主軸は石室主軸から20°西に振っている。礫の配置は②および③と同様であるが，それらに比べややまばらであり，大きさも小ぶりな印象を受ける。これら礫の配置はそのまま棺の配置をあらわしているものと考えられる。床面のレベルは奥壁部が最も低く，玄門方向に高くなっている。奥壁側と玄門側における床面の比高差は約４cmである。



第９図　１号墳石室内礫床配置状況（Ｓ＝1／20）

墓壙は石室石材の後方約30cmを隅丸長方形状に穿たれる。規模は長辺約3.2m，短辺約2.5m，深さは約0.5mを測り，墓壙の南辺には墓道及びテラスが取り付く。墳丘基底部との比高差は約７cmである。

テラスは墓壙の南端から南に伸びる平坦な区画であり，深さは16cmを測る。規模は西側が長く約3.0mを測り，平面形は台形状を呈する。一方，東側は約1.6mと短く，平面形は三角形である。この東西のテラス上に袖石から南へ３石，石材が直列に並べられていた。この石列と墓壙との間には裏込め土が充填されており，羨道の基底石である可能性もある。しかし，削平のため１段しか残存していないことと，後述する理由から，俄かに羨道であるとは判断できず，閉塞の一部である可能性も高い。

閉塞施設・墓道（第10図）

１号墳は玄門に直交して主軸をほぼ南北に採る墓道を持つ。墓道の土層はⒶ－Ⓐ′ およびⒷ－Ⓑ′ の２ヶ所で観察したが，そのどちらも大きくⅠ～Ⅲの３層に分層される。Ⓐ－Ⓐ′ で見た場合，それぞれの層の中間あるいは最下層に焦土状に変色した粘質土を持ち，その他の土も固く締め固められているという共通点を持つ。Ⓑ－Ⓑ′ 間においても焦土は持たないが，Ⓐ－Ⓐ′ 同様，堅く締め固められている。以上のことは，墓道は２度の再掘削および火を用いた墓前祭祀が行われ，閉塞前の埋め戻しがなされたことを示していると同時に，２度の追葬がなされたことをあらわしている。これらの墓道を古い順に第１次～第３次墓道と仮称する。

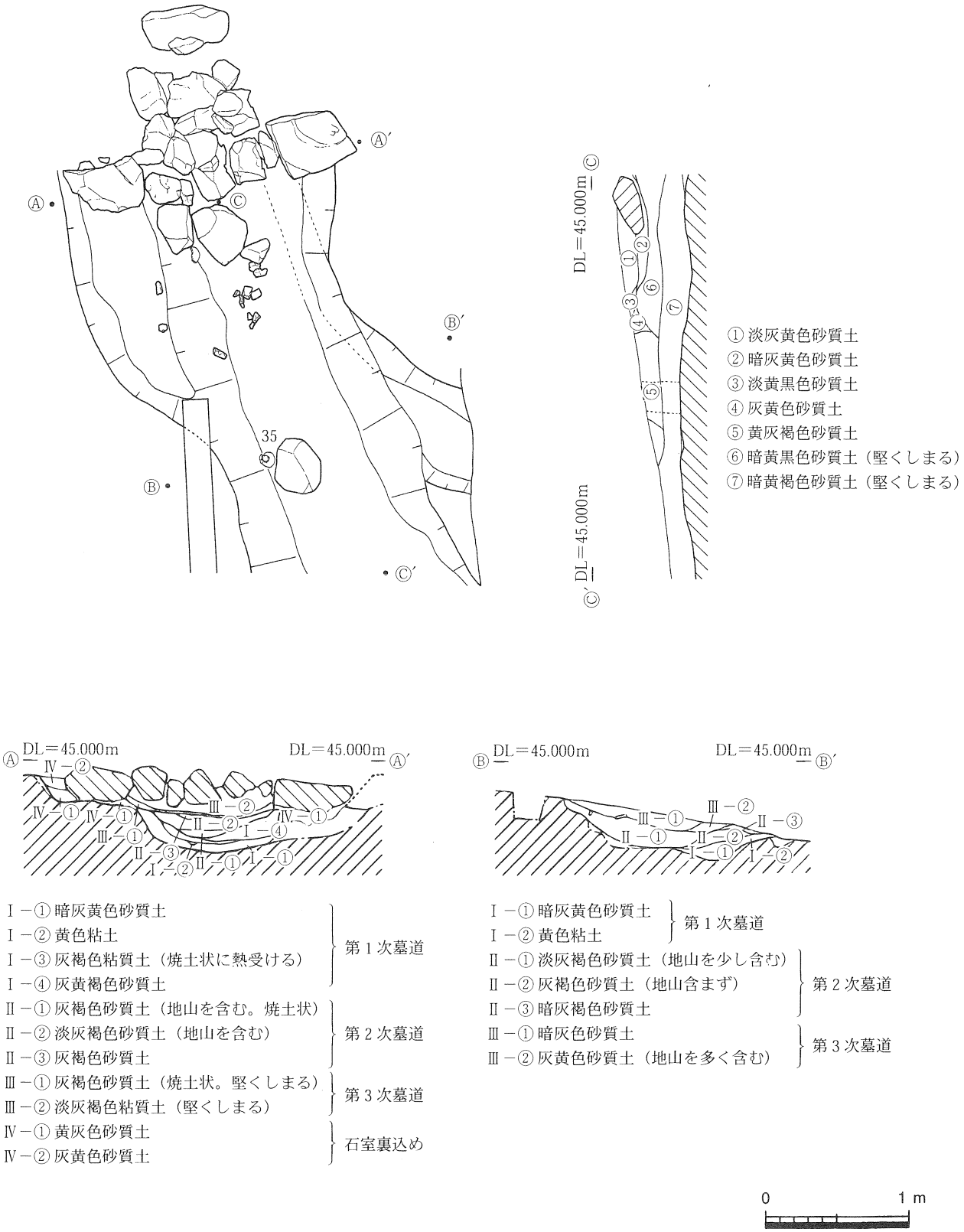
ところでⒶ－Ⓐ′ 間において，第１次墓道は第２次墓道下に見られるのに対し，Ⓑ－Ⓑ′ 間においては第２次および第３次墓道の東側にその堆積が見られる。平面形を見ても第２，３次墓道は玄門から一直線に周溝まで伸びているのに対し，第１次墓道も中程までは南北に主軸を採るが，そこからほぼ南西方向に角度を変え，周溝方向に伸びている。つまり，追葬段階になって墓道が付け替えられているのである。第２，３次墓道は長さ約4.8m，幅約2.5mを測り，断面の形状はカマボコ形を呈する。なお，第１次墓道と周溝との位置関係は撹乱のため不明である。

閉塞は墓道を埋め戻した後に設置され，先に述べたテラス上の石列間に人頭大の塊石が無造作に積まれ完了している。テラス上の石列が閉塞の一部である可能性を示唆した理由は以下による。現在確認できる閉塞は第３次墓道埋め戻し後の状況である。墓道の土層観察で見たＡ－Ａ′ 間においてこのライン上の石材はテラス上の石材とほぼレベルを同じくしている。また墓道の肩が，わずかではあるがテラス上の石材の下に入り込んでいる。これらのことから墓道の再掘削時には，テラス上の石材は外されていた可能性も残る。もしそうであるならば，これらの石列は羨道であるとは言えず，閉塞の一部と言わざるを得ない。

（3）遺物の出土状況

石室内（第11図）

石室内からは多くの須恵器，鉄製品，玉類が出土している。床面にまで及ぶような大きな盗掘坑も見出せず，埋葬および追葬時の状況を良く残しており，その配置は奥壁および右側壁，玄門部のラインに沿って並べられている。その中で須恵器については破損しているものも多く，第11図に示すとおり，離れた位置から出土した破片同士が接合関係にあり，完形品となる場合も多かった。それらの中で，坏については出土状況から明らかにセットとなるものは10と23のみで，



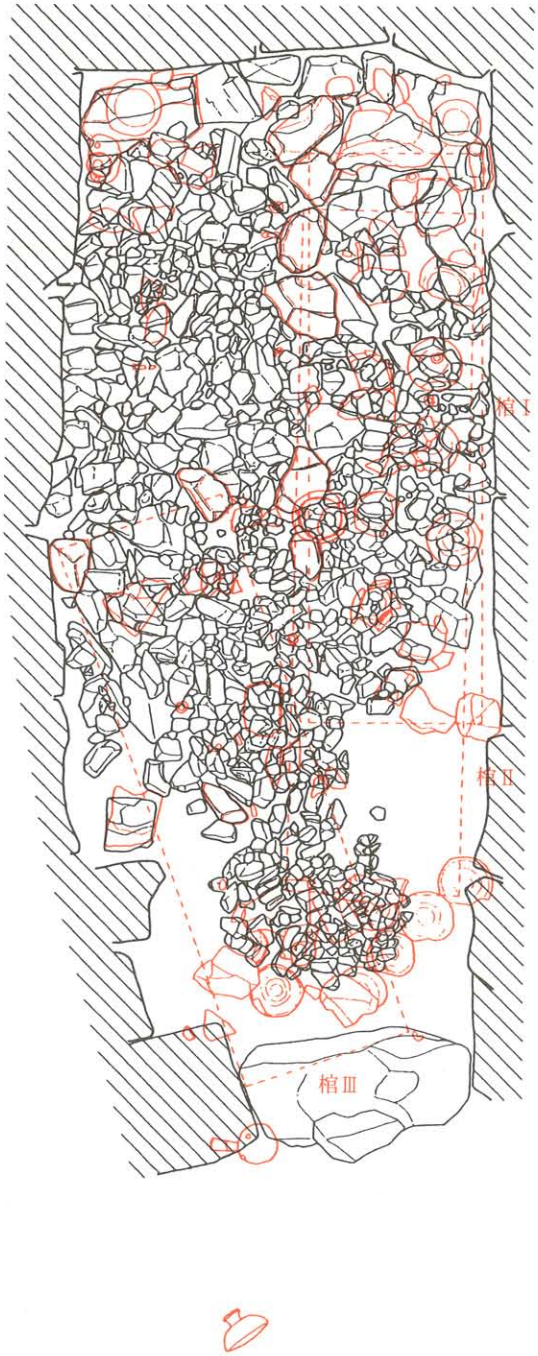
第10図　１号墳墓道および閉塞石平・断面図（Ｓ＝1／40）

第11図　１号墳石室内遺物出土状況（Ｓ＝1／15）

数量においても蓋が14個体，身が10個体と符合しない。これらの須恵器の出土状況を見ると，追葬における副葬品の片付けが行なわれているとは見なし難く，むしろ棺台として転用されていると考えられよう。一部は追葬時に持ち出されている可能性もある。

耳環は６つ出土した。これらは２つが近接して石室北東隅付近，石室左側壁中央北寄り，石室中央南寄りの３箇所で出土している。この２つ１セットと考えたとき，素直に３体の埋葬を想定できる。このことは初追葬に伴って掘削された墓道数３と合致してくる。また，耳環と同様，葬儀に伴って死者へ着装されたと考えられる勾玉，管玉はそれぞれ３点，水晶製の切小玉は１点出土している。勾玉は翡翠製の１点が石室中央南寄りの耳環に近接して出土し，瑪瑙製のものが仕切り石上から出土している。残る１点は不明である。管玉はすべて翡翠製であるが，出土した３点のうち２点が石室中央南寄りの位置から出土した耳環や勾玉に近接して出土している。残る１点の出土地点は不明である。須恵器や装身具の出土状況，および前述の礫床の配置から棺配置を想定すると，第12図のようになる。棺Ⅰは本来石室の左半を占めていたと考えられるが，２度目の追葬，すなわち棺Ⅲの埋葬に際し埋葬スペースの都合上，棺Ⅱの上に棺を移動されたのであろう。その他の耳環で推定の棺位置内に収まらないものも見られるが，これは遺骸の腐朽や，石室の埋没に伴った移動という範疇で捉えられるものであろう。

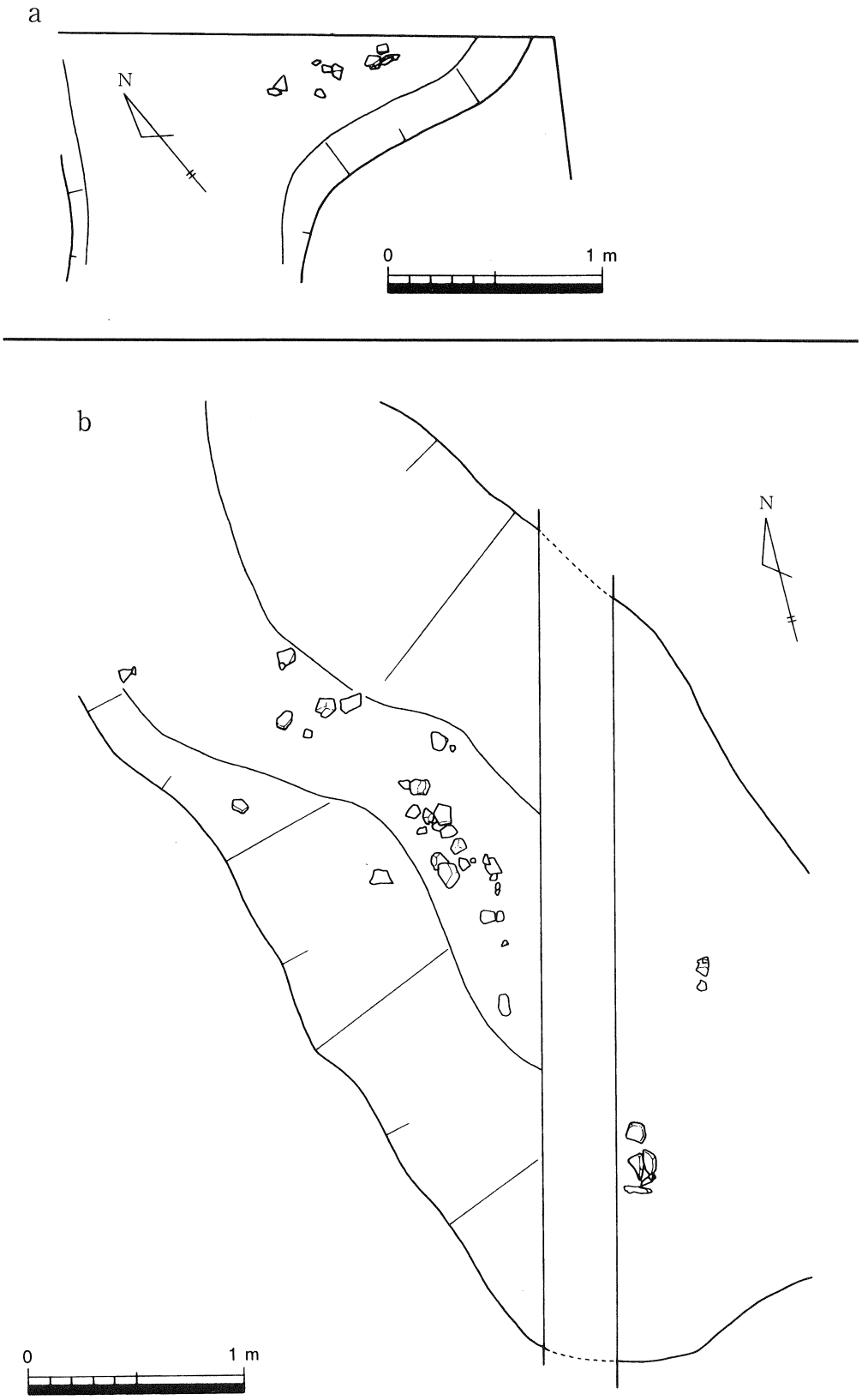
この点に関しても第４章「まとめ」において改めて検討する。



第12図　１号墳棺体配置の推定復原図（Ｓ＝1／20）

石室外（第5, 13図）

石室外からは墓道から出土した瓶，高坏や周溝から出土した甕，壺，坏がある。特に墓道出土の瓶は完形品であり，仕切り石に沿って閉塞石の間に置かれるように検出されているため，最終である２回目の追葬に伴うもの，そして石室の閉塞時に供えられたものであることが分かる。



第13図　１号墳周溝内遺物出土状況（Ｓ＝1／30）

また周溝からは第13図に示すとおり，ａ，ｂ地点でまとまって遺物が出土している。これらは２点とも甕であるが，周溝の最下層より出土したものであり，出土状況より祭祀で使用された後，周溝内に投げ込まれたものであると思われる。

（4）出土遺物

須恵器（第14, 15図）

蓋坏（1～24）

蓋は口径12.2～14.6cm，器高3.9～4.8cmと法量にばらつきがあり，形態にも１，３のように口縁部が内傾したもの，やや屈曲したもの（12～14）がみられる。また，口縁端部に段を持つもの（8）や口縁部外面と天井部の境に稜を持ち，沈線で区画したもの（11）口縁部内面と天井部を沈線状に区画したもの（9）がある。

身も口径10.6～13.2cm，器高3.7～4.4cmと法量にばらつきがある。長い口縁部としっかりした受け部を持つ18，20，21，22，それらが小さくなってしまっているもの（15，23，24）や，その中間（16，17，19）のものがある。

また，周溝内からは坏蓋３点（32～34）と坏身１点（35）が出土している。

高坏（27，36，37）

石室内から27が，墓道内からは36，37が出土した。27は焼成不良で灰白色を呈する。調整は不明である。36は坏身に脚がつく形状の高坏で，口径11.8cm，脚径8.4cm，器高7.7cmを測る。全体の１／２を欠損する。焼成は坏部のみ不良で灰白色，脚部は良く青灰色を呈する。口縁部の立ち上がりは短く，外反気味に内傾する。37は脚部である。方形の透かしが１つ残存する。本来は２段透かしであったものであろう。復原脚径15.6cm，現存高6.4cmを測る。

提瓶（26，31）

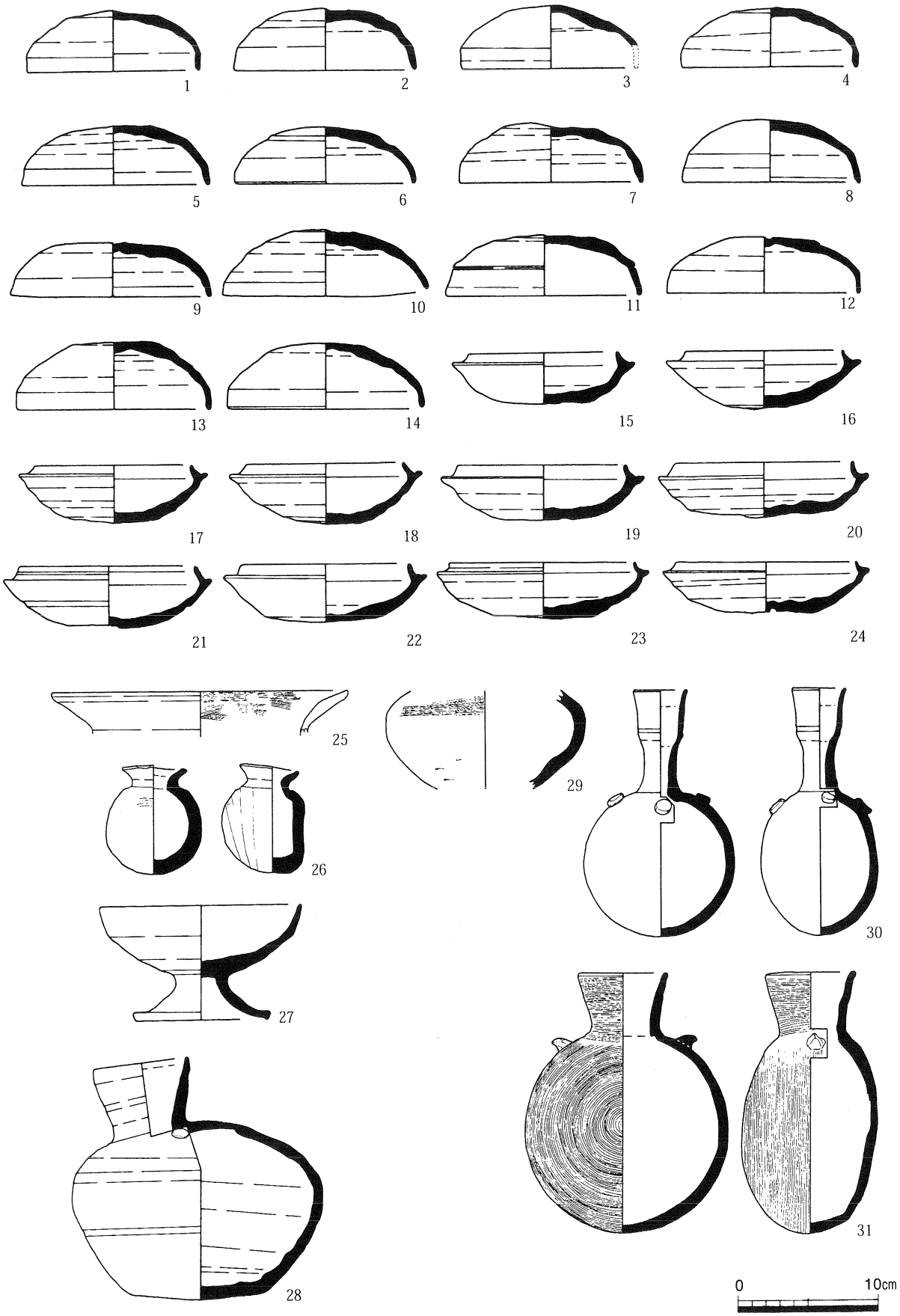
26は儀器化したもので，口径4.0cm，器高7.8cmを測る。外面は磨滅しているが，外面ナデとカキメを部分的に観察できる。内面は破損部がないため，調整の観察はできない。31は把手が退化し，カギ状の突起がつく程度のものである。口径は6.1cm，器高は18.3cmであり，外面は全面にカキメが施される。

平瓶（28）

破片は石室内に散乱していたが，接合によりほぼ完形に復原できた。口径6.6cm，器高17.1cmである。全体に磨滅が著しいが，部分的にナデを観察できる。肩部にはボタン状の突起が２つ，貼付されている。

瓶（30）

口径3.6cm，器高17.6cmの頸長の器種である。口縁は二重口縁状にやや外反しており，肩部にはボタン状の突起が４つ，等間隔に貼り付けられている。外面の調整は口縁部および頸部に回転ナデ，体部にはカキメが施されており，口縁下部には沈線２条が巡らされている。提瓶から派生した器種であることを，その形状から窺い知ることができる。



第14図　1号墳出土遺物（1）　（S＝1／4）

甕（38，39）

ともに周溝内から出土した。38は甕と思われるが，短頸壺の可能性もある。頸部以上を欠損する。全体に磨滅が激しいが，外面に沈線２条と回転ナデを確認できる。39は大型品で，口径21.9cm，現存高15.1cmを測る。周囲から同様の破片が多く出土しており，接合関係は見出せなかったものの，同一個体である可能性も高いと思われる。外面に回転ナデ，内面には同心円タタキが見られる。

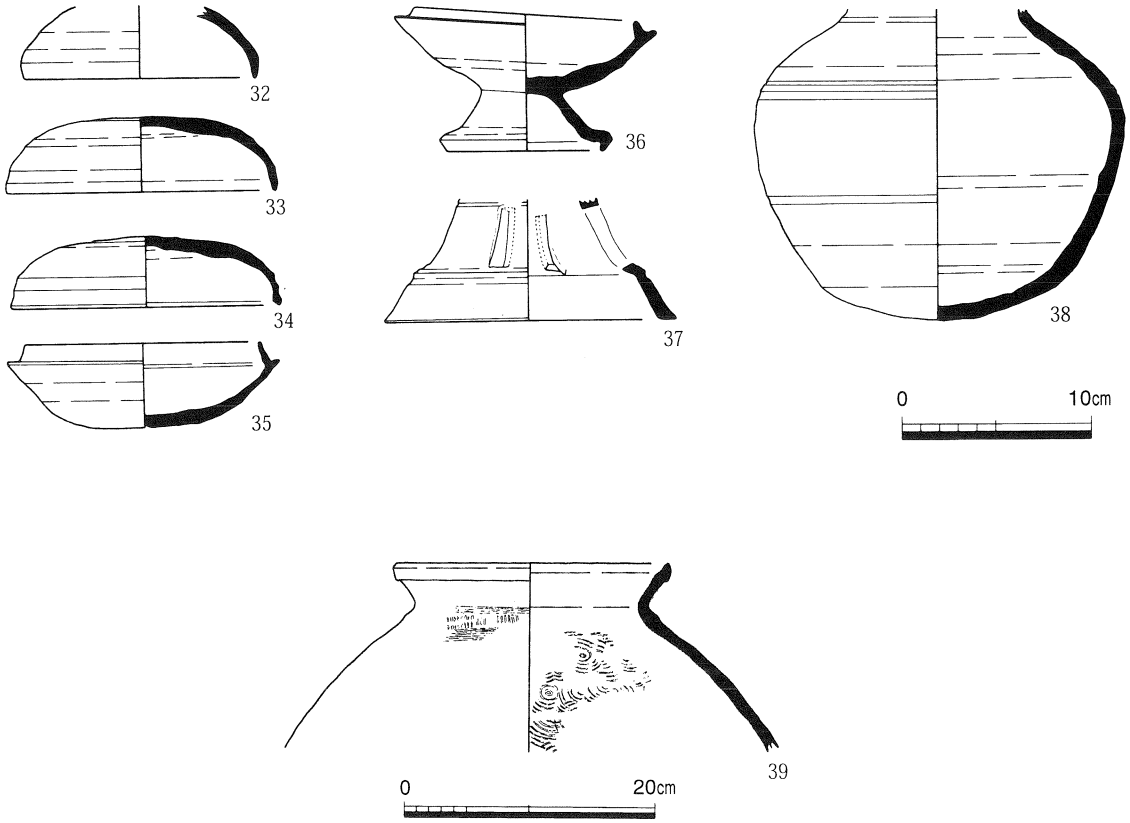
その他の器形

29は体部の破片であり，短頸壺のものと思われる。肩部にはカキメが施され，底部付近はヘラケズリが見られる。

土師器（第15図）

甕（25）

１号墳において，出土した土師器は１点のみである。25は甕で外反気味に立ち上がる口縁部には内面にハケを施し，端部を直線的に仕上げている。



第15図　１号墳出土遺物（2）　（39のみＳ＝1／6　他はＳ＝1／4）

鉄製品（第16図）

鉄鏃（47～50）

三角形鏃１点（47）腸抉三角形鏃２点（48，49）と長頸鏃2点（50－ａ，50－ｂ）が出土している。48，49とも逆刺を欠損する。また49には矢柄が残る。50は２点が銹着し，それぞれａ，ｂとした。

刀子（43～45）

43は先端部，44，45は刃部～基部である。いずれも刃部の断面形状は三角形をなし，基部の形状は44，45とも方形である。44には把口金具が残存している。

鉈（46）

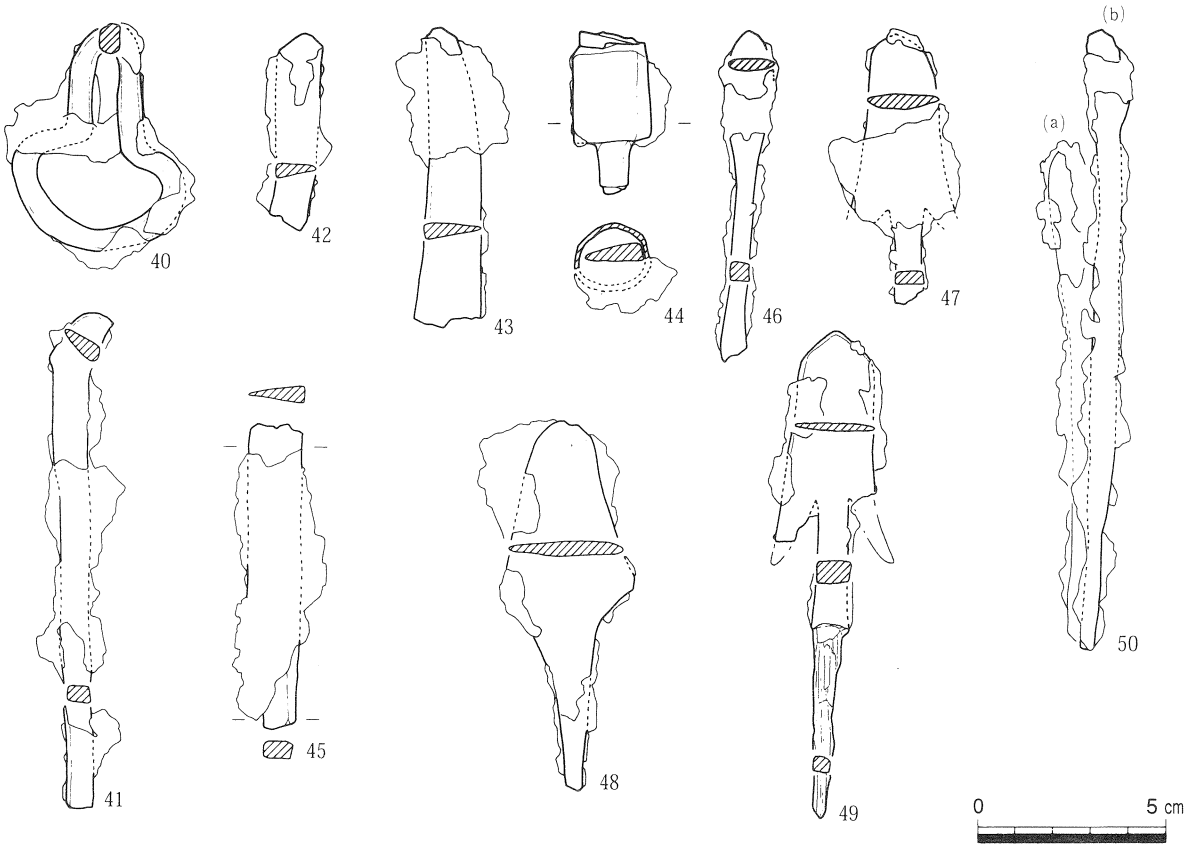
現存長8.9cmで，刃部は長さ3.4cm，幅1.3cmを測る。頸部の断面形は方形である。長頸鏃かもしれない。

馬具（40）

40は馬具で，鞍金具か磯金具と思われる。断面形状は円形である。

不明品（41，42）

41は頸部と思われる箇所の断面が方形，刃部と思われる箇所の断面が三角形をなすが，刃部の途中で屈曲する。42は断面が三角形であり，刃物のようであるが，これも途中で屈曲する。両者とも工具のようなものかもしれないが，詳細は不明である。



第16図　１号墳出土遺物（3）（Ｓ＝1／2）

装身具（第17～20図）

勾玉（51～53）

瑪瑙製（51・53）と翡翠製（52）のものが出土しており，51は赤褐色の混じる橙色，52は濃深緑色，53は乳白色が縞状に混じる黄橙色を呈している。穿孔方向はいずれも片側からなされており，53は貫通した側の小口の割れを研磨して仕上げているようである。長さは25～34㎜の範囲にあるが，規格性は認められない。また，52は半円形の形態であり丁寧に研磨されているのに対して，51，53はやや角張ったコの字形を呈している。

切子玉（54）

水晶製のものが１点のみ出土している。長さ22.6㎜，直径16.0㎜を測る一般的な切子玉で，片側から穿孔されている。断面の形状は六角形を呈しているが，角部に若干の磨滅が見られる。

管玉（55～57）

いずれも濃深緑色を呈する翡翠製で，片側から穿孔がなされている。直径9～12㎜，長さ26～32㎜の範囲におさまり，断面の形状がほぼ長方形を呈するよう丁寧に研磨されている。なお，56は小口面のほぼ中央から穿孔していたが途中で止め，新たに穿ち直しているようである。

耳環（58～65）

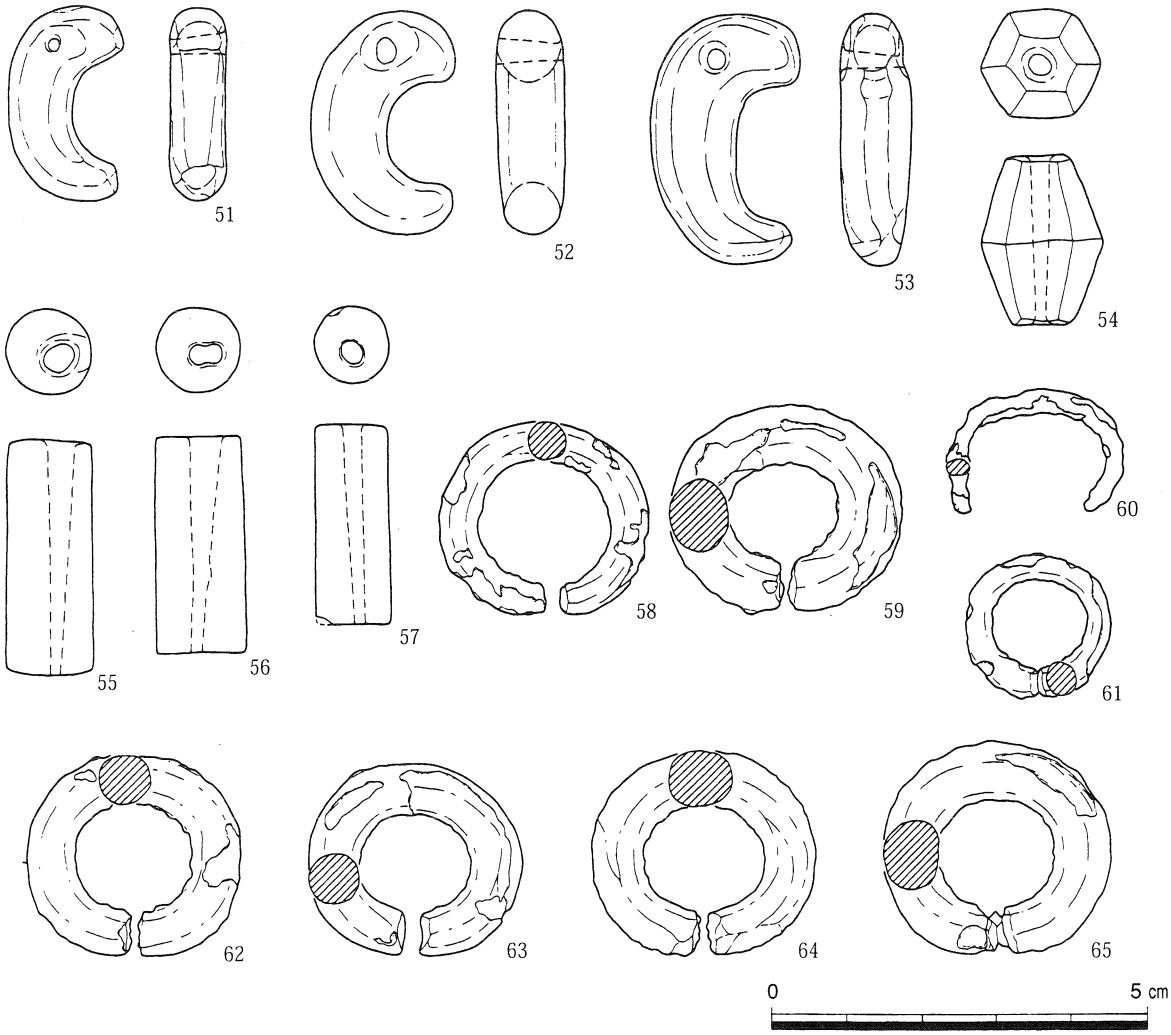
いずれも銅芯の耳環である。59・61・65は，部分的に剥離してはいるが，黒く酸化した銀箔が遺存しており，他のものにも銀箔が施されていたと考えられる。しかし，63のみは金箔が大部分遺存しており，その対であると考えられる62にも金箔が張られていた可能性がある。また，60は銅製であるが形態から耳環とは言いがたいように思われる。

小玉（66～112）

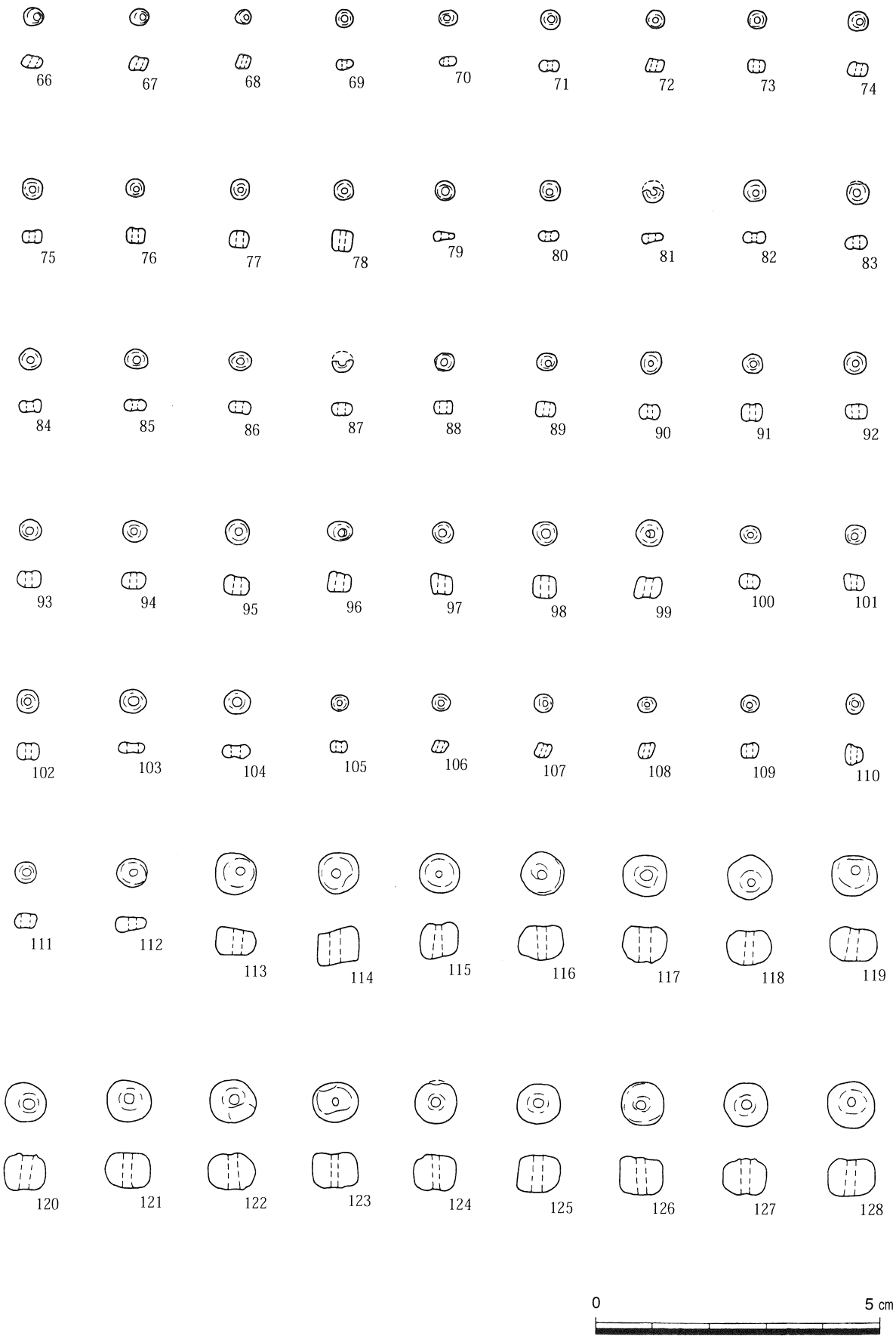
すべてガラス製であり，色調は水色（66～99），黄緑色（100～104），青緑色（105～111），群青色（112）の４種が見られる。それぞれで直径の範囲が少々異なり，水色は３㎜前後のものを中心として2.3～4.6㎜，黄緑色は3.5～4.5㎜，青緑色は3.0～3.7㎜，群青色は5.2㎜である。しかし，断面形状に色調との相関関係はみられず，基本的には偏平な球形を呈しているが，78・88・98のように方形を呈するものもある。

練玉（113～230）

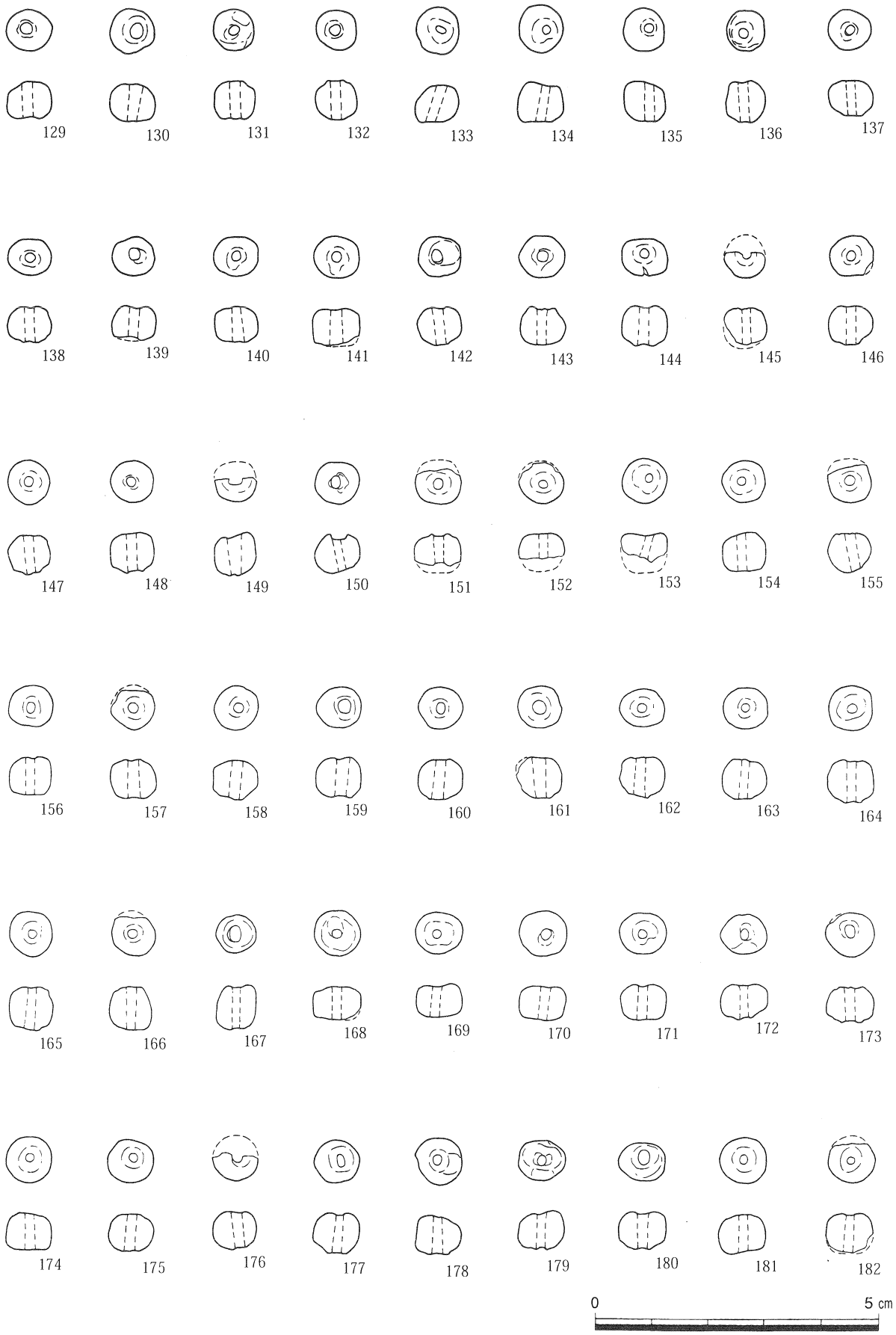
実測が可能であったものは118個体を数えるが，それ以外にも破損したものが多数出土している。直径は6.9～9.8㎜程度であり，7～8㎜前後のものがほとんどであるが，230のみは10㎜を超えている。色調はほとんどが黒色だが，褐色・灰色を呈するものも多い。これは焼成が不良なためであると思われるが，全体的に端面の磨滅が激しく光沢を持つものは少ない。断面の形状は，基本的に隅丸方形を呈している。しかし，113・114のように両端面が水平である臼玉状を呈するものもある。



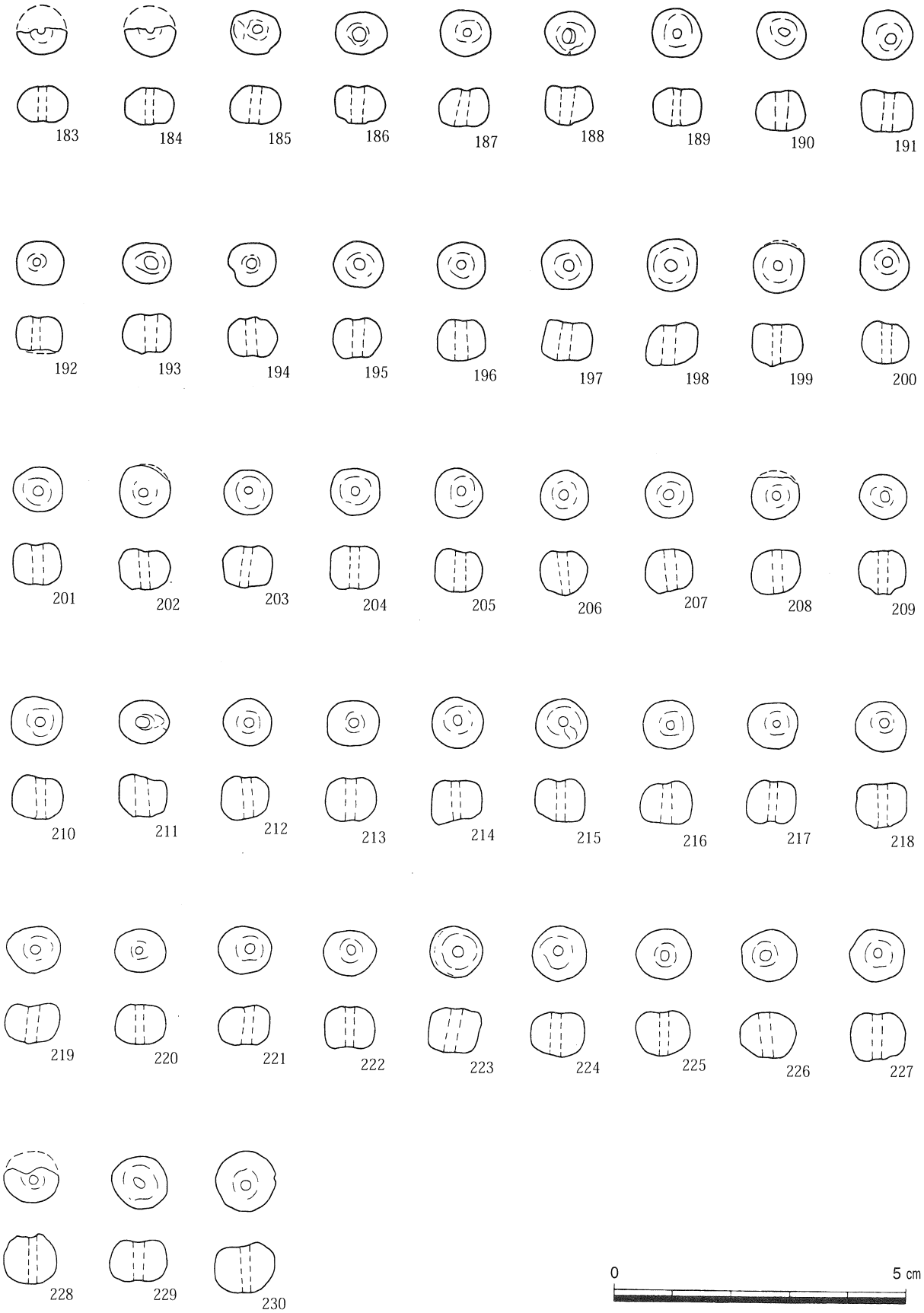
第17図　１号墳出土遺物（4）（Ｓ＝1／1）



第18図　１号墳出土遺物（5）（Ｓ＝1／1）



第19図　１号墳出土遺物（6）（Ｓ＝1／1）

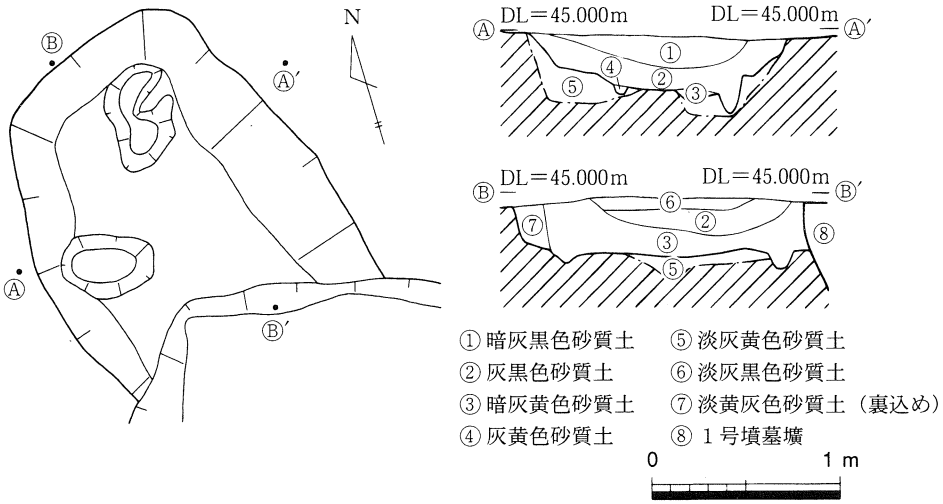


第20図　１号墳出土遺物（7）（Ｓ＝1／1）

古墳築造以前の遺構

ＳＴ101（第21図）

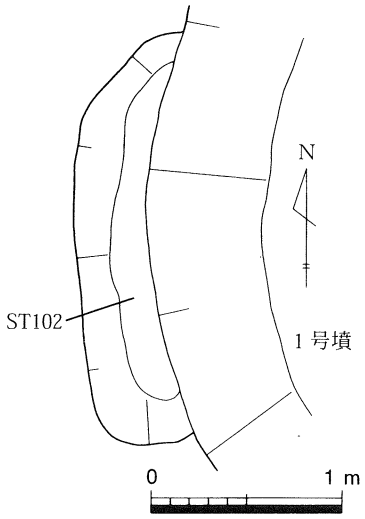
１号墳の墓壙によって切られた，長軸1.5m，短軸1.4m，深さは現存で0.3mを測る長方形の土壙墓である。出土遺物がなかったため，時期は不明である。



第21図　ＳＴ101平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

ＳＴ102（第22図）

１号墳の西側に位置し，周溝によって東半を切られる土壙墓である。長軸2.0m，短軸0.5mの長円形を呈する。深さは現存で0.2mである。出土遺物は皆無であった。



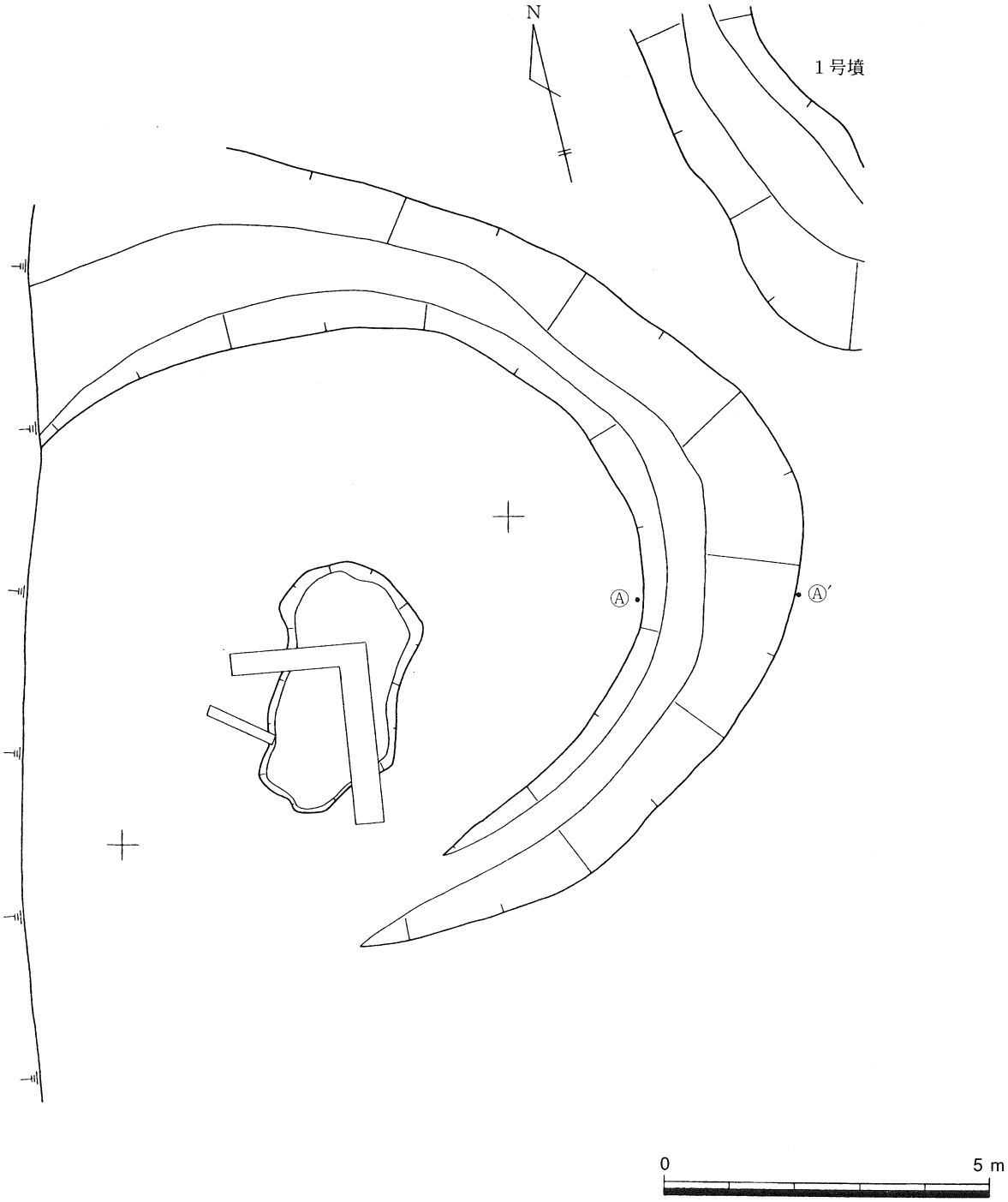
第22図　ＳＴ102平面図（Ｓ＝1／40）

2．天神山２号墳

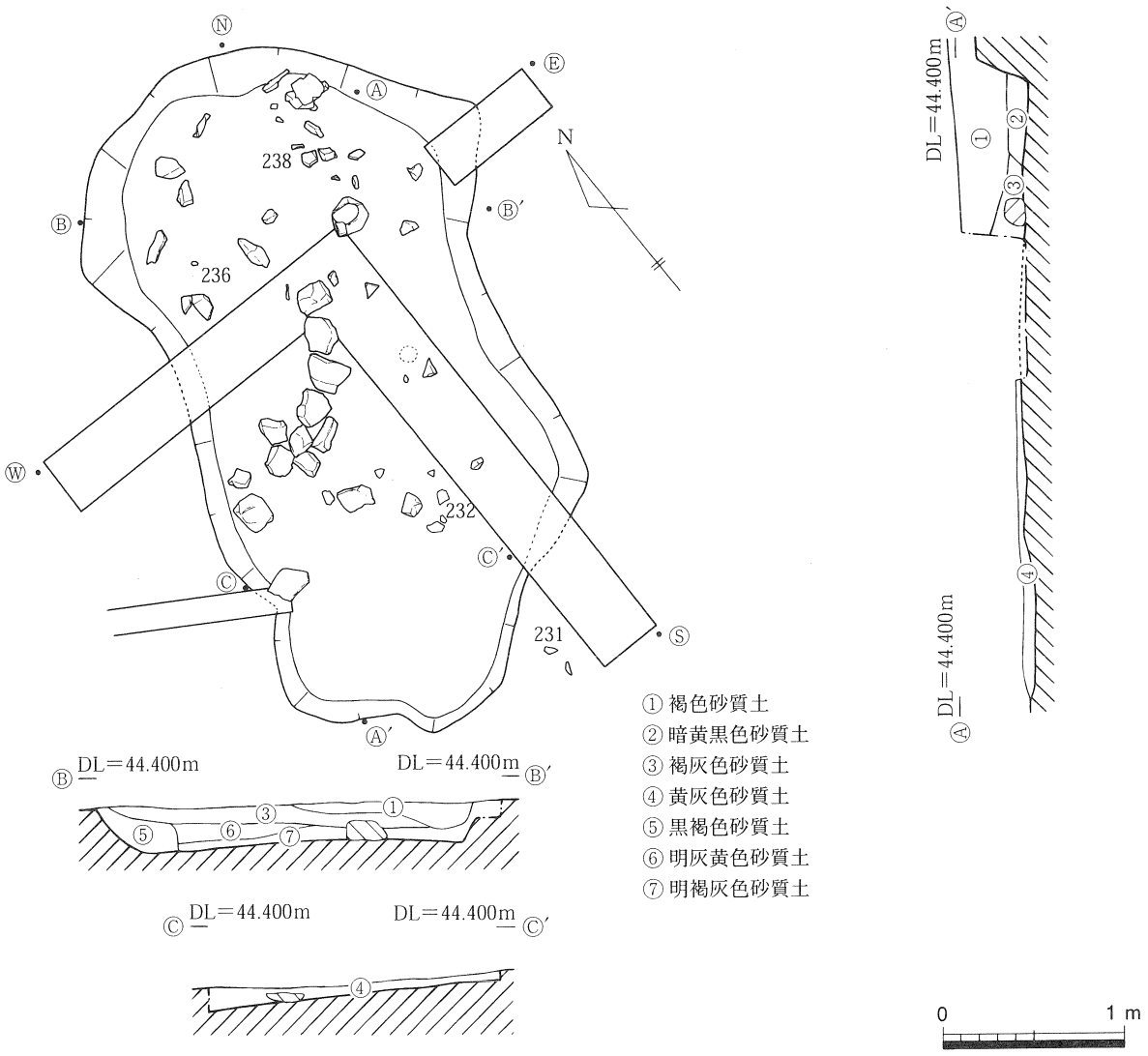
(1) 墳丘と外部施設

墳丘（第23図）

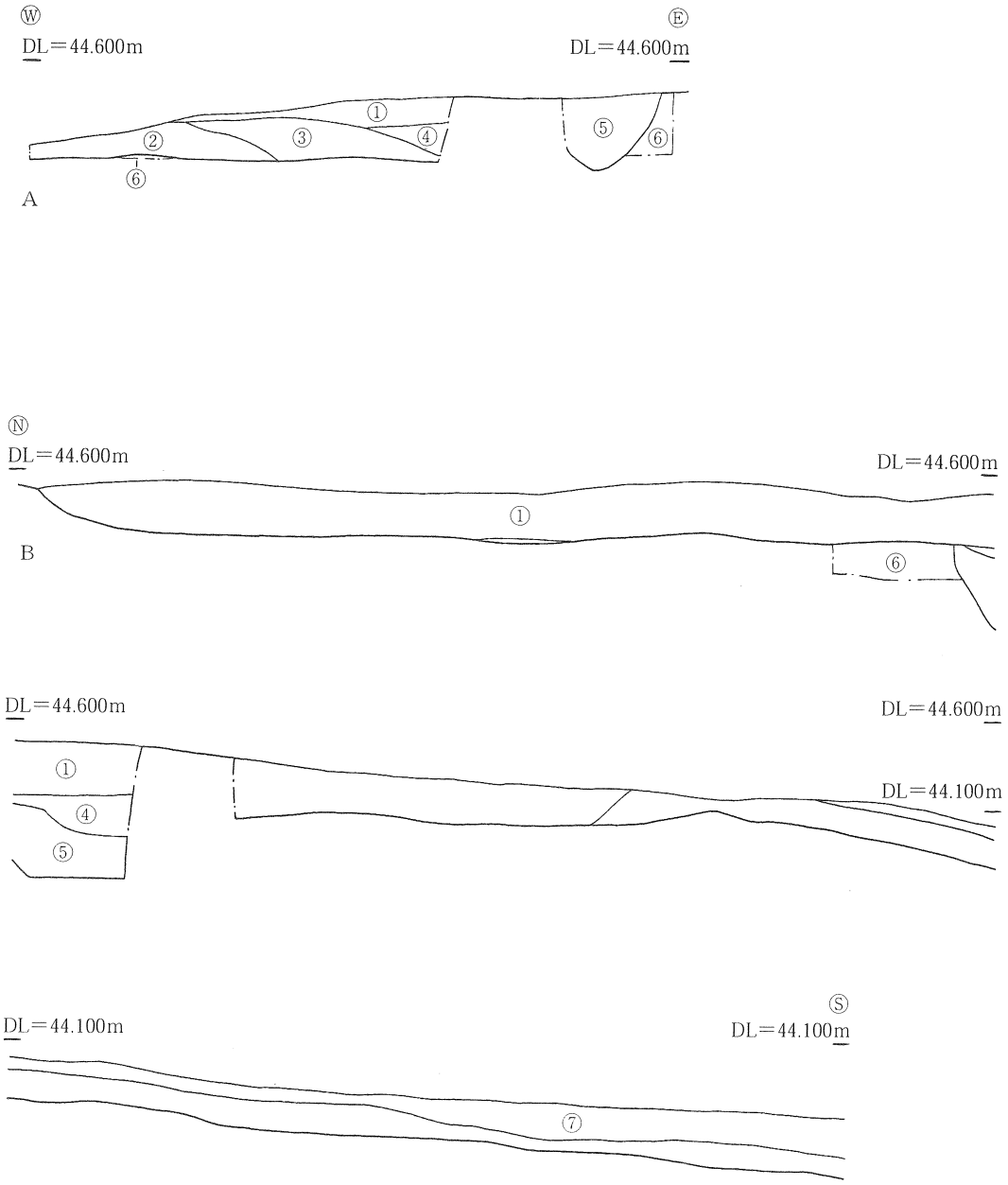
１号墳の南西に，１号墳に接するように構築された，直径約8.5mに復原される円墳である。丘陵の最高所から下った場所に立地し，墳裾の標高は43.500～43.750mを測る，墳丘の大半が削平によって失われており，墓壙および周溝と横穴式石室の石材の一部が残存しているのみである。なお，墳丘盛土は全く残っておらず，表土下は地山であった。



第23図　２号墳平面図（Ｓ＝1／100）



第24図　２号墳石室跡平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）



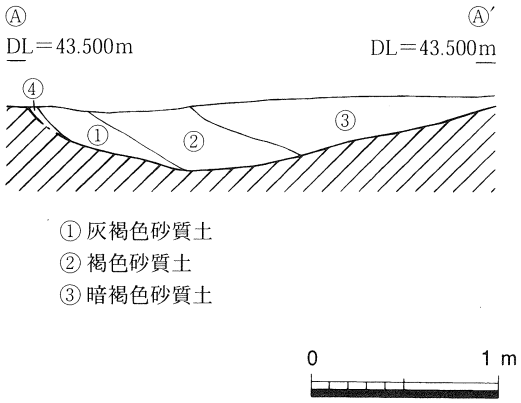
① 淡茶灰色砂質土
② 暗黄灰色砂質土
③ 茶灰色砂質土
④ 暗茶灰色砂質土（ST209埋土）
⑤ 暗黄黒色砂質土
⑥ 黄白色花崗岩風化バイラン土（地山）
⑦ 表土　腐敗土

0　1 m

第25図　2号墳墳丘土層図（S＝1／40）

周溝（第23, 26図）

周溝の西部を後世の開墾によって切られている。しかし，北部と東部は比較的残りが良いと思われ，南部も墓壙の位置から考えて，それほど大きな削平はなかったように思われる。したがって周溝の平面形態は，南西方向には掘削が及ばない，馬蹄形に近いものであったと考えられる。土層観察は周溝東部で行なった。ここでは幅約2.5m，深さ約0.4mを測り，内側から外側に向けて，段階的に埋没していった状況が窺える。



第26図　２号墳周溝土層断面図（Ｓ＝1／40）

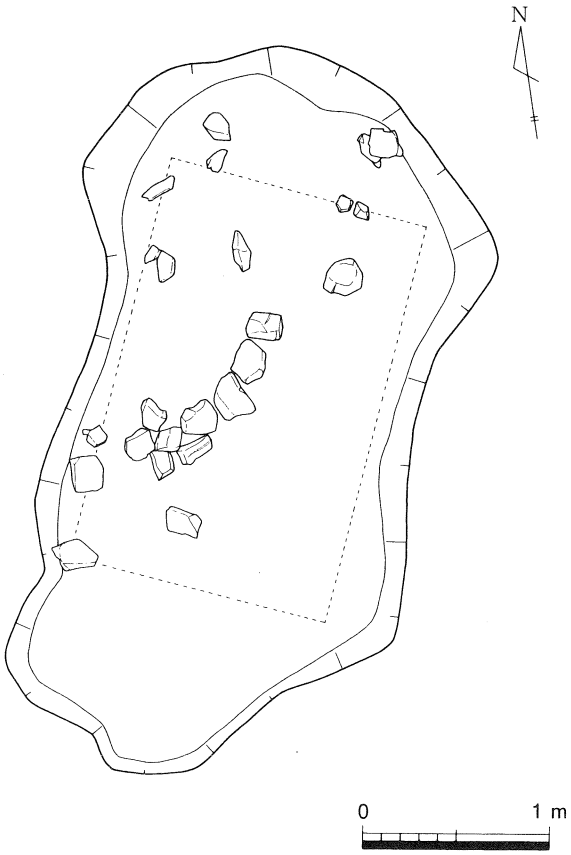
(2) 埋葬施設

石室・墓壙・墓道（第23, 27図）

２号墳の埋葬主体は石材の一部が墓壙内に散乱するのみで全く不明であるといわざるを得ないが，数少ない出土遺物から横穴式石室の存在が考えられる。しかし，石材も本来の位置を保っているとは到底言えず，また石材の大半が散逸しているような状況であり，墓壙から石室の主軸と規模を想定する他はない。

墓壙は長辺がＮ25°Ｅを指す。長軸約4.0m，短軸約2.0mで，一見いびつな形状を呈している。しかし，よく観察すると，第27図に示すように，約1.4m×約2.1mのほぼ南北に主軸を採り，南西方向に開口する石室と，そこから約1.0m南西方向に伸びる短い墓道あるいは羨道が復原できる。なお，床面の構造は不明である。

墓道についても本来の規模やそこに設けられた施設は一切不明である。



第27図　石室および墓道復原図（Ｓ＝1／40）

(3) 遺物の出土状況

石室内，周溝

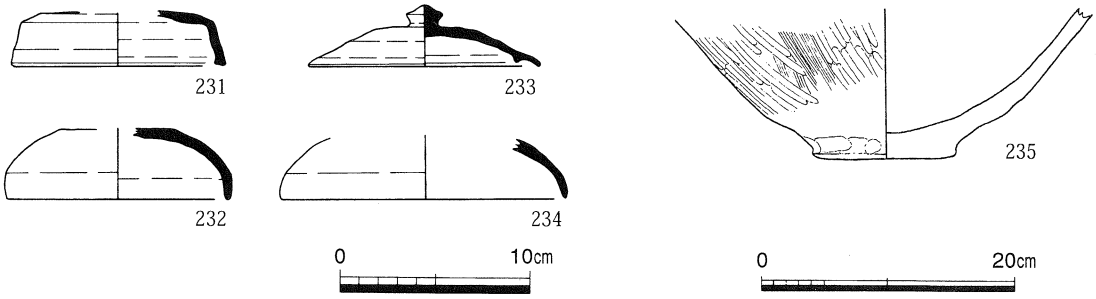
石室内からは須恵器片や鉄製品，切小玉が出土している。しかし，いずれも削平に伴って移動しており，原位置を保つものはないと思われる。なお，これら古墳に伴う遺物の他，下層の弥生時代の土壙墓群に伴うと思われる遺物が数点，墓壙内に混入している。

周溝出土遺物には須恵器が数点見られる。こちらも削平時に多くが散逸していると思われる。

(4) 出土遺物（第28,29図）

須恵器，弥生土器（231～235）

須恵器には石室内から出土した231，232，周溝内から出土した233，234がある。いずれも蓋であるが，231は壺の蓋であると思われる。233はやや時代が下り，天井部に宝珠状のツマミが付き，口縁内面に返りがつく。235は石室内から出土した弥生土器・底部であり下層からの混入品である。底径7.5cm，現存高7.5cmを測り，外面にハケの後を施している。ＳＴ208出土の鉢と同一個体の可能性がある。



第28図　２号墳出土遺物(1)（235のみＳ＝1／6，その他はＳ＝1／4）

銅製品

銅製品（237）

下層の遺構からの混入品であろう。現存長3.8cmを測り，断面形状は菱形である。先端および基部を欠損しているものと思われる。器種は不明であるが，銅鏃あるいは銅剣・銅矛等の先である可能性が考えられよう。

鉄製品

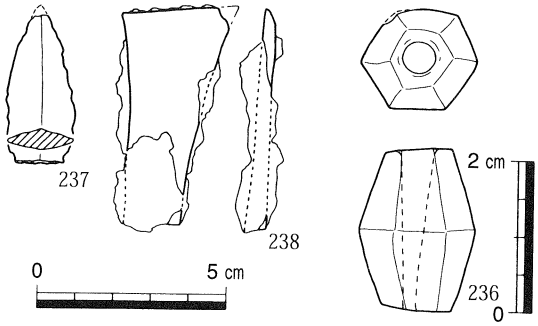
鉄鏃（238）

鑿頭式の鉄鏃であると思われるが，工具の可能性もある。刃の先端部分が欠損している。

装身具

切子玉（236）

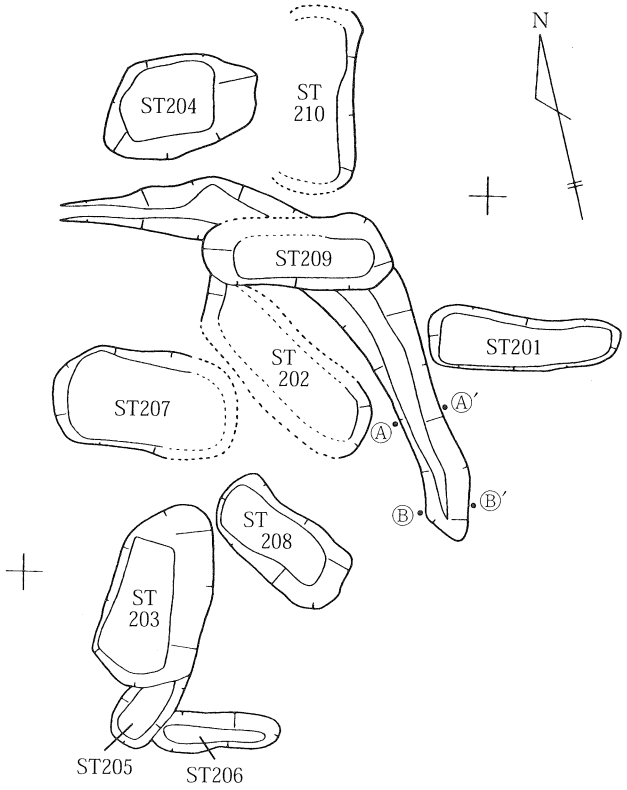
濃深緑色を呈する翡翠製である。穿孔方向は片側からなされている。長さ21.7㎜，直径15.2㎜を測る。断面は六角形であるが，角の１点を欠損している。



第29図 2号墳出土遺物（2）
（236のみS＝1／1，他はＳ＝1／2）

古墳築造以前の遺構（第23,30図）

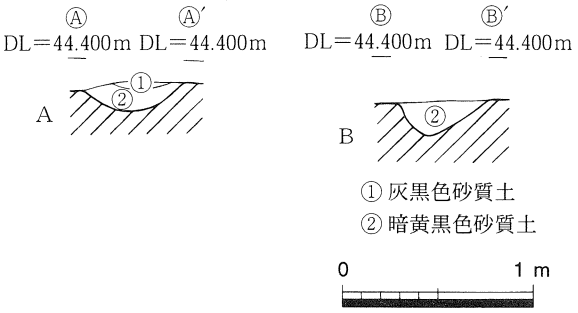
２号墳の下には周溝墓を含む弥生時代の土壙墓群10基が存在する。２号墳の墳丘盛土が削平されて全く依存していないため，地山上で同時に検出されている。その多くが切り合っており，また，埋土の色，質とも酷似しているため不明な箇所も多い。主軸はN40°W前後を採るＳＴ202，208，とそれに直交するＳＴ205の１群と，最高所にあり，Ｅ15°Ｎ前後を採り，傾斜に直交するＳＴ201に平行するＳＴ203，204，206，207，209およびそれに直交するＳＴ210という１群の２パターンあるが，その方位はいずれも東西でも南北でもなく，またＳＴ201を除いては傾斜に直交もしくは平行するわけでもない。なお，周溝がどの土壙墓に伴うのかは不明である。



第30図　２号墳下層土壙墓群平面図（＋は第23図の＋に対応，Ｓ＝1／100）

周溝（第30, 31図）

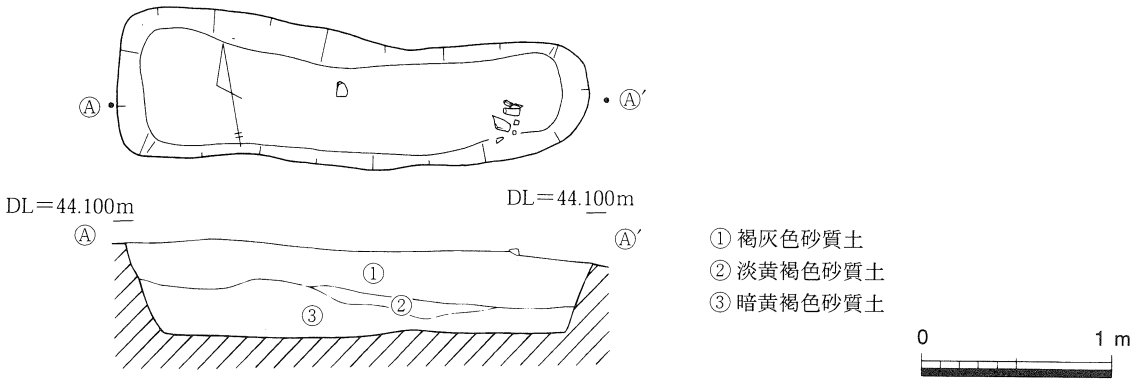
位置的には上層の石室奥壁下にあたり，土壙墓群の間を縫うように，円弧を描く。現存長約8.1m，全幅約0.4mで，両端は南側が丸く収まっているのに対し，西端は削平され，消滅している。



第31図　周溝墓周溝土層（S＝1／40）

ＳＴ201（第32図）

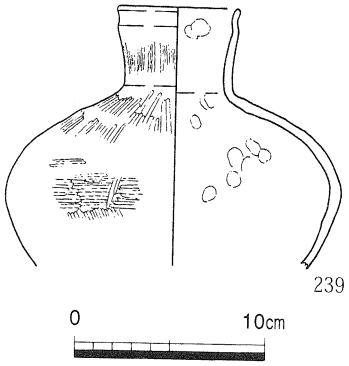
周溝の外側において単独で検出された土壙墓であり，土壙墓群中，最高所の平坦地に立地する。全長2.5m，全幅0.6～0.8mを測り，主軸は尾根筋に直交する。遺物は弥生土器片が数点出土しているが，器種を特定できるものもなく，また図化できるものも皆無であった。



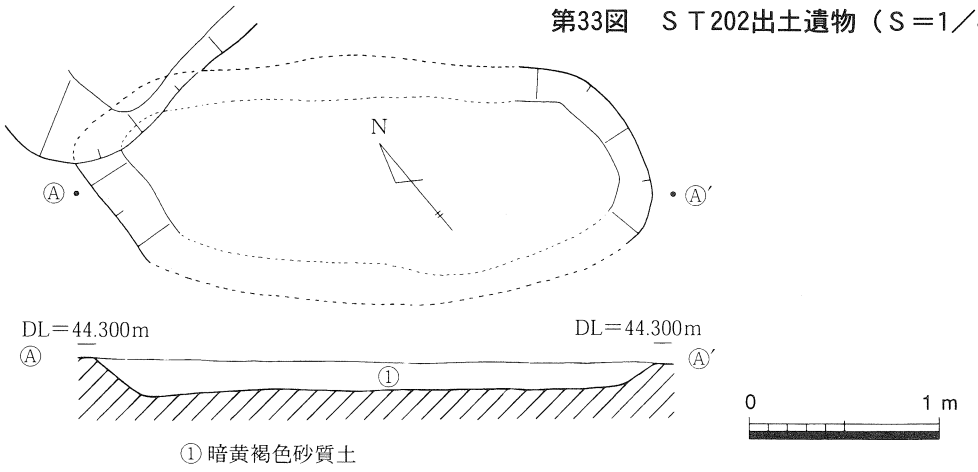
第32図　ＳＴ201平面・土層断面図（S＝1／40）

ＳＴ202（第33, 34図）

周溝の内側に，周溝に接するような形で検出した土壙墓であり，ＳＴ209に切られている。埋土は周囲の土と酷似しており，掘削は困難を極めた。また，弥生時代後期初頭の細頸壺（239）が１点出土している。口縁下部にはやや強いナデがみられる。また，頸部下半外面にはハケを，体部は丁寧なヘラミガキを施す。



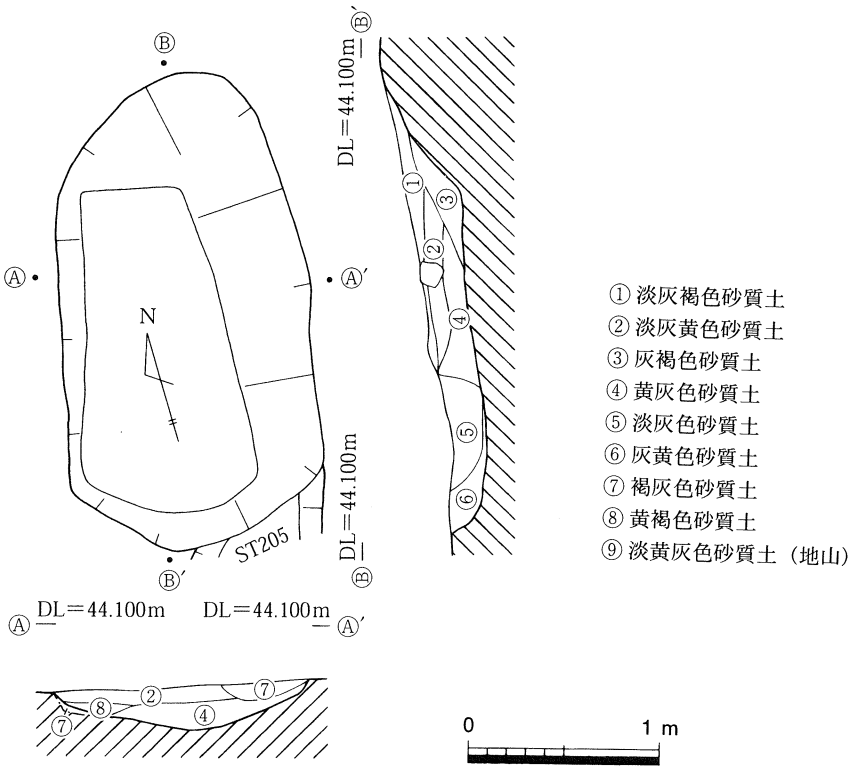
第33図　ＳＴ202出土遺物（S＝1／4）



第34図　ＳＴ202平面・土層断面図（S＝1／40）

ＳＴ203（第35図）

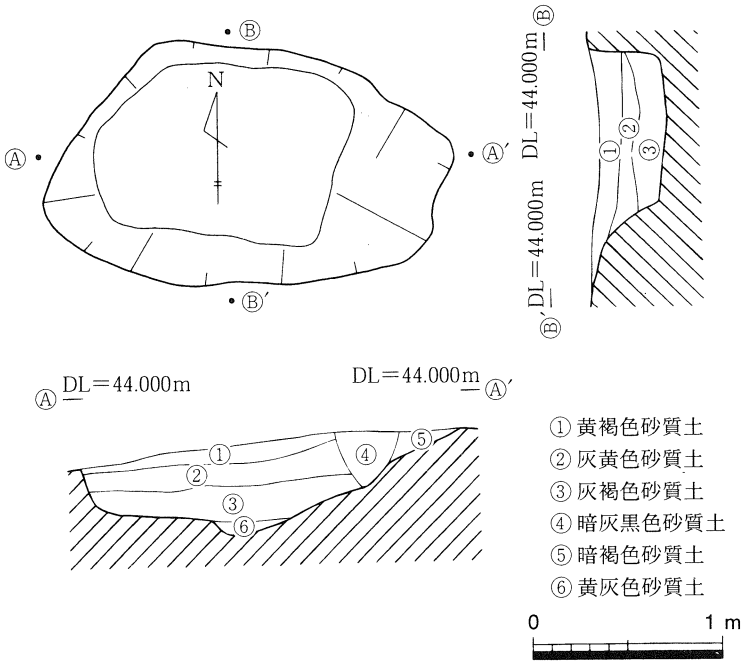
ＳＴ208の西にＳＴ208に接するように穿たれた土壙墓で，ＳＴ205を切っている。長軸約2.5m，短軸約1.3mである。



第35図　ＳＴ203平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

ＳＴ204（第36図）

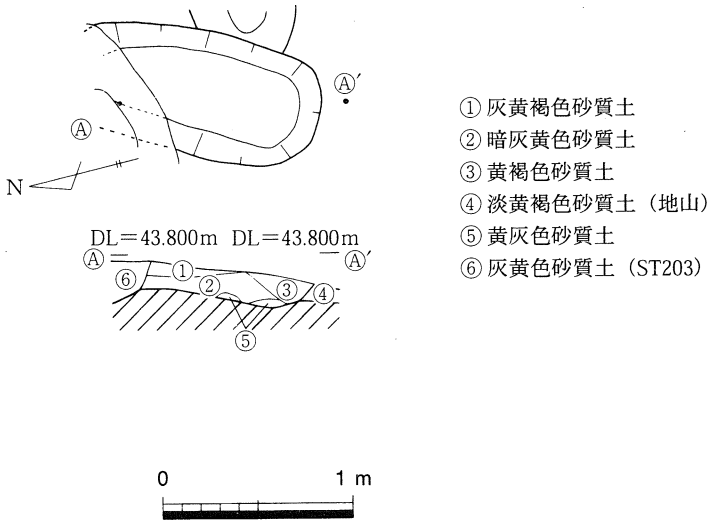
周溝の北，ＳＴ210の西に立地する土壙墓で，長軸約2.0m，短軸約0.7mを測る。出土遺物には細頸壺の口縁部，甕と思われる口縁部の破片が出土しているが，いずれも砕片のため，図化できなかった。



第36図　ＳＴ204平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

ＳＴ205（第37図）

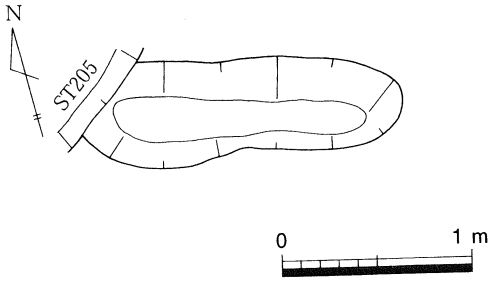
ＳＴ203の南にＳＴ202などに直交して立地するＳＴ205は，ＳＴ206を切り，ＳＴ203に切られている。長軸は現存で約2.0m，短軸約0.9mの土壙墓である。



第37図　ＳＴ205平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

ＳＴ206（第38図）

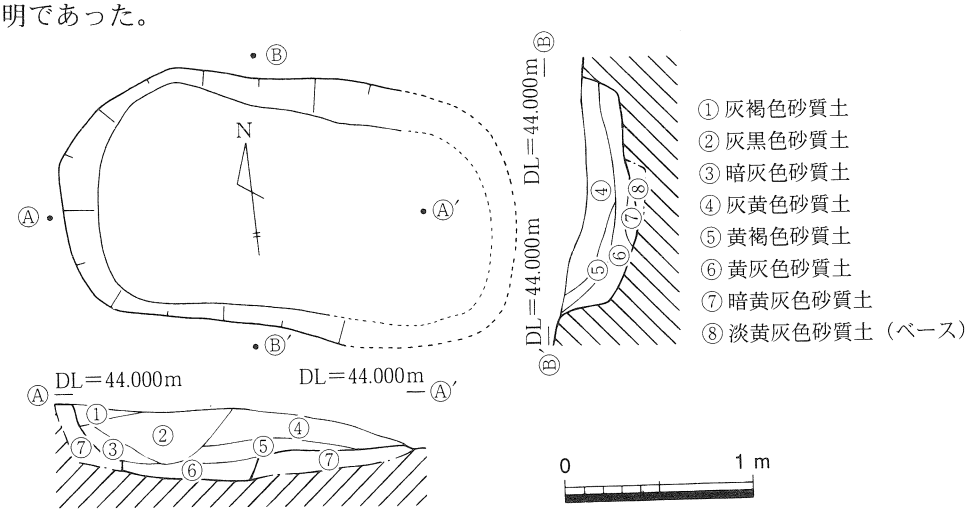
ＳＴ205の西に位置し，主軸はＳＴ201などに平行する土壙墓である。西側の肩をＳＴ205に切られる。長軸約1.6m，短軸約0.6mを測る。



第38図　ＳＴ206平面図（Ｓ＝1／40）

ＳＴ207（第39図）

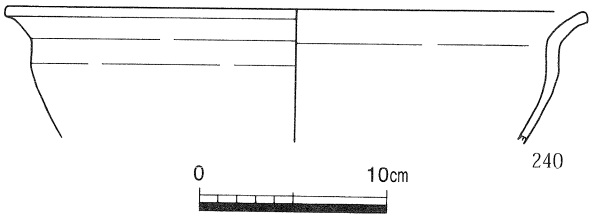
ＳＴ202の西に位置し，ＳＴ202に接するように立地する土壙墓で，主軸をＳＴ201などと平行にする。長軸約1.4m，短軸約1.3mと幅広である。ＳＴ202同様，埋土が周囲の土に酷似し，特に東の肩が不鮮明であった。



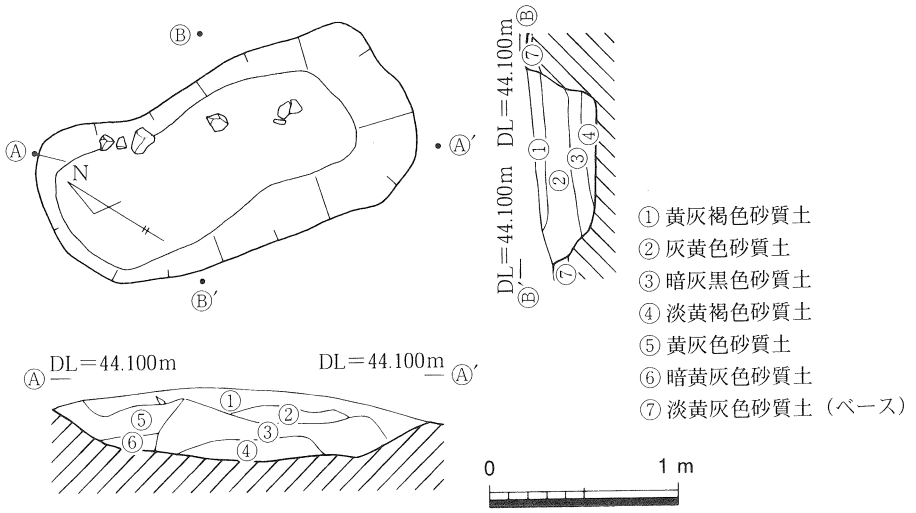
第39図　ＳＴ207平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

ＳＴ208（第40,41図）

ＳＴ203の東に位置し，ＳＴ202などと主軸を同じにする土壙墓である。長軸約2.0m，短軸約0.9mを測る。鉢（240）が１点出土している。内湾気味に立ち上がる体部から，口縁部がやや外反して広がる。復原口径31.2cm，現存高7.4cmを測り，調整は磨滅のため，内外面とも不明である。土器棺の蓋であるかも知れず，また胎土や色調から２号墳出土の235と同一個体の可能性が考えられる。



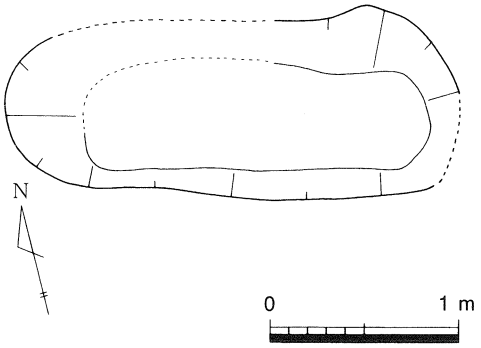
第40図　ＳＴ208出土遺物（Ｓ＝1／4）



第41図　ＳＴ208平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

ＳＴ209（第25,42図）

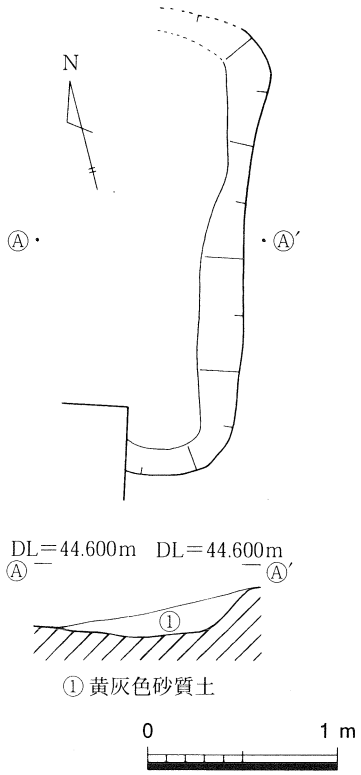
ＳＴ202とカドを接するように立地し，周溝を切っている。ＳＴ201などと主軸を同じくする土壙墓である。長軸約2.4m，短軸約0.9mを測る。土壙墓群中では端正な印象を受ける平面形である。



第42図　ＳＴ209平面図（Ｓ＝1／40）

ＳＴ210（第43図）

ＳＴ204，209および周溝に接するように立地し，ＳＴ201などに主軸を直交する。東辺以外の肩が不鮮明ではあるが，概ね長軸約2.5m，短軸約1.0m程度に復原されよう。



第43図　ＳＴ210平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

3．天神山３号墳

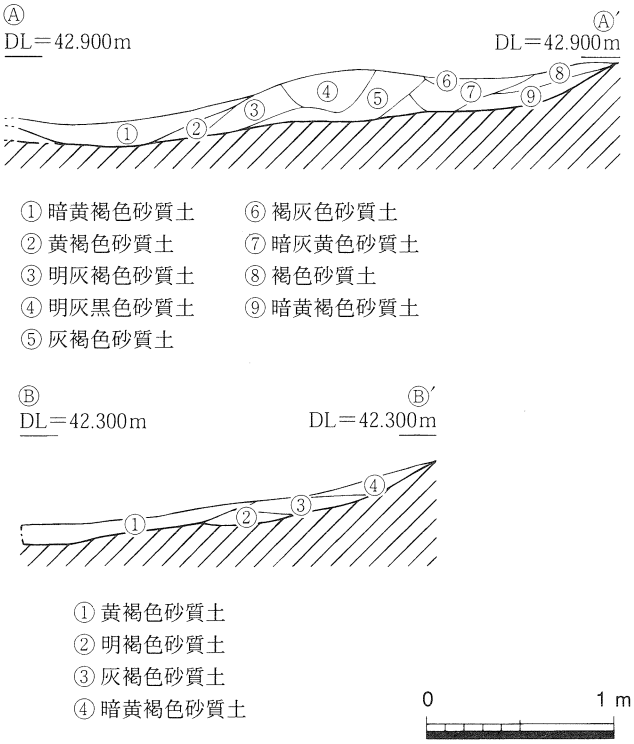
(1) 墳丘と外部施設

墳丘（第45図）

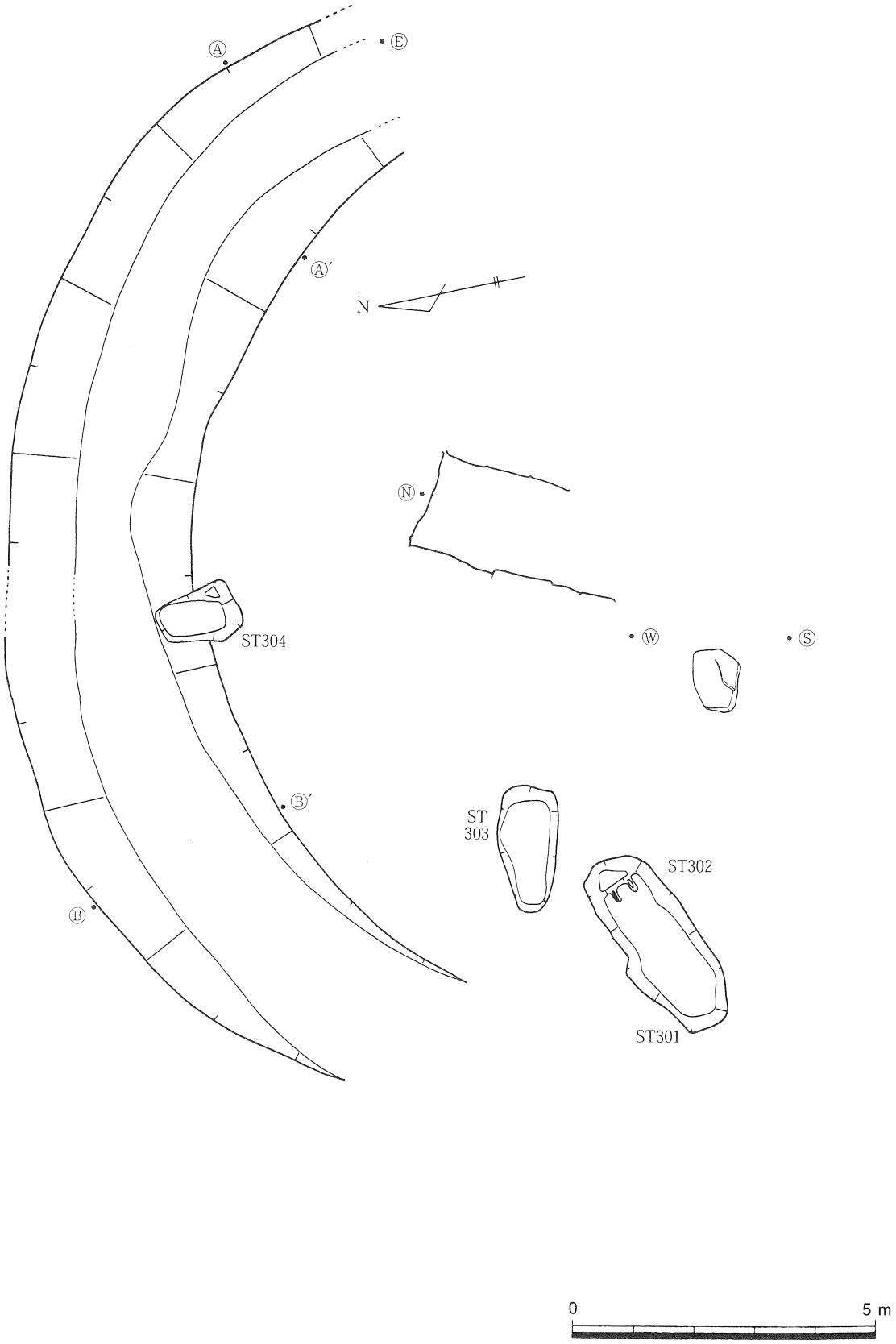
３号墳は天神山古墳群の最南端，１号墳から距離にして約30m，標高で約２m下った緩傾斜地に位置し，その南東には神社の境内が立地する。墳丘の上半および南半を削平されているが，残された周溝から約12mの円墳に復原される。玄室は墳丘のやや北寄りに配置され，墳丘の中心には羨道が位置するものと思われる。基底部の標高は北部が高く約42.500～南部が低く約42.000mを測る。墳丘の残りは比較的良く，構築状況をある程度把握することができる。第49図のとおり，表土下の⑮～㉒および㉖が墳丘盛土であり，それらは堅く締め固められている。そして墓壙を穿ち，石室を構築した後，石室の裏込めとして㉓～㉕を埋め戻している。また，Ⅰ－①～Ⅲ－①は石室が破壊される以前から石室内に堆積していた土であり，㉘，㉙は石室破壊後に流入した土である。

周溝（第44図）

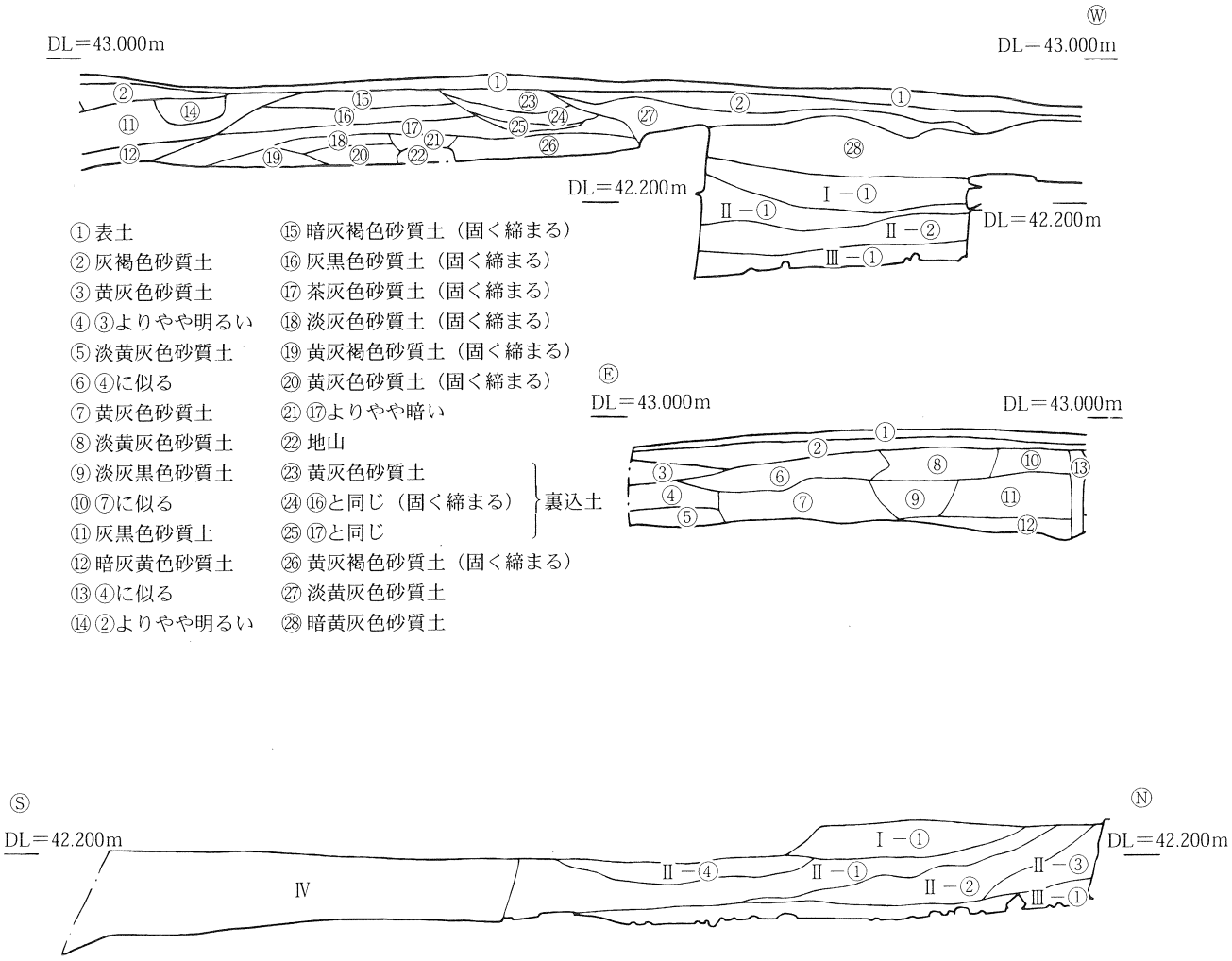
周溝は全体に削平されており，特に南西から南にかけては壊滅状態である。そのような中で北および東側は比較的残りが良く，周溝底とそこからの立ち上がりを内側および外側で確認ができた。土層はⒶ－Ⓐ′，Ⓑ－Ⓑ′で観察した。Ⓐ－Ⓐ′間の周溝は幅約0.4m，深さ約0.2mである。墳丘側から埋没していく状況が読み取れる。Ⓑ－Ⓑ′間では後世に西の肩が削平された後に①が堆積しており，幅は不明であるが，底面の立ち上がりから推測すれば，約0.3m程度に復原できる。深さは約0.1mである。



第44図　３号墳周溝土層断面図



第45図　3号墳平面図（S＝1／100）

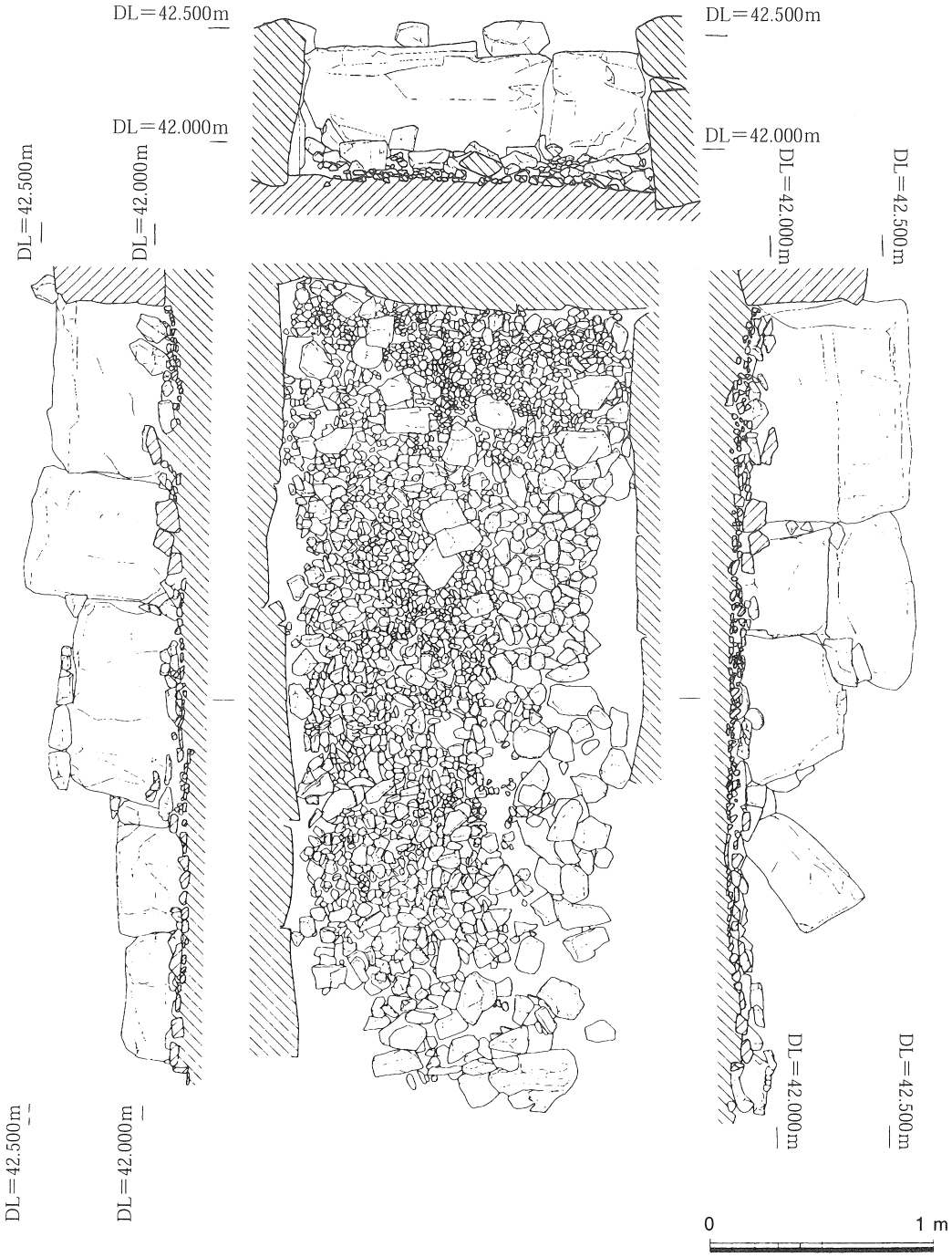


① 表土
② 灰褐色砂質土
③ 黄灰色砂質土
④ ③よりやや明るい
⑤ 淡黄灰色砂質土
⑥ ④に似る
⑦ 黄灰色砂質土
⑧ 淡黄灰色砂質土
⑨ 淡灰黒色砂質土
⑩ ⑦に似る
⑪ 灰黒色砂質土
⑫ 暗灰黄色砂質土
⑬ ④に似る
⑭ ②よりやや明るい
⑮ 暗灰褐色砂質土（固く締まる）
⑯ 灰黒色砂質土（固く締まる）
⑰ 茶灰色砂質土（固く締まる）
⑱ 淡灰色砂質土（固く締まる）
⑲ 黄灰褐色砂質土（固く締まる）
⑳ 黄灰色砂質土（固く締まる）
㉑ ⑰よりやや暗い
㉒ 地山
㉓ 黄灰色砂質土
㉔ ⑯と同じ（固く締まる）
㉕ ⑰と同じ
㉖ 黄灰褐色砂質土（固く締まる）
㉗ 淡黄灰色砂質土
㉘ 暗黄灰色砂質土

Ⅰ－① 黄褐色砂質土
Ⅱ－① 灰褐色砂質土（粒子細かくよく締まる。旧墳丘盛土及び崩落したもの）
Ⅱ－② 淡灰褐色砂質土（崩落土だがややさくさく。数層に細分される）
Ⅱ－③ 灰褐色砂質土（①より細子大きいが固くしまる）
Ⅱ－④ 灰黄褐色砂質土（細子大きくしまらない）
Ⅲ－① 暗黄色砂質土（初期流入土）
Ⅳ　暗黄色砂質土（近年の盗掘坑）

0　1 m

第46図　3号墳墳丘及び石室内土層断面図（S＝1／40）



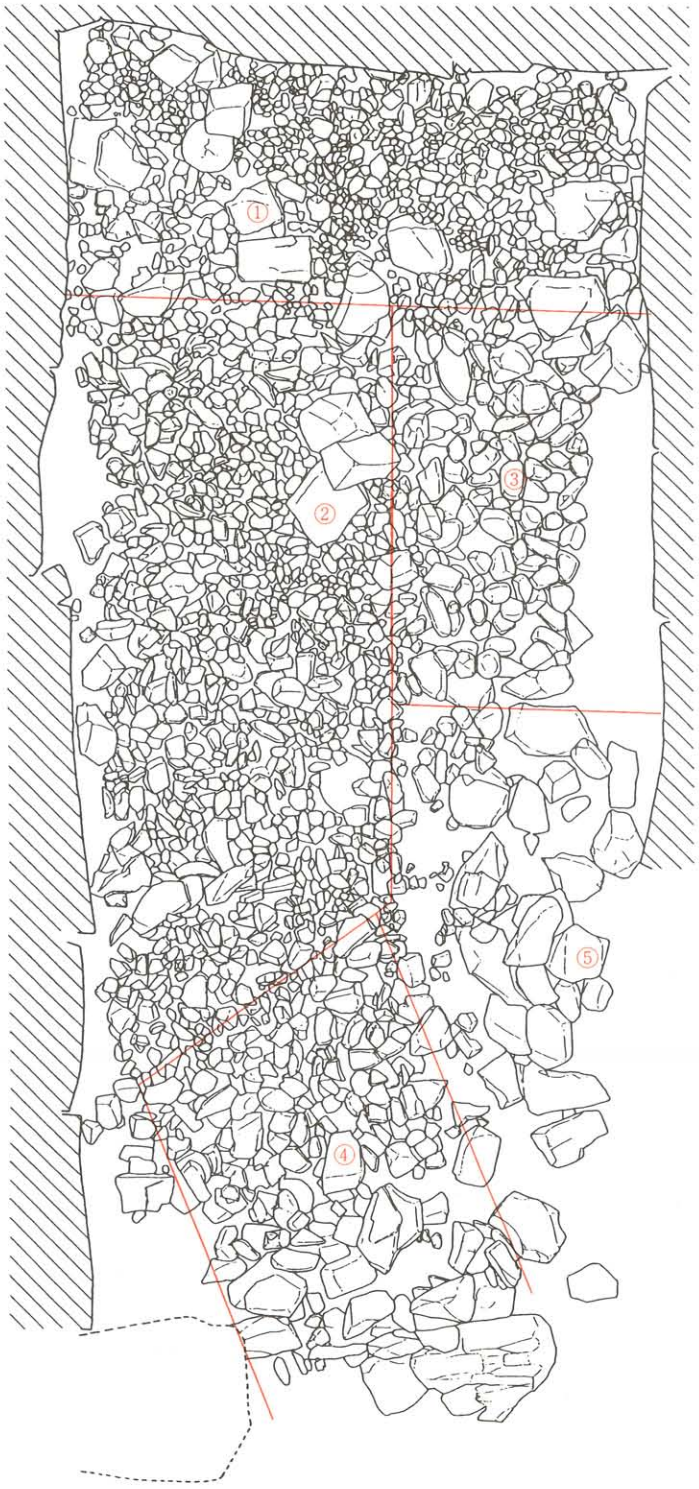
第47図　３号墳石室平・断面図（Ｓ＝1／30）

(2) 埋葬施設

石室（第46～49図）

３号墳の埋葬主体は主軸をＮ30°Ｅに採る南西方向に開口する横穴式石室である。石室側壁は右側壁が５石，左側壁が３石を残し，右側壁は玄門までの基底石を残していると考えられる。平面形態は墓壙底に残された石材の抜取り跡および墓壙の形状から右片袖式である可能性が高く，石室内法は玄室長が約3.6m，玄室幅は奥壁部で約1.5m，中央部で1.3m，玄門部で1.2mを測る。平面プランは胴張りのない，長方形を呈する。高さは現存で約60cmである。石室は玄門石によって羨道と玄室に分けられていたようである。羨道長は1.4m以上，羨道幅は約1.2m程度であったと思われ，仕切り石は削平の際に割られ，その一部が残存しているに過ぎない。

床面には礫が敷き詰められる。床面のレベルは奥壁部が最も高く，奥壁から約1.2mあたりまで緩やかに傾斜し，そこから開口部に向かってほぼフラットに広がり，玄門部付近から再び高くなる。礫の大きさは数cm大～掌大までとばらつきがある。しかし，ここでも１号墳に見られたようなまとまりが見られ，礫床の分布は第46図に示すように５つのブロックに分割される。①は奥壁に沿って幅40cm程度の範囲に並べられる。１cm程度のものが大半を占め，間に



第48図　３号墳石室内礫床配置状況（Ｓ＝1／20）

拳～掌大の角礫が置かれている。②は①よりも一回り大きい礫が中心をなす。東辺は①の南辺のほぼ中央から南へ約２ｍ，西辺は右側壁に沿って①の西南端から2.1ｍの台形に囲まれた範囲である。③は①の南側，②の東側にあたり，境界上には掌大の石が配される。①の南辺から南へ約1.1ｍの範囲で長方形に囲まれている。東辺は左側壁からやく20㎝程度離れており，その東に礫は敷かれていない。礫の大きさは②より二回りほど大きいものが中心となり，西辺付近には①の小礫がかぶさっている。④は②を南に延長した範囲で，西辺は②の西辺からから東へ約25°振った延長上であり，南端を袖石に当てていると思われる。一方，東辺は②の東辺を一直線に約1.2ｍ伸ばしたラインで，礫床⑤の範囲は不整形な四角形に囲まれている。礫は③より一回り大きいものが中心となり，まばらに拳大のものが配される。⑤は西辺を②および④の東辺，北辺は③の南辺に接する。南は仕切り石までで，幅約50㎝程度の範囲に囲まれた長方形のエリアである。石は全体に大きく拳大のものが中心となるが，配置はまばらで間隙が目立つ。また西辺付近には④の小礫が混じる。④および⑤は礫床下に須恵器が見られることから追葬に伴って新たに礫床が敷設されたものであることが分かる。

両側壁および奥壁は下から１～２段が現存するのみである。基底石に用いられた石材は総じて１号墳のものより大きく，人頭大よりやや大きいもの～上半身大の塊石が中心となる。配置としては上半身大の石材が奥壁および両側壁の奥から３石に使用され，小ぶりな石材は玄門側に配されている。平坦面を内側に揃えて小口積みあるいは横長積みされているが，左側壁の奥から４石目の石材は，本来横積みされていたものと思われる。壁体は，まず基底石が据えられ平面プランを確定，そこから持ち送り気味に１～２段積み上げて一度，高さを揃えていることが現況から窺える。なお，石室側面に控え積みは行なわれておらず，裏込め土が充填されている。

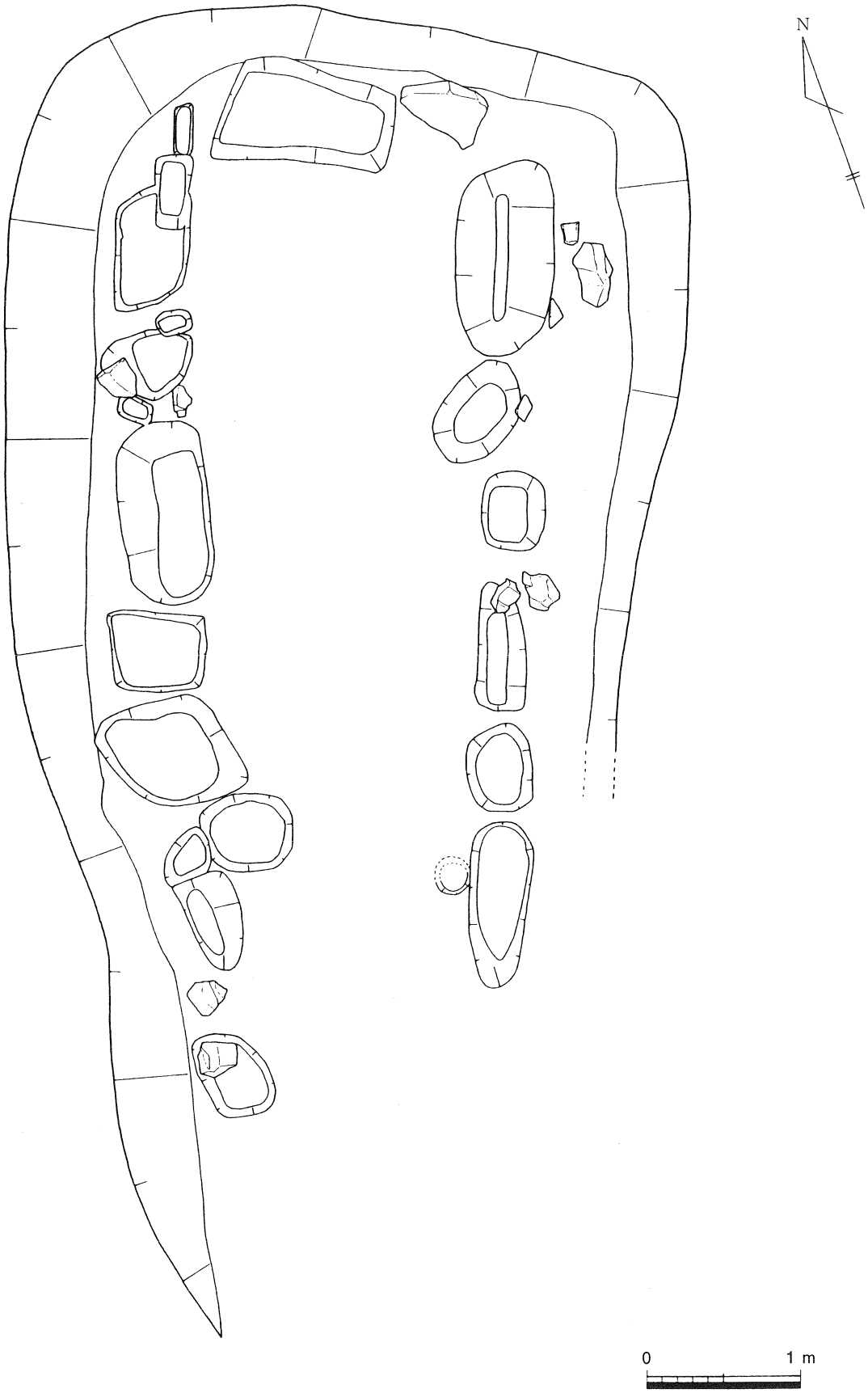
袖石は現存しておらず，その積み方等を観察することはできないが，墓壙底に残された抜取り後の配置では右側壁より約30㎝程度内側にせり出していたようである。一方，左側壁は奥壁からほぼ一直線に並べられていることからこの石室は右片袖式である可能性が高い。玄門幅は対応するであろう石材の抜取り跡から，80～90㎝程度であったと思われる。

石室内の土層は第46図によると，横方向の堆積はほぼ水平堆積に近いことから，土は奥壁側から流れ込んできたものであることが分かる。Ⅲ－①は初期流入土と考えられ，玄室中央付近から玄門部にかけて炭化物を多く含んでいる。Ⅳは近年の盗掘坑である。

墓壙は石室石材の背後を石室の平面プランと同じく右片袖式に穿たれている。このことは石室の形態が墓壙掘削時において，すでに決定していたことを示しているのであろう。墓壙の深さは現存で約80㎝である。

閉塞施設・墓道

閉塞施設・墓道とも削平によって破壊されており，その痕跡を留めていない。

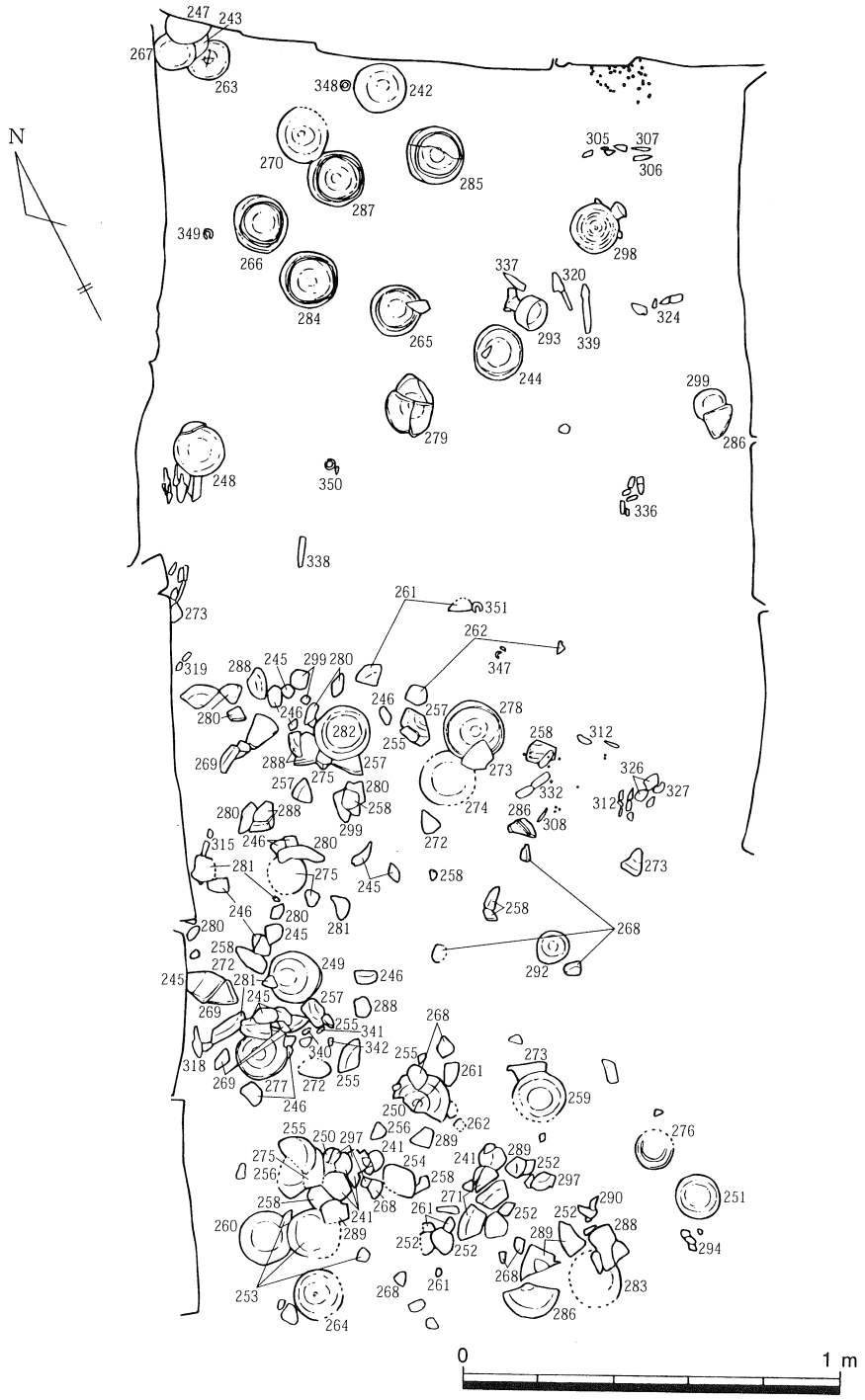


第49図　３号墳墓壙平面図（Ｓ＝1／30）

(3) 遺物の出土状況

石室内（第50, 51図）

遺物は石室内から須恵器，鉄製品，耳環，玉類などが多く出土している。石室の大半が破壊されているにもかかわらず，床面の残存状況は極めて良好である。玄室内に限ってみれば盗掘坑は見られず，削平時においても転落した石材が遺物に与えた影響は小さいものと思われる。



第50図　３号墳石室内遺物出土状況（Ｓ＝1／10）

須恵器は，北半部では完形品が多く出土している反面，南半では破損しているものが目立つ。これらも接合によって関係やそれに近い形になるものも多い。また，それらの破片の分布も１号墳に比べて近接している印象が強い。いずれにしても，追葬に伴って副葬品の片付けが行なわれているとは考えにくく，１号墳同様，一部の副葬品，特に須恵器が棺台に転用されている可能性が高いと思われる。

鉄製品では，鉄鏃が西壁に沿って多く出土しているのに対し，刀子は壁から離れて出土しているものが多い。馬具は玄室の中央の東壁付近から出土している。

装身具について耳環は５点出土している。うちの１点（347）は小型である。そのうち347を除く４点は２点ずつ，近い位置からまとまって出土した。石室北角と石室中央部北東寄りからである。耳環同様，葬儀に伴って死者へ着装されたと考えられる管玉は７点出土している。これらの出土地点は５点が石室西壁やや南寄り，２点が玄門付近であった。小玉は奥壁の東端付近と玄室中央付近からまとまって出土した。本来はそれぞれ繋がれて一連のものだったのかもしれない。

これら副葬品の配置と先述の礫の分布を合わせて棺配置を想定すると，第51図のようになり，棺は４体配され，追葬のたびに以前の棺が複雑に移動されていく様子が推察されるのである。なお，追葬過程を復原した経緯については，礫床等を含めて第４章「まとめ」で再度検討したい。

石室外

石室外では周溝の東部から甕が数点出土しているのみであり，すべて同一個体のものであると思われる。しかし，出土状況から墳丘および周溝の削平時に多くを散逸していると考えられる。

（4）出土遺物

須恵器（第52,53図）

蓋坏（241～263）

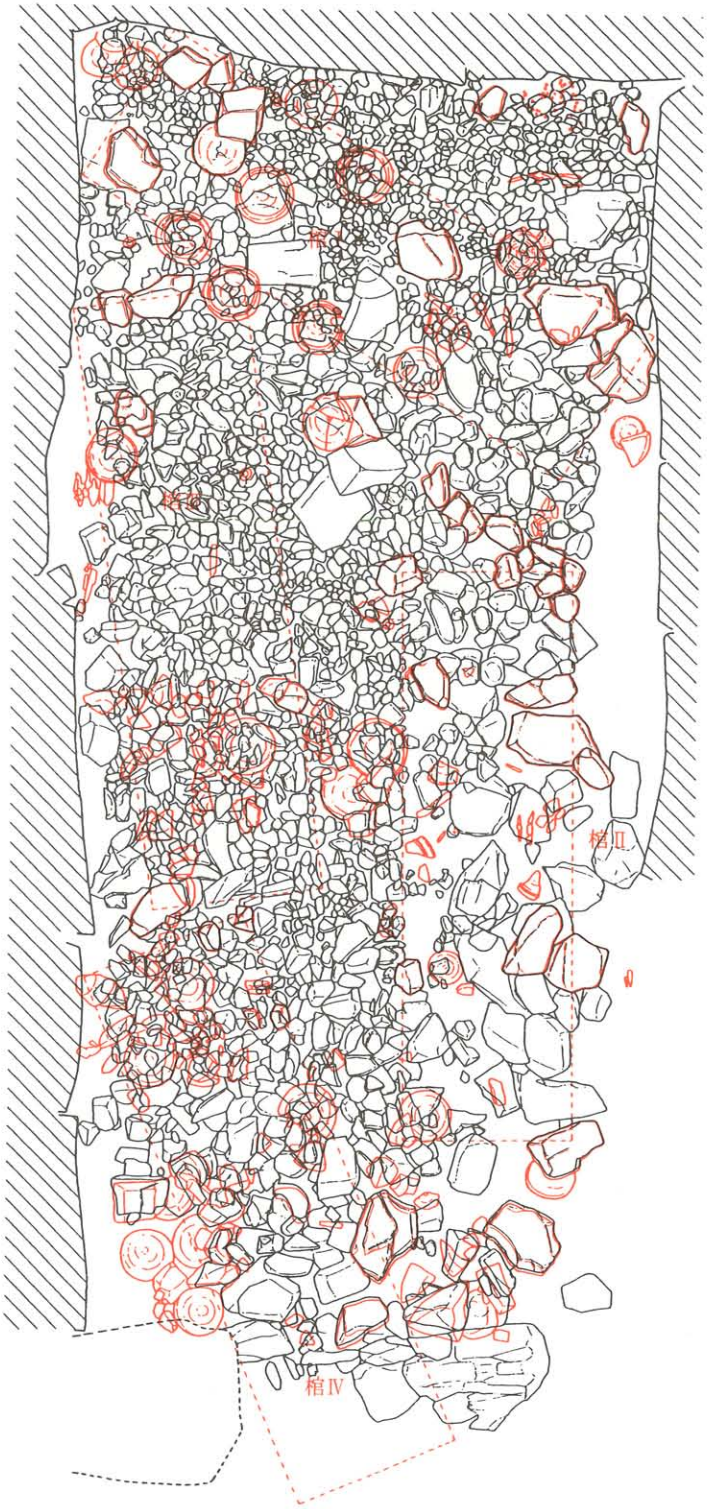
蓋は口径11.5～14.9cm，器高4.7cmと法量にばらつきがある。形態的にも天井部の丸いものや平らなもの，口縁端部に段をもつもの（250，257，256，268）などがある。また263は天井部外面にヘラ記号を持つ。

身は口径10.4～15.0cm，器高3.5～4.8cmと蓋同様にばらつきがある。口縁部の形態もまっすぐ上方に伸びる284，斜め上方から角度をかえて上方に伸びるもの（278，286），内傾するもの（273，274）があり，口縁部や受け部の大きさも大小様々である。269，286には自然釉がかかり，274は口縁部に沈線が，286は底部外面にヘラ記号が見られる。

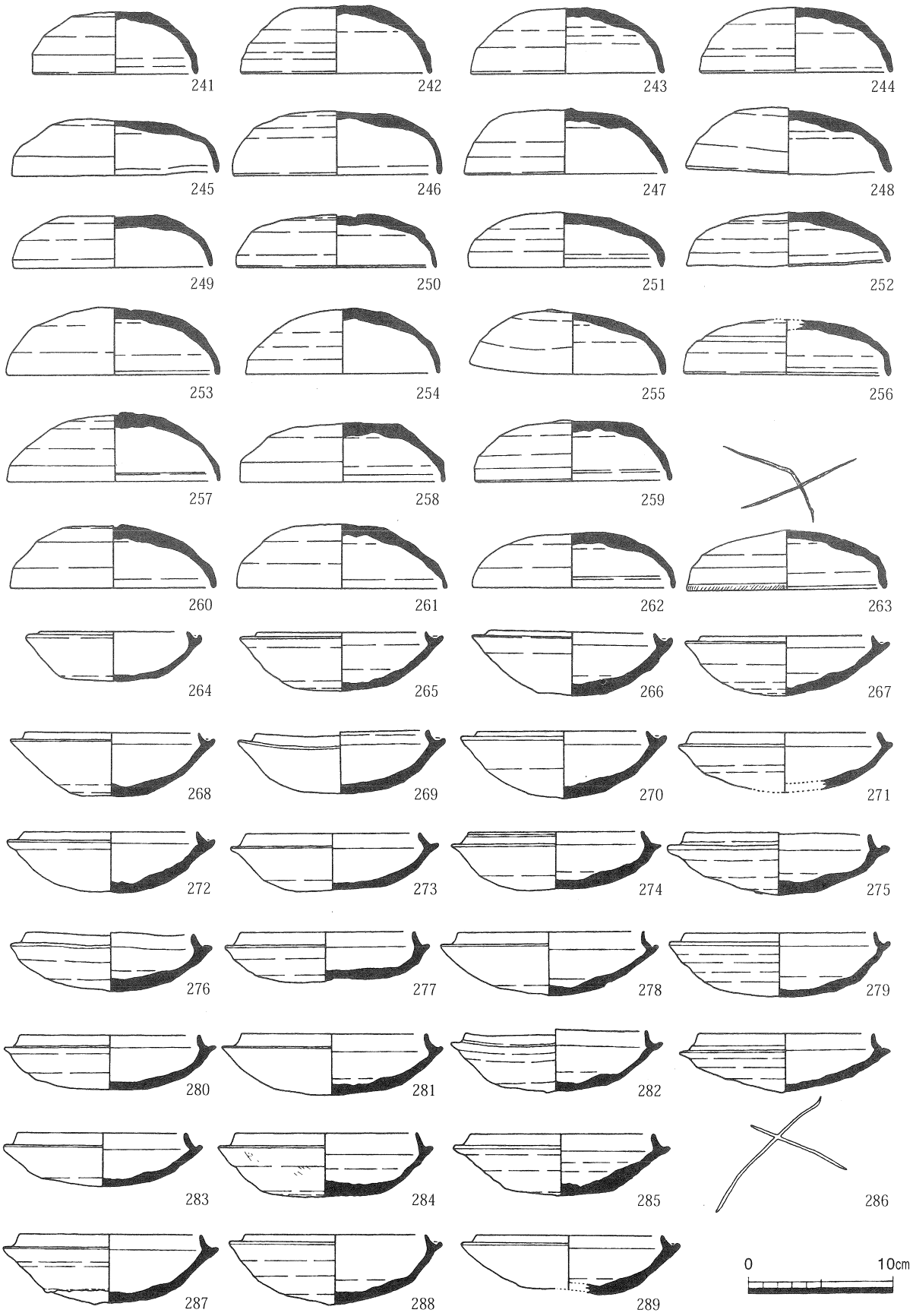
出土状況からセット関係を認定することはできなかった。しかし，法量的にごく小さい部類に入る241と264が，またヘラ記号の有無や胎土，焼成から263と286がセットになると思われる。

台付椀（293）

石室内より１点のみ出土した。湯呑みのような体部に高坏の脚のような高台がついており，高坏とした方が良いかもしれない。体部中央には沈線２条を巡らせている。



第51図　３号墳棺体配置の推定復原図（Ｓ＝1／20）



第52図　３号墳出土遺物（1）（Ｓ＝1／4）

提瓶（297～299）

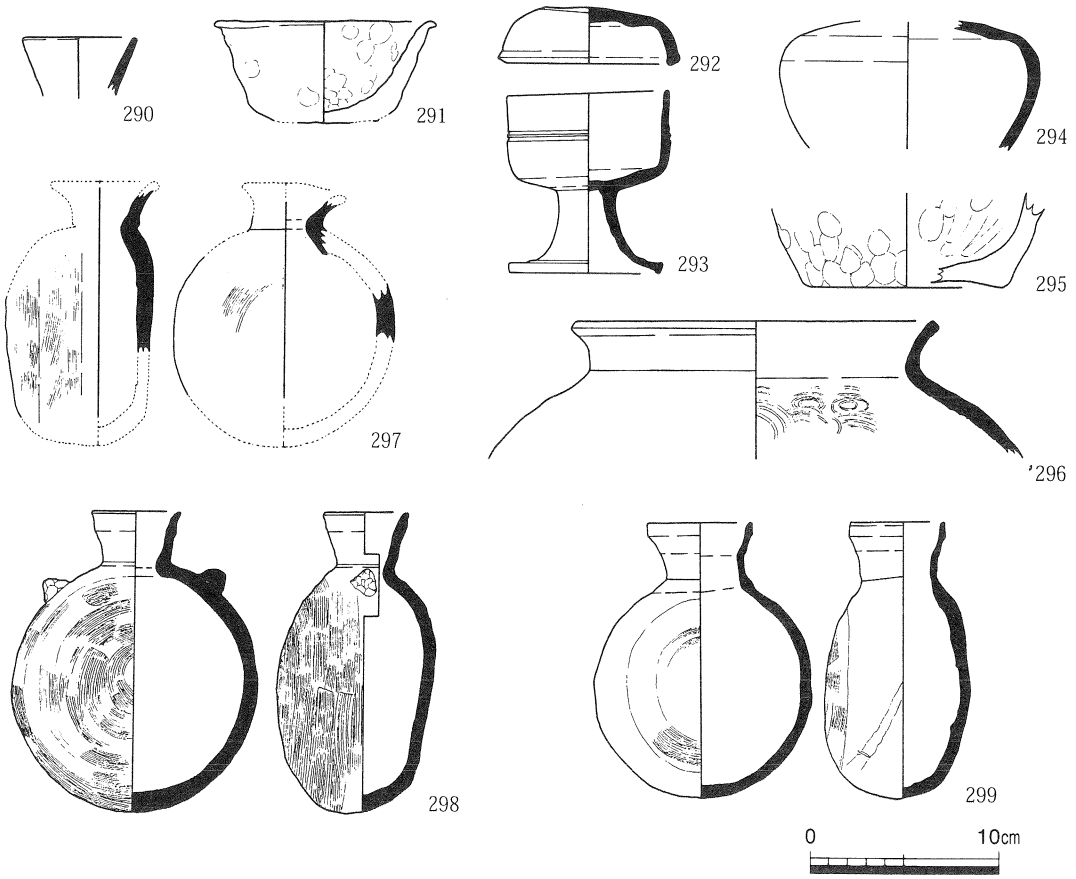
298は肩部に三角形の突起がつくものである。口径4.7cm，器高15.9cmを測り，口縁～頸部には回転ナデ，体部にはカキメを施す。297，299とも肩部に把手の痕跡さえも残さないタイプのもので，体部の径，器高とも298より一回り小さい。297は頸部と体部の約１／２が現存するのみである。体部の摩滅が著しいが，部分的にカキメが認められる。体部の平坦面には蓋を貼り付けている。299は口縁の一部を欠損する。体部にはカキメが施され，平坦面には円盤状の蓋を貼り付けた痕跡が確認できる。

壺（292，294）

292は短頸壺の蓋であると思われる。口径8.7cm，器高3.0cmを測る。全体に回転ナデが施されている。294は短頸壺の体部であると思われる。自然釉が付着している。

甕（296）

296は周溝東部から出土した甕である。口径19.2cm，現存高7.3cmを測る。同様の破片がもう１点出土しており，接合はできないものの同一個体である可能性が高い。焼成は悪く，灰白～浅黄橙色を呈する。全体に磨滅が激しい中，内面に同心円タタキが残存する。



第53図　３号墳出土遺物（2）（Ｓ＝1／4）

土師器（291.295）

３号墳からは土師器が２点出土している。291は鉢である。底部が部分的に剥離している。口径11.4cm，器高5.4cmを測る手捏ね製で，内外面ともに指頭圧痕 が見られる。295は甕と思われる底部で，底径10.2cm，現存高5.2cmを測る。外面に指頭圧痕，内面に指頭圧痕 とナデが残る。

鉄製品（第54,55図）

鉄鏃（313～317，322～338）

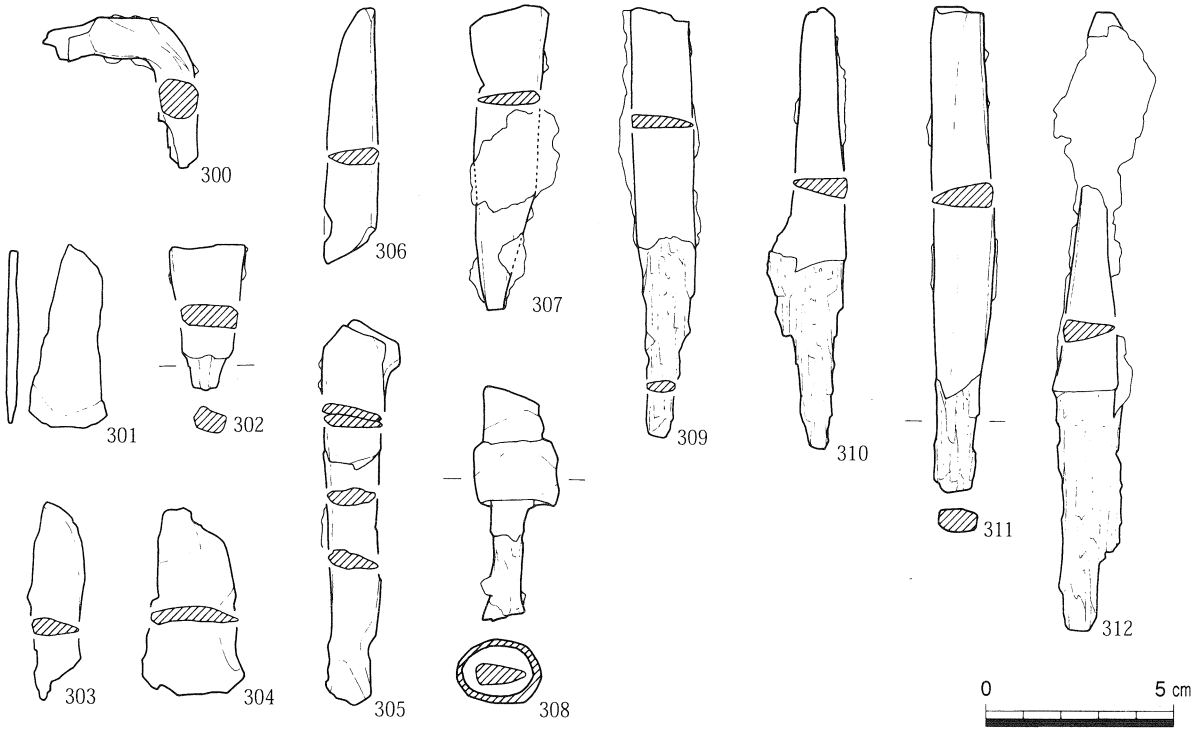
三角形鏃８点（313，324～326，328～330，338）と腸抉三角形族８点（322，323，327，331～337）が出土している。317，324，327～330，333～326，338には矢柄が残存する。なお，314～317は頸部のみが残存している。

刀子（306～312）

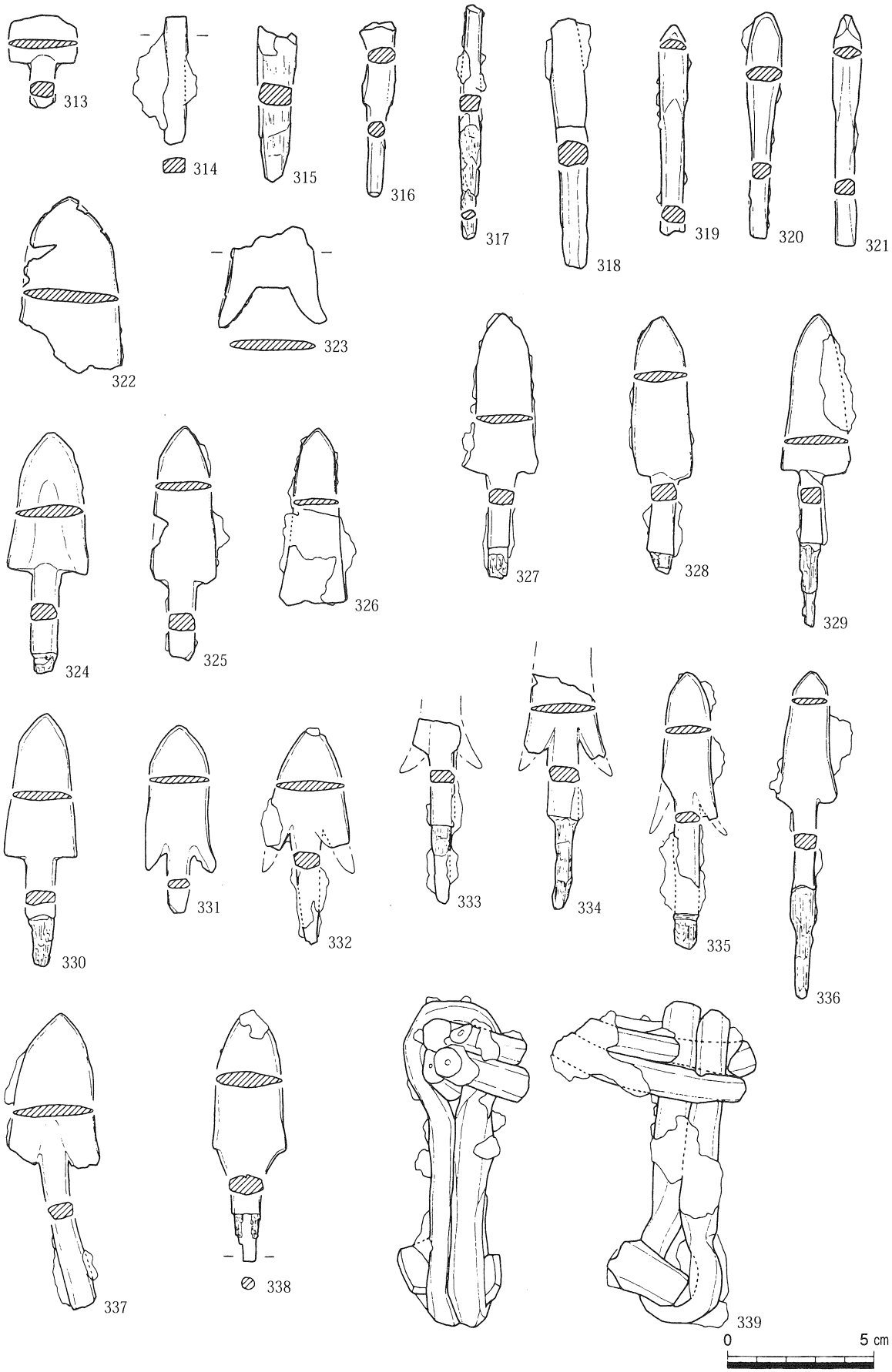
306は先端部であり，現存長10.2cmを測る。307～312は刃～基部である。308は把口金具が現存する。312は先端部が分厚いサビに覆われその形状を明らかにしえないが，ほぼ完形に近いと思われる。刃部の断面形状はいずれも三角形で，308～312の茎には木質が残存している。

鉈（319～321）

319～321は鉈である。法量はいずれも現存長７～８cm程度であり，茎の断面は方形である。刃部の断面は，319はくぼんだ三角形状であるのに対し，321は菱形，320もそれに近い形状を呈する。



第54図　３号墳出土遺物（3）（Ｓ＝1／2）



第55図　3号墳出土遺物（4）（S＝1／2）

馬具（339）

339は兵庫鎖である。その他327は326に近接して出土しており，その形状からも兵庫鎖の一部かもしれない。

装身具（第56～61図）

管玉（340～346）

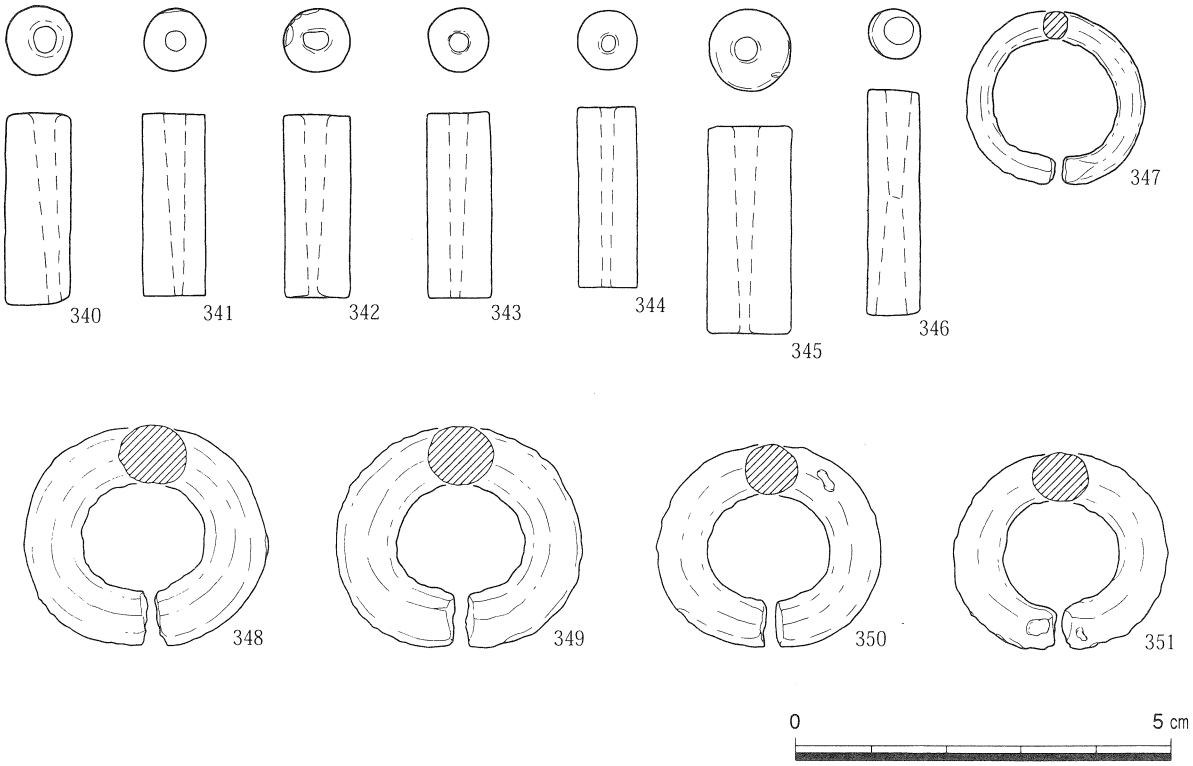
いずれも濃深緑色を呈する翡翠製である。穿孔は片側からなされたものが多いが，346のみは両側から穿たれている。340～344においては，直径8.0～8.7㎜，長さ24㎜前後と規格性が認められるが，345は直径10.8㎜，長さ27.4㎜と大型であり，また346は直径6.9㎜，長さ29.9㎜と縦長である。いずれも丁寧に研磨されており美品である。

耳環（347～351）

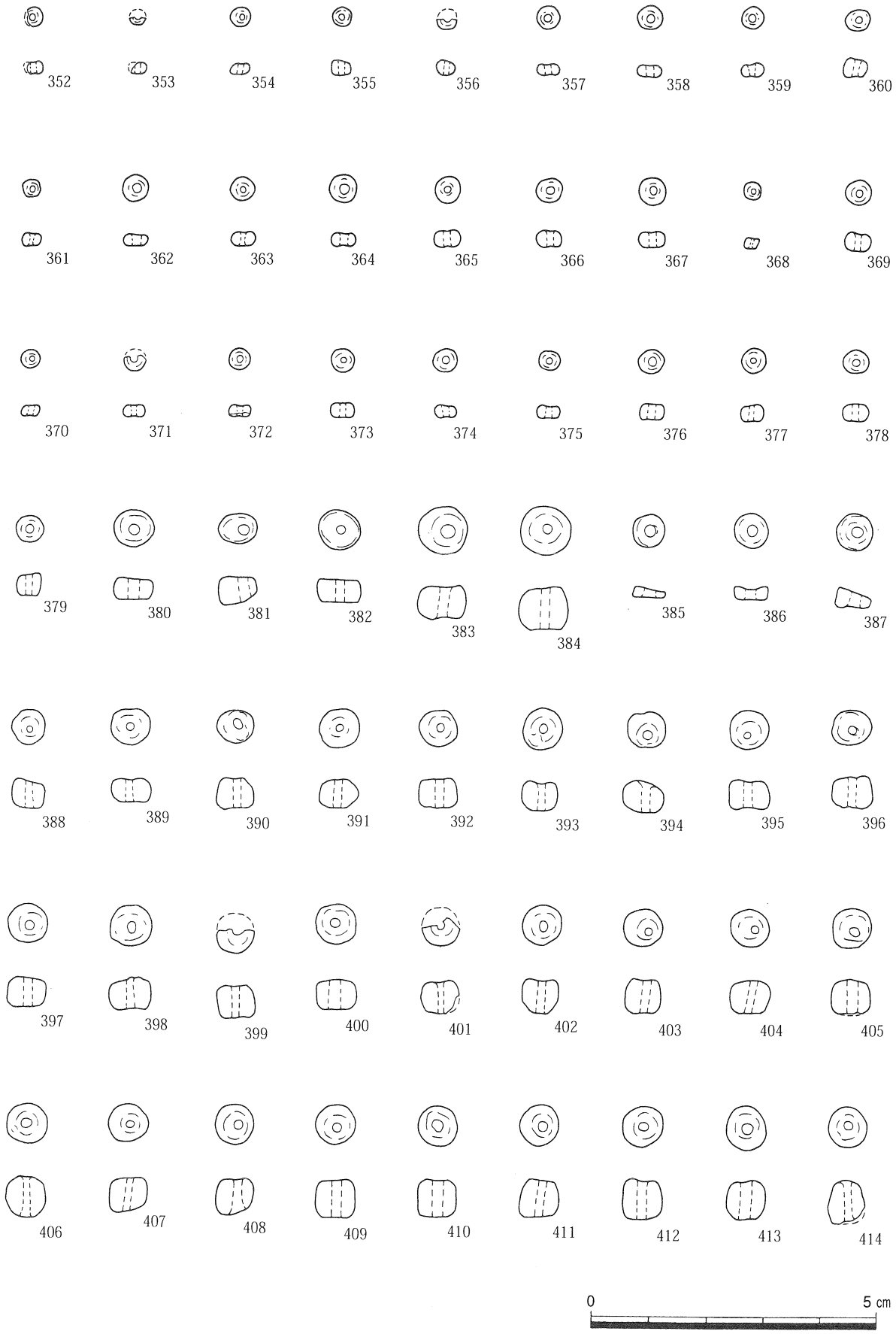
いずれも銅芯の耳環である。全体的に腐食が少ない。348・349には黒く酸化してはいるが，銀箔が完全に遺存している。また，351には金箔が部分的に遺存しており，芯である銅が酸化せず残存している部分もある。また，348・349は長径32㎜台，短径29㎜台，断面径8㎜台とほぼ同規格である。

小玉（352～387）

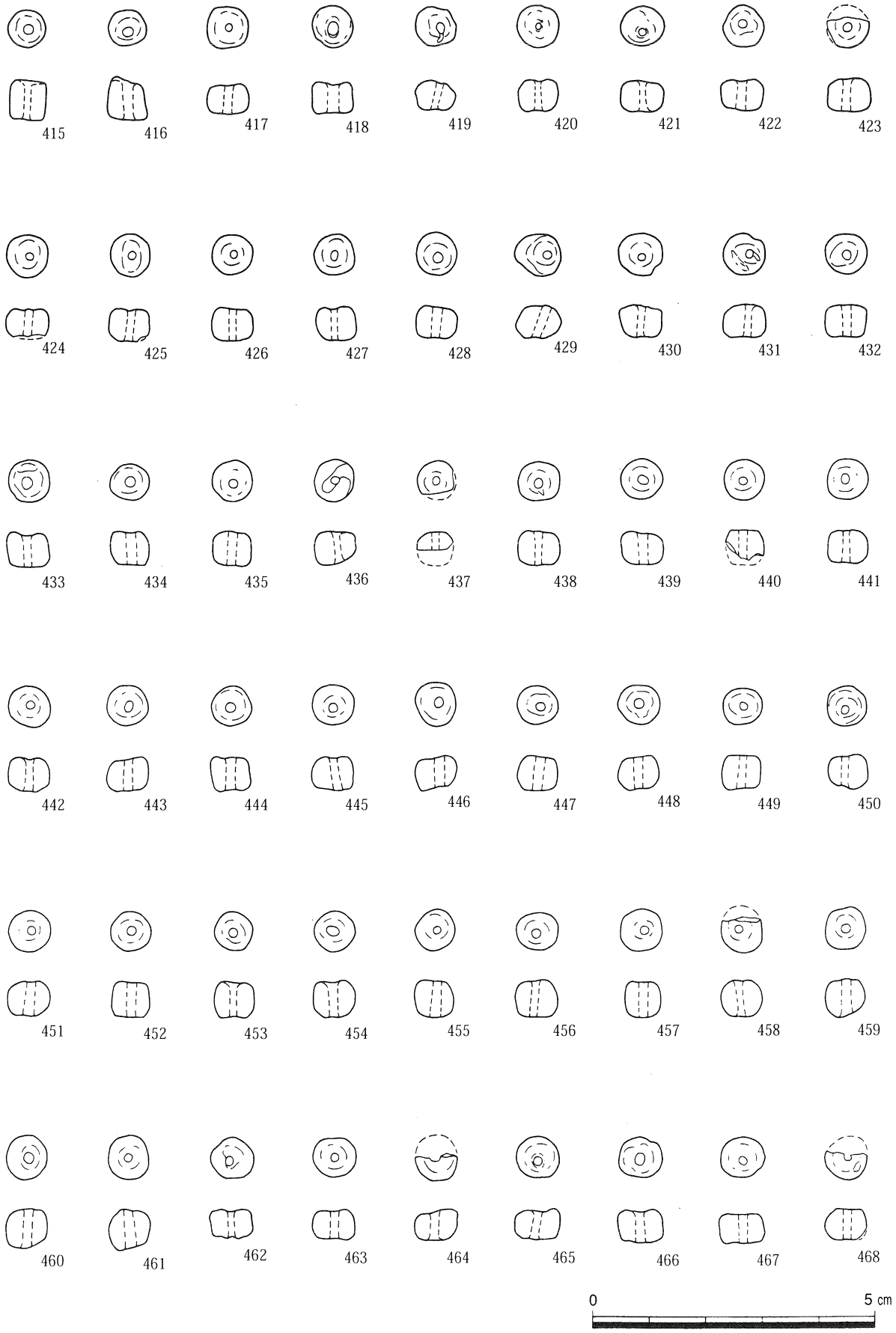
ガラス製（352～384）と滑石製（385～387）の２種類，36個体が出土している。ガラス製小玉



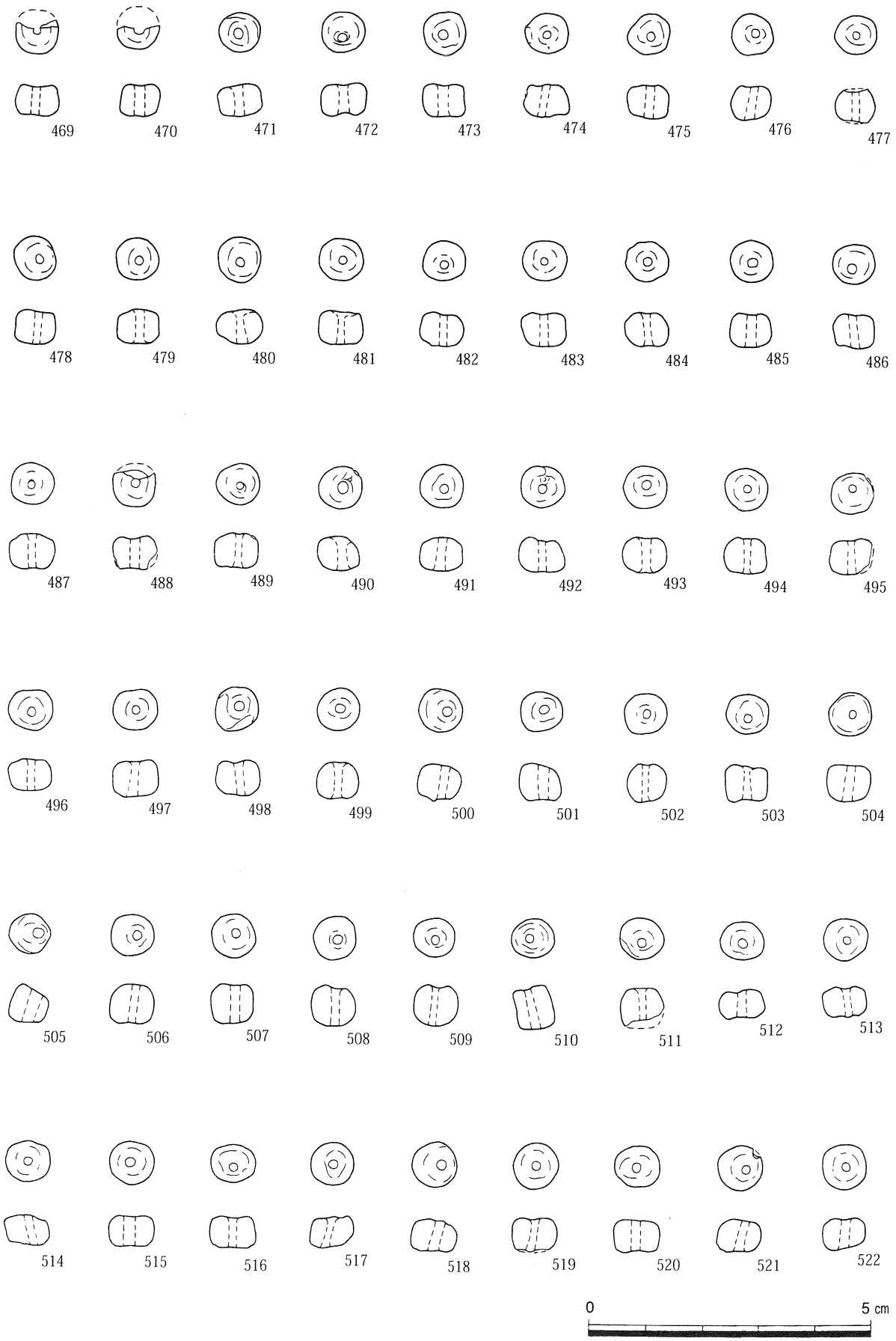
第56図　３号墳出土遺物（5）（Ｓ＝1／1）



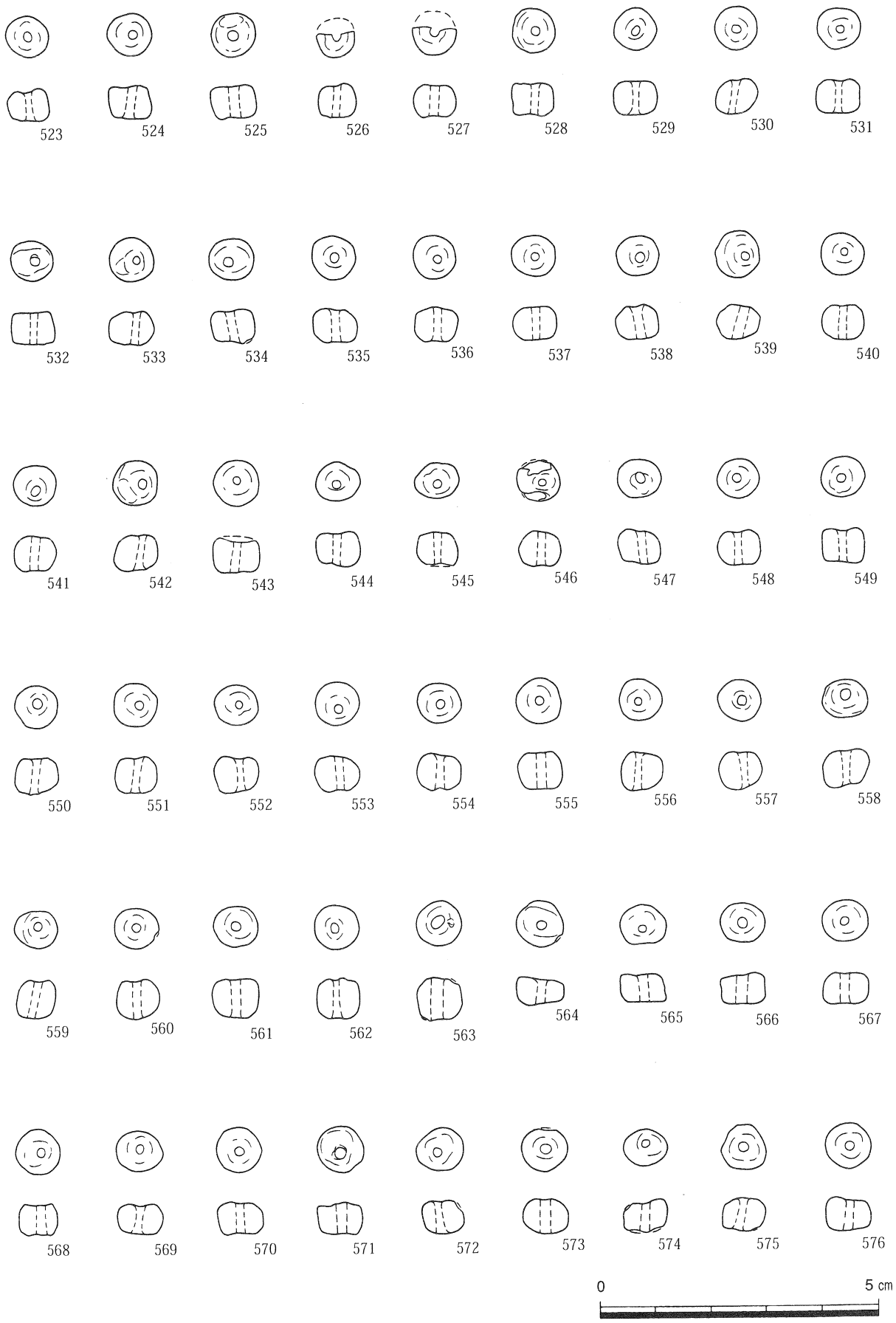
第57図　3号墳出土遺物（6）（S＝1／1）



第58図　3号墳出土遺物（7）（S＝1／1）



第59図　3号墳出土遺物（8）（S＝1／1）

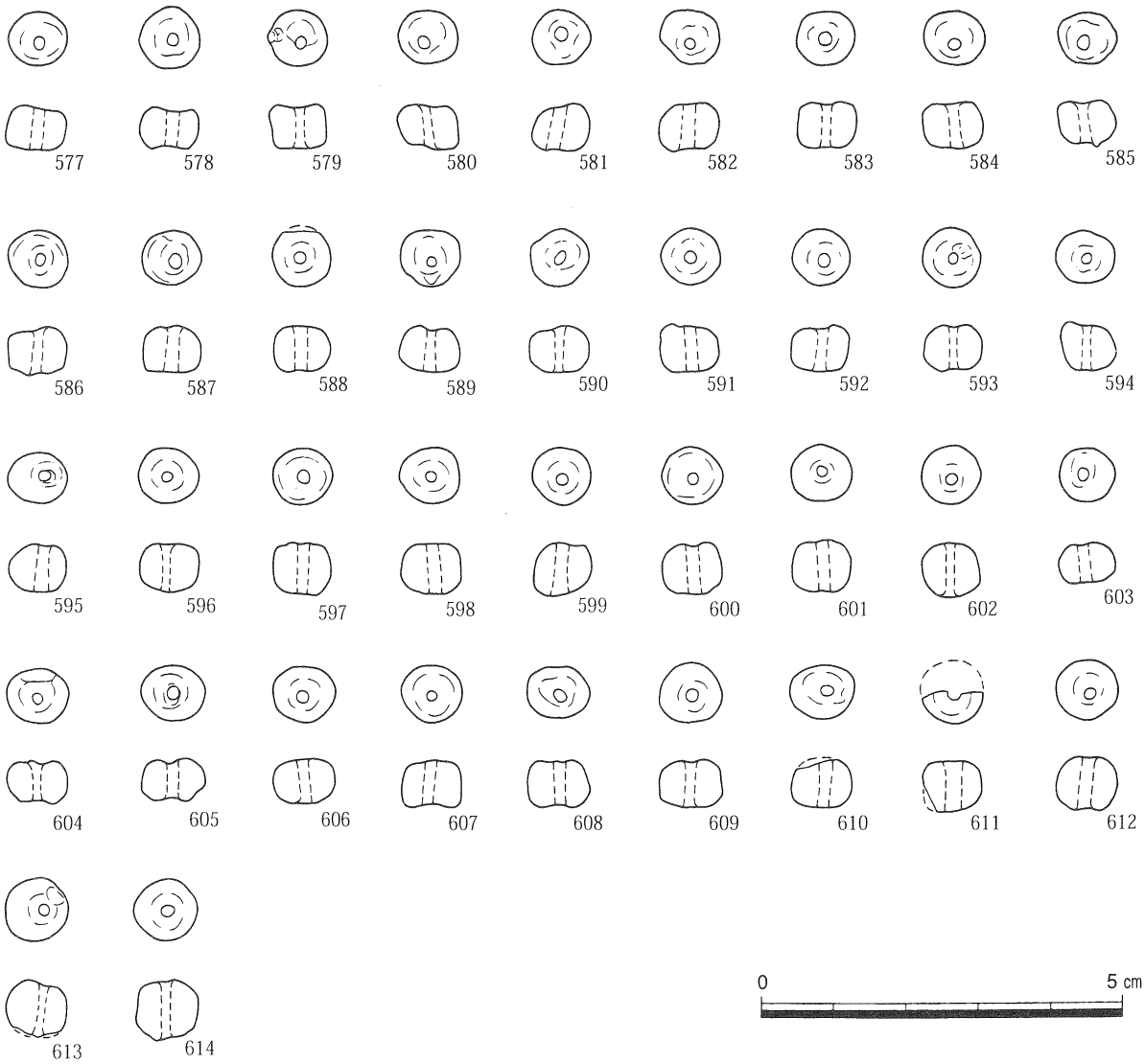


第60図　３号墳出土遺物（9）（Ｓ＝1／1）

の色調は水色（352～360），黄緑色（361～367），青緑色（368,369），青～紺色（370～384）の４種に分かれる。直径の範囲は，水色，黄緑色，青緑色が2.5～4.2㎜の範囲であるのに対して，青～紺色は3.2～8.7㎜と若干幅が広い。断面形状も同様に，ほとんどが偏平な球形を呈しているのに対して，380～384は臼玉状を呈している。石製小玉は，直径が5.4～6.4㎜，高さ2.0～2.5㎜である。

練玉（388～614）

実測可能であったものは228個体であるが，他にも破損したものが多数出土している。直径は5.8～8.7㎜の範囲におさまるが，７㎜前後のものが大半を占める。色調は黒色を基本とするが，褐色・黄灰色を呈するものもある。ほぼすべてが磨滅しており形態もいびつであるが，断面形状は基本的に，隅丸方形を呈している。しかし，409・415・510・532のようにほぼ方形を呈するもの，406・612・614のように円形を呈するものも認められる。



第61図　３号墳出土遺物（10）（Ｓ＝1／1）

古墳築造以前の遺構

３号墳の墳丘上には土壙墓が４基立地している。いずれの土壙墓も墳丘削平に伴って上部が削られている。

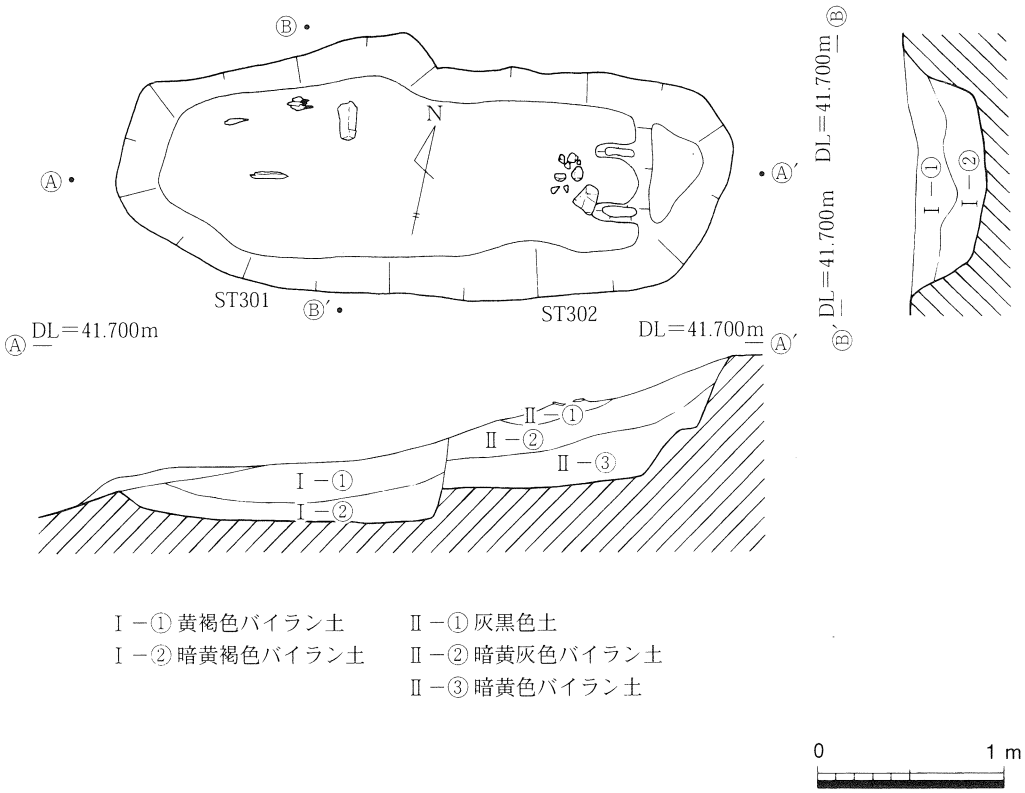
ＳＴ301，ＳＴ302

（1）主体部（第45,62図）

ＳＴ301は３号墳の墳丘内，石室の西に位置し西端を周溝と切りあうように穿たれた土壙墓である。主軸をN70°Ｅに採り，傾斜に直交する。一方，ＳＴ302はＳＴ301の西に立地し，西端をＳＴ301に切られる。主軸はＳＴ301より若干北に振り，N60°Ｅを採る。

ＳＴ301は西端および周溝は削平されている。長軸が現存3.3m，短軸1.2mを測り，深さは0.4m以上である。床面はほぼフラットであるため，頭位を推定することは困難である。また明確な時期を特定できる遺物に恵まれなかったため，詳細な時期および古墳とこれら土壙墓との前後関係は不明である。しかし，ＳＴ301からは多くの鉄製品が出土している。それらの内容に３号墳との共通点が認められるため，ＳＴ301の築造時期を３号墳とほぼ同時期であると考えたい。

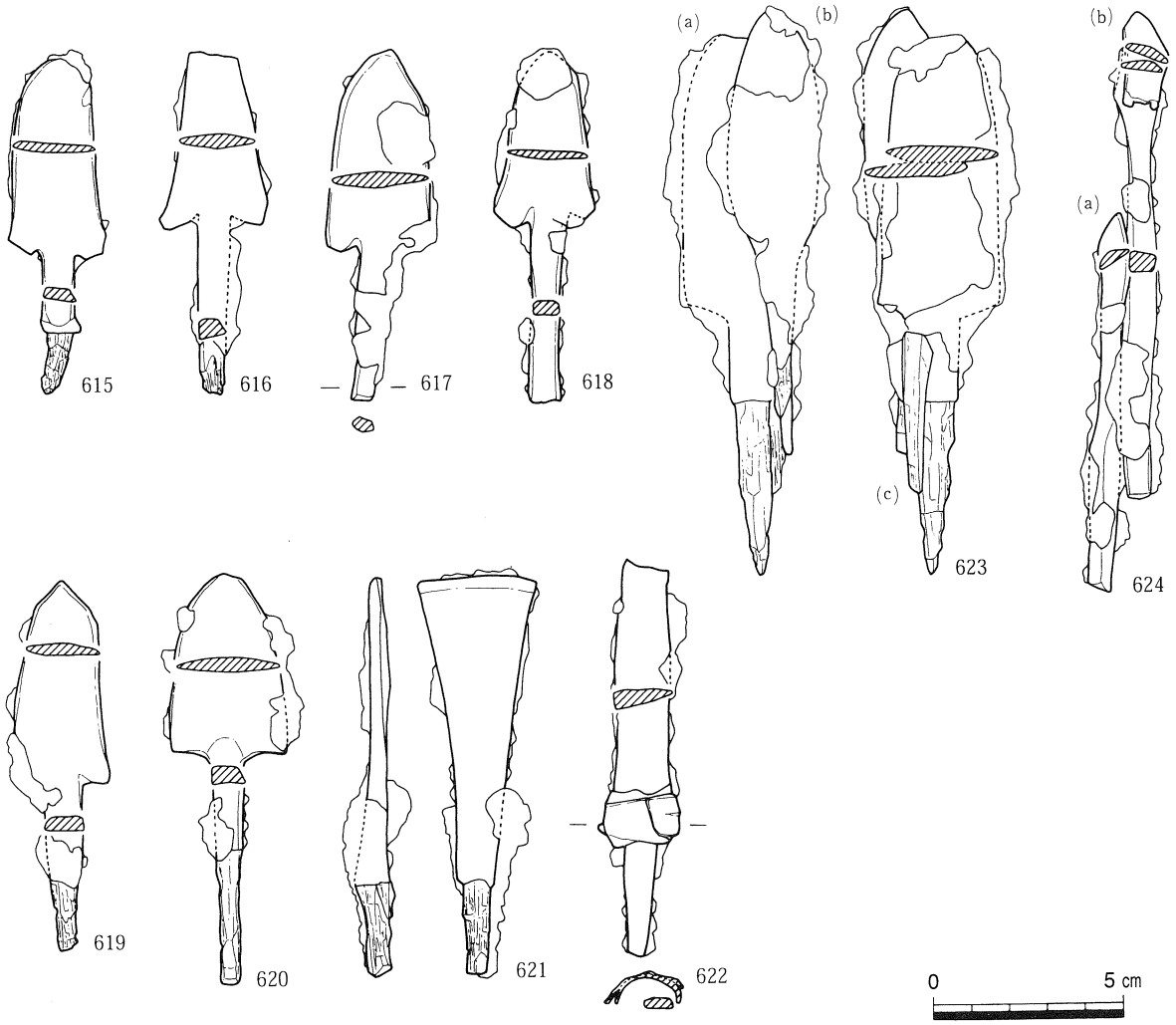
ＳＴ302は長軸1.7m，短軸1.2mを測り，深さは0.3m以上であり，床面はほぼフラットであるが。遺物を全く伴わず，時期を明確にすることができないが，ＳＴ301に切られていることからこれに先行することだけは間違いない。ＳＴ302の底は東端で２段になっている。段の下には幅約10cm，長さ約20cmの溝が20cmの間隔をあけて平行に西へ伸びており，その規模から枕が据え付けられていたのかもしれない。



第62図　ＳＴ301・302平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

(2) 出土遺物（第63図）

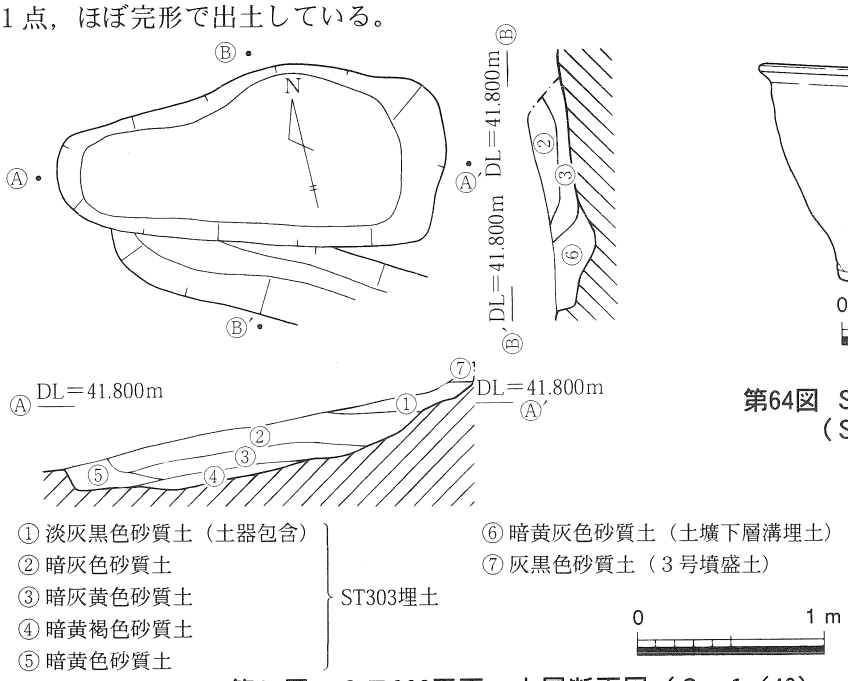
遺物に土器類はまったく認められなかったが，ＳＴ301からは，多くの鉄製品が出土している。615～622は鉄鏃である。615～618は腸抉三角形鏃であるが，いずれも逆刺を欠損する。逆刺は外反する形状を呈するものと思われる。619～621は三角形鏃である。鏃身は619が細身であるのに対し，620は幅広である。621は３枚の鉄鏃が銹着している。それぞれａ，ｂ，ｃとしたが，ａの鏃身は細身，ｂは幅広であり，ｃは茎のみが残存している。622は鑿頭式鏃である。617，618を除き，全てに矢柄が残存している。623は長頸鏃であるが，鉈の可能性もある。２本が銹着し，それぞれをａ，ｂとしたが，ｂの刃部にはもう１点，別の刃部が銹着している。刃部の断面形状はいずれも三角形を呈する。624は刀子の刃部～基部である。把口金具も１／２が残存している。



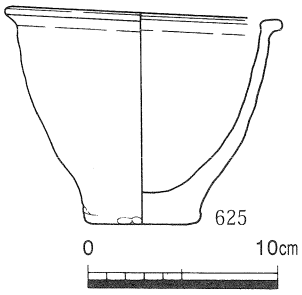
第63図　ＳＴ301出土遺物（Ｓ＝1／2）

ＳＴ303（第64,65図）

ＳＴ301・302の北東に位置する長軸約2.0m，短軸約0.9mを測る土壙である。N75°Ｅを主軸に採る。土層を見ると墳丘盛土である⑦がＳＴ303の上に乗っており，古墳に先行するものであることが分かる。また，ＳＴ303が下層の溝を切っている。出土遺物は弥生前期末～中期初頭の甕が１点，ほぼ完形で出土している。



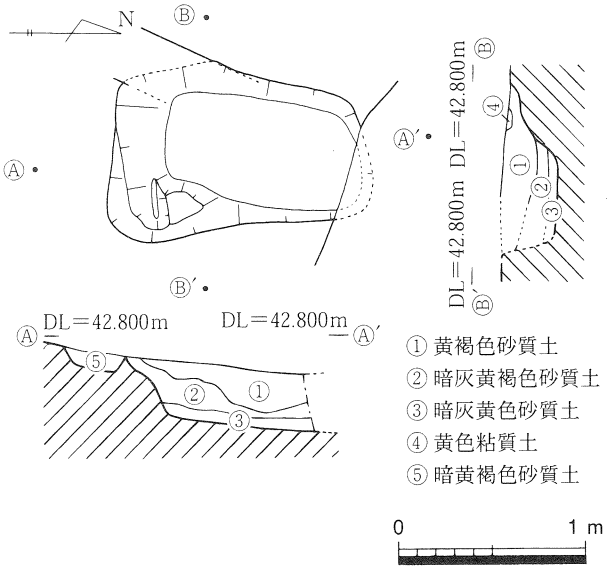
第65図　ＳＴ303平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）



第64図　ＳＴ303出土遺物（Ｓ＝1／4）

ＳＴ304（第66図）

３号墳石室のほぼ真北に位置する土壙であり，北西角付近を３号墳の周溝に切られている。主軸はＮ２°Ｅであり，玄室方向を向いている。長軸約1.3m，短軸約0.8mを測る。深さは約30cmで，床面は南が約８cm高く，南頭位である可能性が高いと思われる。また土壙の南西角にはピット状の浅い位置込みがあるが，その性格は不明である。

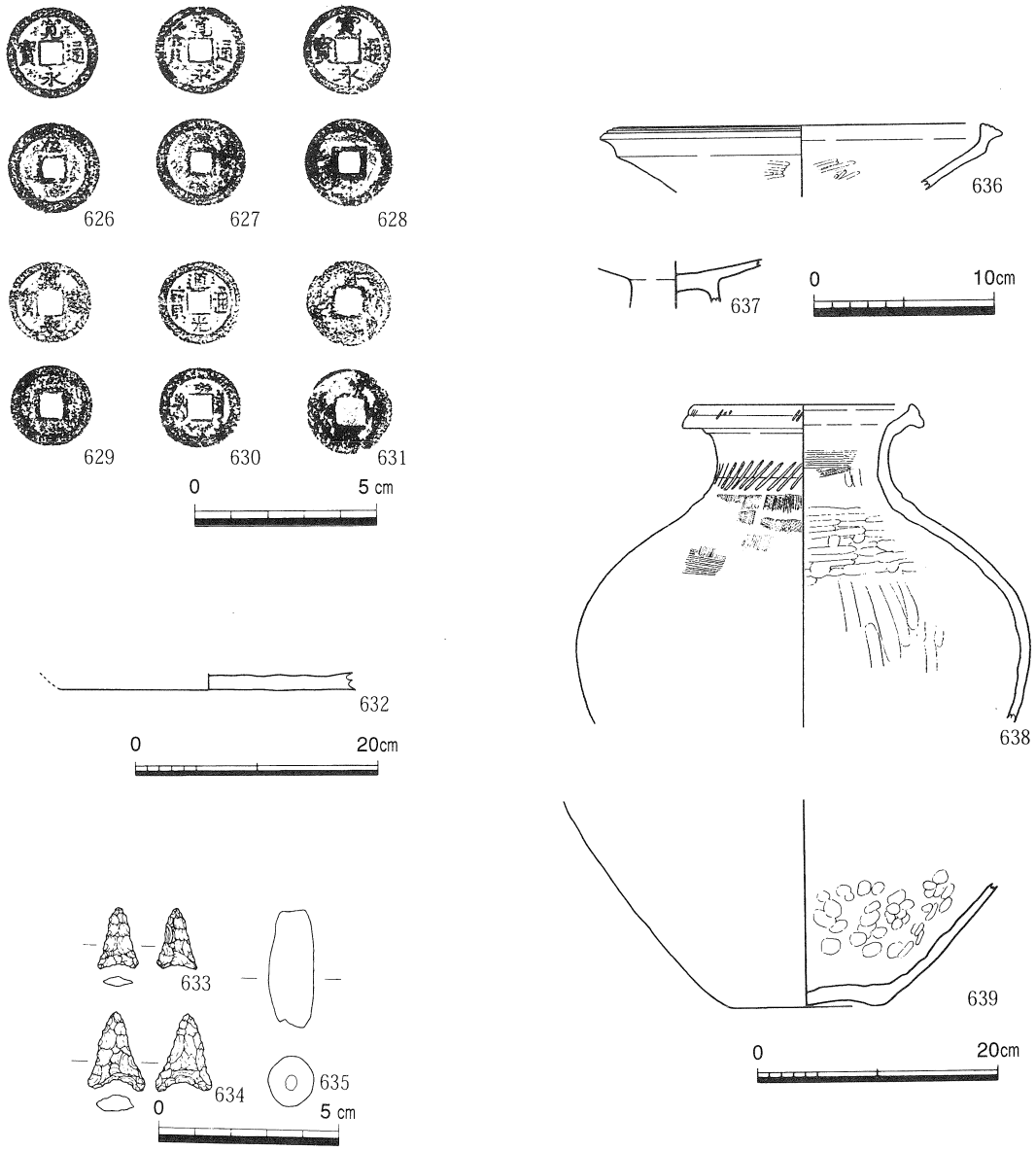


第66図　ＳＴ304平面・土層断面図（Ｓ＝1／40）

4．その他の遺構・遺物（第67図）

１号墳の周溝から626～632が出土している。632は近世以降の棺であり，626～631は六文銭として，これに副えられたものであろう。寛永通宝が４枚（626～629），道光通宝が１枚（630），不明品が１点（631）あり，630，631がやや小ぶりである。後世に作られた墓がそれ以降の撹乱・削平によって破壊され，周溝内に紛れ込んだものであろう。633，634は凹基式石鏃である。634は３号墳石室内から出土した。石室埋没時に流入したものであると考えられる。石材はいずれもサヌカイトである。また，635は３号墳の周溝から出土した土錘である。

636～639は古墳群の所在する丘陵の麓，神社へ上がる石段の東側より出土したものである。このうち，637は時期不明ながら，それ以外は弥生時代後期初頭の所産であり，636が高坏，638，639が壺棺である。



第67図　その他の遺物（S＝1／2（626～631，633～635），S＝1／6（632・638・639），S＝1／4（636・637））

第4章　ま　と　め

Ⅰ．天神山古墳群の追葬計画と性格および今後の課題

天神山古墳群は独立丘陵上に計３基の円墳が確認された。この丘陵自体，北半部がカットされているため，本来はあと数基程度がここに所在していた可能性がある。現存する３基も石室上半を含む墳丘の大半が削平されていた１号墳および３号墳と墓壙のみが確認された２号墳と，残存状況は決して良好とはいえないが，殊に１号墳と３号墳に関しては，盗掘が行なわれた形跡もほとんどなく，床面の依存状態は極めて良好であった。本文中ではそこから得られたデータをもとに棺体配置を復原したが，ここではその内容をさらに仔細に検討し，従来の後期群集墳像への問題提起を行なって古墳時代のまとめとしたい。

１．棺体配置と追葬計画

１号墳

（1）須恵器の分類と編年（第14図）

１号墳は石室の上半を削平されていた。しかし，それ以外には床面にまで及ぶような大きな盗掘坑もなく，出土遺物は原位置を良く保っている。石室内からは，多くの須恵器が出土した。特に坏が蓋・身ともに多く，これらは口径や口縁部の形態などから，４形態３時期に区分されるものと思われる。

１－１期

１号墳における初葬段階にあたるもので，蓋坏ともにＡ，Ｂ類の２形態が見られる。

蓋Ａ類：口径が13.7～13.8cmのもので８，9，11，13，14がこれに該当する。これらの中には天井部外面と口縁部を段と沈線で区画する11や，口縁端部に段の痕跡が残る７など，古い様相を残すものも含まれる。また，８は口径のみを見ると１－２期に含まれるが，口縁端部に段を持つことから，ここに含めた。

蓋Ｂ類：10（14.0cm）と12（14.6cm）の２点である。この２点は口径もさることながら，胎土や色調においても他のものと異なっている。

身Ａ類：口径12.8cmの20と12.6cmの21である。ともに立ち上がりは細く，外反しながら内傾しているが，受け部とともにしっかりしている。

身Ｂ類：口径は13.0～13.2cmと最も大きいが，口縁部が４分類中最も小さい。胎土も他の３種類とは異なっている。23および24がこれに該当する。

これらのうち，セットで出土したものはともにＢ類の10と24であり，これらの出土位置は初葬時の原位置を保っているものと思われる。したがってＡとＢを同時期の１－１期とみなした。坏以外でこの時期と考えられる遺物は提瓶（31）がある。これも初葬時の原位置を保つと考えられる。

１－２期

第１次追葬段階の遺物である。

蓋：口径が12.8～12.9cmのものであり，２，４，６～８がここに含まれる。また，５は口径13.5cmと大きめであるが，形態が類似するためここに含めた。内外面ともに明確な稜は見られず，口縁部から天井部にかけて丸く仕上げられているが，口径のわりに器高が低く，やや扁平な印象を受ける。

身：口径11.2～11.4cmの16～18および11.9cmの19である。前段階に比べ，口縁部および受部がやや退化しており，この点も分類の目安にしている。18の口縁部はしっかりとしているが，口径からこちらに含めた。また19は口径に退化が認められるが，法量がやや大きく，やはりこちらに含めている。

１－３期

蓋：口径が12.2～12.4cmと最も小さく，口縁部が内湾するタイプのものである。１および３がこれに該当する。

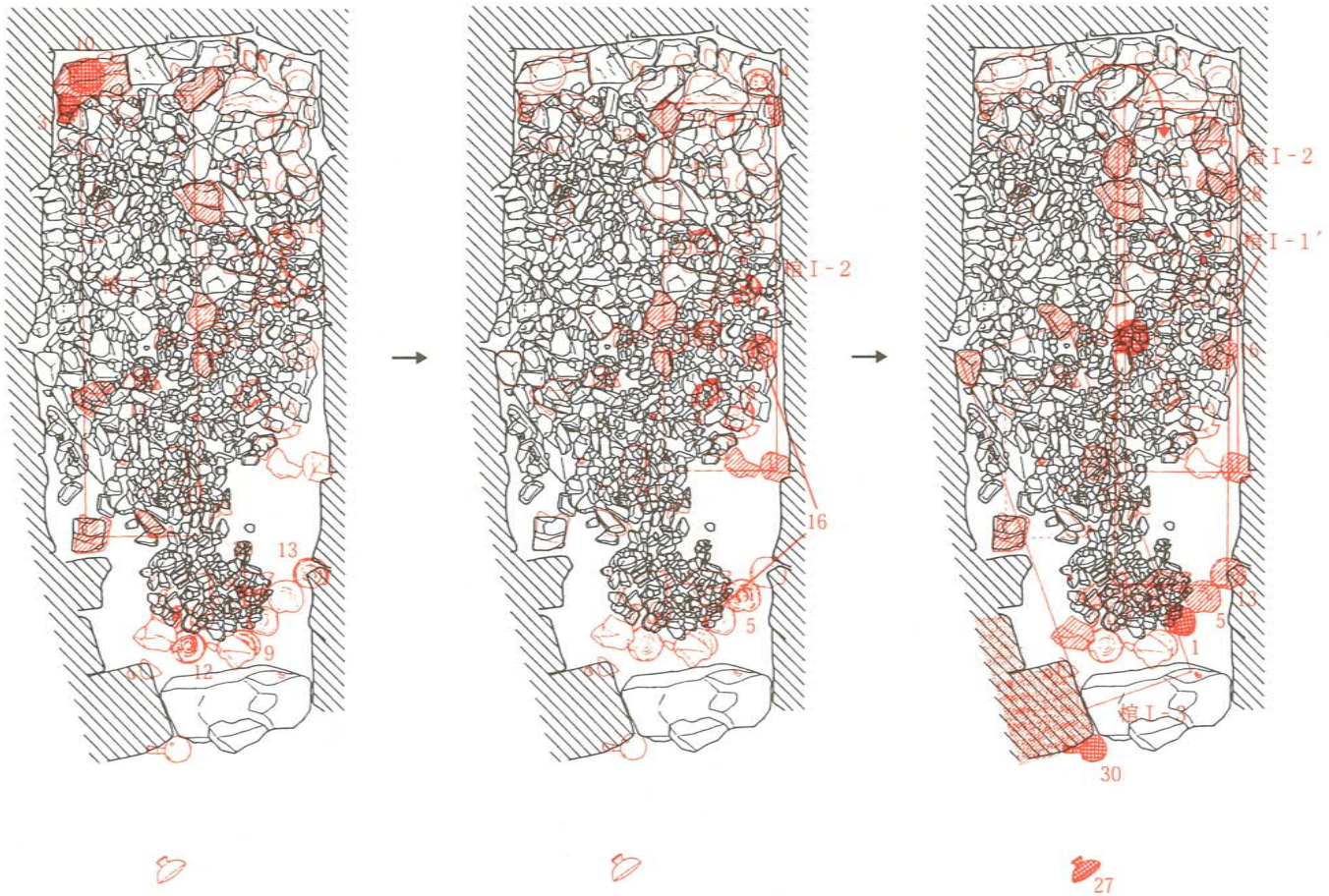
身：15の１点のみである。口径が10.6cmと他のグループに比べ小型である。口縁部は前段階に比べ，大きな変化がないように思われる。

(2) 各時期における棺体配置（第9,68図）

１号墳における，３度の埋葬に伴う棺の配置は第12図のとおりである。そして，第68図には埋葬ごとの棺配置と，それに対応する遺物を示した。本文中においてすでに述べたとおり，石室内は床面にまで及ぶ大きな盗掘を受けていない。また追葬に伴う遺物の片付けが行なわれた様子もなく配置が一見乱雑であり，破損しているものも多い。この理由として副葬品の棺台への再利用の可能性を考えた。以上を踏まえ，棺配置の詳細を時期ごとに追っていきたい。

１－１期（棺Ｉ－１）

初葬段階であり，棺は石室の左半分を占める。第９図に示した礫床②の位置であるが，こちらを初葬とした根拠は原位置を保つと考えられる須恵器・提瓶35とセット関係で出土した坏10と23である。35は右側壁沿い，礫床①と②の境界に接して礫床②の上に立てた状態で出土している。10および23は礫床①の上に35と接するように置かれていた。棺は奥壁から約15cm，右側壁から約10cm程度空け，側壁に沿って置かれ，法量は長さ約180cm，幅約45cm程度であったと思われる。棺の北西角は35と10，23の間に収まっていたであろう。棺の北辺，東辺の北２／３程度および棺の南西角に当たると思われる箇所には拳～掌大の礫が置かれ，北東角および東辺，南西角のものは棺台の役割を果たしたものと思われる。棺台は本来，棺の南辺まで伸びていたと思われるが，後述のように棺３設置の際取り除かれたか，もしくは棺３の棺台に転用された可能性がある。なお，棺台と右側壁に囲まれた範囲には５cm大程度の礫が充填されている。



初葬（１－１期）　　第１次追葬（１－２期）　　第２次追葬（１－３期）

第68図　１号墳における追葬過程

（斜線……棺台に転用された須恵器および棺台となる石材
網かけ…原位置を保つとみられる須恵器
赤い袖石，側壁…１－３期になされた拡張部）

（Ｓ＝1／30）

１－２期（棺Ｉ－２）

第１次追葬段階である。石室の左半分を占め，東辺は左側壁にほぼ接するように配置されている。礫床③の位置である。北辺は棺Ｉ－１のそれより４cm程度南に下がり，北面する小児頭大の塊石に接する。西辺には棺1の棺台の役割を果たしたと思われる礫列の上に乗っており，この礫は棺２の棺台をも果たしていた可能性が高いと思われる。また，棺の南東角に当たると思われる箇所には10cm大の礫が据えられている。棺は長さ約150cm程度，幅約45cm程度と推定され，棺１に平行するように据えられていたと思われる。頭位は耳環の位置から北枕であった可能性が高い。

棺２の上に並べられた坏は時期的に符合するものの，埋葬段階でこの位置に並べられたものではない。後述するように，第２時追葬（棺３）の段階になってこの場所に移動させられたのであろう。なお，棺Ｉ－２の埋葬当初の位置を保つ須恵器は，４にその可能性があるのみである。

第１次追葬時の原位置を保つ遺物については不明であると言わざるを得ない。むしろ，この時期の遺物についてはすべて移動させられ，棺台に転用されている可能性が高いように思われる。坏以外でこの時期に包括されると思われる須恵器は根拠に乏しいながら平瓶（28）１点があげられるように思われる。この平瓶は第２次追葬時に破砕され，坏同様に棺台に転用されている。

１－３期（棺Ｉ－３）

第２次追葬段階であるが，本来，埋葬が予定されていなかったのであろう，追葬にあたって石室内の施設や先に埋葬された棺Ｉ－１および棺Ｉ－２に手を加え，棺Ｉ－３を設置している。

棺Ｉ－３の設置にあたって，まず棺Ｉ－１を棺Ｉ－２の上に移動している。さらに本文でも触れたとおり，石室を南に50cm程度拡張し，礫や須恵器を用いて棺台を置いている。そして棺を石室主軸に対して約20°西に振って斜めに設置している。礫床①の南半および礫床④の位置である。

棺は北西角を右側壁から15cm程度あけて，奥壁から約1.3mほど南に置いていると推測される。南東角は玄門に接し，南辺は仕切り石に接近している。全長約150cm程度，幅約40cm程度の棺であると思われる。棺の下には５cm程度の小礫が敷設されているが，棺１や棺２の下に敷かれた礫よりは幾分小ぶりな印象を受ける。また棺の南半には一部，小礫の見られない箇所も見られる。棺の北東および北西角部には10～15cm程度の小塊石が置かれている。これは棺台と思われ，この他にも同様の小塊石が小礫に混じって敷設されている。

一方，棺Ｉ－３設置に伴って移動された棺Ｉ－１（以降「棺Ｉ－１′」）であるが，棺Ｉ－２の上に棺台として副葬品として置かれていた須恵器を置き，その上に棺Ｉ－１′が据えられている。棺は左側壁に沿って設置され，北辺は棺１から約25cm南側に位置する。南東端には棺台に転用された須恵器（13）があり，南辺にも須恵器（16）や15cm大の板石が須恵器の上に棺台として据えられている。耳環の位置や須恵器（13，16）の存在から改葬が行なわれているとは考えにくいが，南西角が棺Ｉ－３の上にかかることから，あるいは棺Ｉ－３は棺Ｉ－１′の南東角の棺台として機能した可能性があり，棺Ｉ－２上に置かれたと考えられる須恵器は棺Ｉ－３との高さを合わせるためのものだったのかもしれない。

遺物に関してはこの時期の遺物はすべて埋葬時の原位置を保っており，１は棺Ｉ－３に接するように，15は棺Ｉ－１′に接するように置かれている。坏以外では石室内に当該期の須恵器は見受けられないが，閉塞石の間に置かれた瓶（30）や墓道から出土した高坏（27）はこの時期のものであろう。

３号墳

（1）須恵器の分類と編年

３号墳も１号墳同様，石室の上半部を削平されていた。また袖石以南も大掛かりに削平され，仕切り石は粉砕，羨道も大半が跡形なく破壊されていた。そのような状況下においても玄室内は床面にまで及ぶような盗掘坑は見受けられず，遺物はほぼ原位置を保っていると考えられる。

玄室内から副葬品が出土している。その中心となるのは須恵器であるが，特に坏が蓋・身ともに最も多く，これらは１号墳同様，３時期に分類される。

３－１期

３号墳における初葬段階にあたる。

蓋：口径のみでは次のⅢ－２期と区別が付け難いため，天井部のヘラケズリを参考にした。245，246，249～251，253，254，256～259，261，263がこれに該当する。口径13.4～14.9cmを測り，ヘラケズリは全体の１／２～１／３におよぶ。これらの中には口縁端部に段を持つものや，天井部と口縁部の外面や内面の境に明瞭な稜や段を持つものも多い。

身：口径と口縁部の形態を参考に分類した。口径12.0cm～13.6cmで，口縁部および受け部のしっかりしたもので，271および273～287がこれにあたる。この中で283は口径が11.8cmしかなく，受け部も小さくなっているが，立ち上がりがしっかりしているのでここに含めた。

３－２期

蓋：天井部のヘラケズリが１／４に満たないものを含めた。242～244，246～248，254，255がこれに該当する。241は外面にヘラケズリが見られないが，口径が極端に小さいため，次の３－３期としている。全体的な傾向として，天井部から口縁部が連続して丸くなっているが，形態としてはドーム状を呈するものとやや扁平なものがある。

身：３－１期に比べ，口縁および受け部が矮小化したものであり，265～270，272がこれにあたる。264は口縁部がさらに退化しており，口径も極端に小さくなっているため，次段階に含めている。

３－３期

蓋：241の１点のみであるが，口径11.5cmと法量の縮小が一層進んだ形態である。天井がドーム状をなし，ヘラケズリは見られない。

身：264ただ１点のみである。口径が10.4cmと他と比べ1.5cm以上小さく，口縁部および受け部もさらに小さくなっている。

(2) 各時期における棺体配置（第69図）

３号墳における棺体配置は第51図に示すとおりである。そして第69図には１号墳同様，埋葬ごとの棺体配置と，対応する時期の須恵器を示した。しかし，須恵器は必ずしも埋葬時の原位置を保つものではなく，むしろ，須恵器のほぼすべてが追葬段階になって，棺台として転用されているとみなしても良いように思われる。なお，袖石は抜取り跡から復原したものである。

３－１期（棺Ⅲ－１）

初葬段階であり，棺は石室の右半分を占める。第46図における礫床③および礫床⑤の一部であり，こちらを初葬とした根拠は礫床②の礫がこちらに入り込んでいるためである。棺は奥壁から35cm程度，左側壁から10cm程度空け，礫床③の東辺に沿って置かれ，法量は長さ150cm，幅45cm程度であったと推測される。棺の北辺の両端には，15cm大の石が棺台として用いられたと思われるが，南辺にはそれらしき石は残されていない。

この時期の遺物で提瓶（298）は元来棺Ｉに沿って立てられていたと思われるが，いつしか倒れ，３－４期にはそのまま棺台となったと考えられる。

３－２期

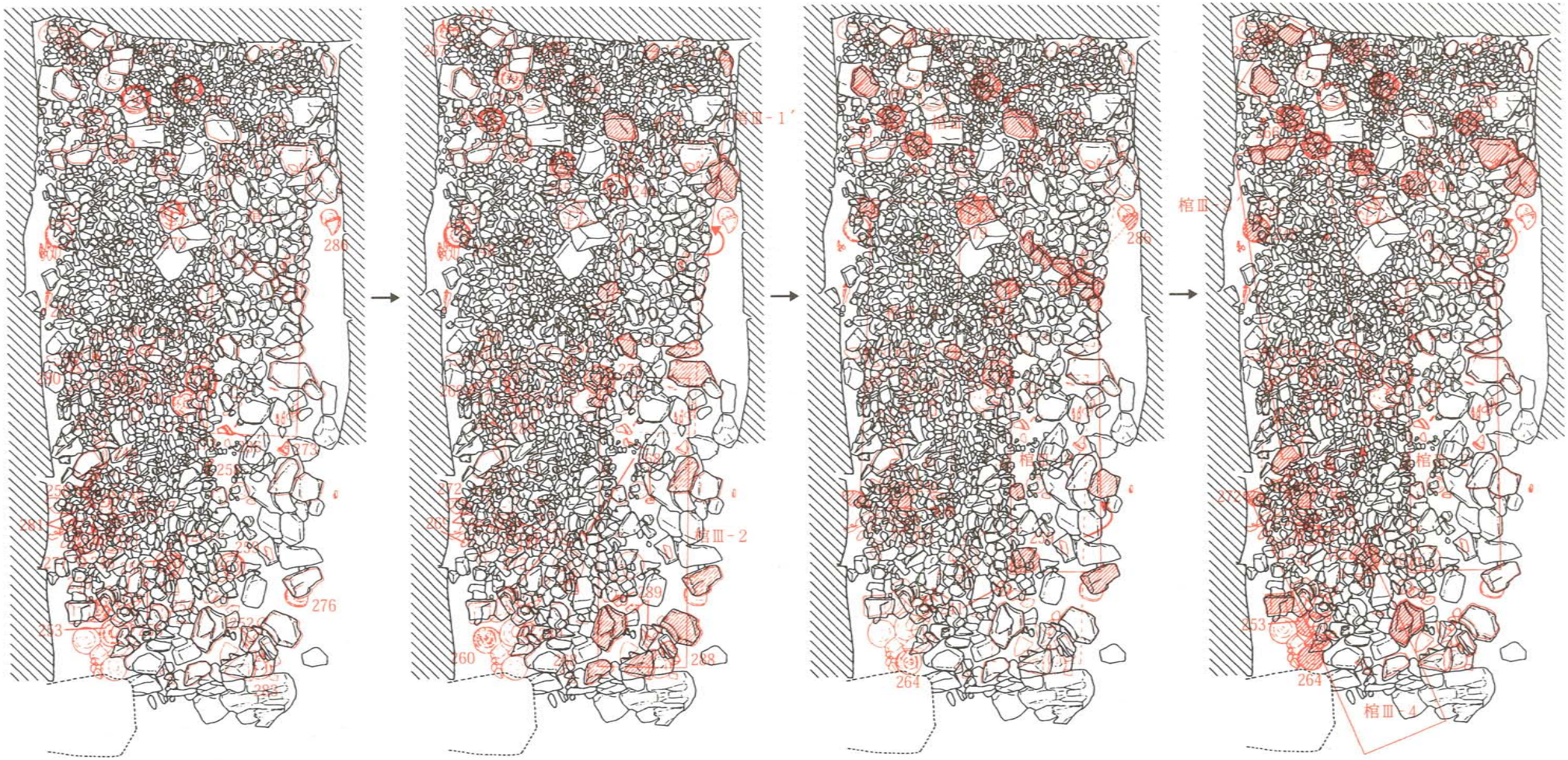
第１次追葬段階であり，棺は棺Ⅲ－１を棺Ⅲ－１′の位置まで移動させた後，礫床⑤に設置されたと思われる。この位置を第１次追葬とした根拠は礫床②が礫床④に入り込んでいるためである。棺の法量は長さ約150cm，幅約45cm程度と推定され，棺の四隅には棺台と思われる10～15cm大の石や北西隅には３－１期の須恵器が据えられていたと考えられる。また棺Ⅲ－１′への移動は奥壁付近に集中する玉とその10cm程度南に，奥壁に平行して検出された刀子と鉄鏃が根拠となっている。

３－３期

第２次追葬段階である。棺は棺Ⅲ－１′を棺Ⅲ－１″，棺Ⅲ－２を棺Ⅲ－２′の位置まで移動した後，棺Ⅲ－３を搬入しているが，これは，袖石と棺Ⅲ－２との間隔が狭かったためと考えられる。

棺Ⅲ－１”への移動の根拠には左側壁沿い，奥壁より約1mに据えられた提瓶（290）と，その上に置かれた坏身286がある。この２つは棺台として機能したと考えられ，ここを南東角とした時，南西角の棺台は不明ながら，北辺の両端には棺台となりうる15cm大の石がみられる。また，棺の下にもⅢ－１およびⅢ－２期に属する須恵器が棺台として転用され，配置されていると考えれば一見不自然に見える須恵器の配置にも規則性が見えてくる。

Ⅲ－２′への棺の移動を考えた背景は次の２点に要約される。すなわち（1）棺Ⅲ－１″への移動との関連性，（2）棺Ⅲ－３搬入における通行スペースの確保，ということであろう。棺Ⅲ－２′は棺Ⅲ－２から北へ約40cmの，奥壁から約1.35m，左側壁から20cm空けた位置に移動されたと思われる。棺の北辺付近並べられた礫は小ぶりながらも礫床より１段高くこれが北辺の棺台と考えられ，ここから主軸を若干東へ振った150cm先には，東には３－１期に包括にされる須恵器（276）の上に掌大の石が置かれ，西には３－１期の須恵器（259）が積まれ，ともに棺台とされていたものと思われる。



初葬（３－１期）　第１次追葬（３－２期）　第２次追葬（３－３期）　第３次追葬（３－４期）

第69図　３号墳における配置の変遷

（斜線……棺台に転用された須恵器および棺台となる石材）

（Ｓ＝1／30）

これらの棺の移動後，礫床②が敷設され，棺Ⅲ－３が搬入されるのであるが，棺位置は奥壁から南へ約１ｍ，右側壁から約20cmのところを北西端にし，長辺約160cm，短辺約45cmの棺が置かれる。南西角部に棺台は見当たらないが，北東端には３－１期，南西角には同２期の須恵器が，北西角には拳大の礫が置かれ，棺台としての役割を果たしていると思われる。

３－４期（棺Ⅲ－４）

最終の追葬段階である。この時期に包括される須恵器は検出されていないため，時期を明確にすることができないが，この時期を設定した根拠は次の2点でに集約される。それは（1）３－３期の須恵器が礫の下に入り込んでいることと，（2）管玉3点が棺Ⅲ－３の南で出土していることである。

棺Ⅲ－４を設置するためには，棺Ⅲ－１″と棺Ⅲ－３を再び移動しなければならない。まず，棺Ⅲ－３を北へ上げなければならないが，そのためには棺Ⅲ－１が邪魔になる。そこでこれの南東端を北へ約50cm，南西端を南へ約20cm移動させ，棺Ⅲ－１‴形態を採る。すると棺Ⅲ－３を約30cm北に上げ，棺Ⅲ－３′の位置に据えることができ，空いたスペースに長辺約140～150cm程度，短辺約45cm程度の棺Ⅲ－４を入れることができる。

棺Ⅲ－１‴の北西角には４枚重ねられた坏（243，247，263，267）が，また南辺には等間隔で須恵器坏が３枚（244，265，284）並べられている。また，東辺および西辺，北東角などには拳～掌大の石が置かれ，これらと先の須恵器が棺台としての機能を有していたものと思われる。棺Ⅲ－１″～棺Ⅲ－１‴にかけて，棺の下に敷かれる須恵器の数が多い理由として考えられるのは，棺の移動に際し，棺の老朽化のために棺の底が抜けることを防止するためと考えたいが，これについてはあくまでも推測の域を出ない。

棺Ⅲ－３′は北東端の棺台を棺Ⅲ－１‴と同じくし，北辺は右側辺にほぼ接している。北西角部および南東角部には，棺台は見られないが，北辺沿いに拳～掌大の石が２石並べられ，東辺には東南角から25cm程度のところに須恵器坏（274）が置かれており，これらが棺台をなすと思われる。また棺の南西角には棺台となりうる掌大の石が置かれている。

棺Ⅲ－４は主軸を石室主軸に対して約20°西に振る。礫床⑤の位置に搬入されるが，北１／３程度には礫床が施されておらず，礫床②がまばらに残存している。棺は北西角をほぼ右側壁に接し，西辺は袖石に接するが，南辺の位置は仕切り石付近が破壊されているため，詳細は不明である。ただ，法量的に考えても南辺を仕切り石に乗せていたことは確実に思われるが，最も南に位置する棺の南西端が羨道部に入りこむことを想定しにくいため，棺の長軸を140～150cm程度と考えた。

棺台は高さを仕切り石に合わせているため，全体に高く設定され，棺の下にも多くの須恵器が積み上げられている。

なお，追葬に際し，須恵器の副葬が全くないということは想定しにくい。しかし，３度の追葬において副葬スペースが不足したと考えれば玄室内に須恵器が見られないという事実にも合点がいく。その場合考えられるのは羨道内への副葬であり，第３次追葬にあたって，棺外の副葬品はすべて羨道へ副葬されたと解釈されよう。第２次追葬の副葬品である須恵器も坏が２点が出土したのみであるが，これも同様に羨道への副葬が考えられるのであって，この２点が棺台として羨道から持ち込まれたのかもしれない。

2．天神山古墳群の群構成及び追葬計画における今後の課題

1，3号墳とも追葬のたびに先葬棺を複雑に移動する過程を，順を追って復原した。初葬から最終葬に至るまで，一見追葬計画など存在しないかのように見える。今一度，両古墳の追葬過程を軽く振り返ってみたい。

1号墳の初葬は開口部から見て左半であり，第1次追葬は右半に並列に並べている。その後，第2次追葬時に至って初葬棺を第1次追葬棺の上に重ね，玄室を拡張して棺を左側に搬入されているのである。一方，3号墳では初葬，第1次追葬ともに右側であり，この2棺は直列に設置されている。第2次追葬時にはこの2棺を移動し，初葬棺に至っては，斜めに配置し直してまで左側に搬入する。第3次追葬時においても，先葬棺を再び移動後，第2次追葬棺を北に上げて棺を左側に搬入しているのである。こうしてみると，石室の左側，あるいは袖側のエリアが重要視されているという見方ができる。棺を袖側に搬入するための棺移動という考え方である。もし計画性がないだけであるなら，1号墳の場合なら，第2次追葬時には第1次追葬棺を初葬棺の上に乗せれば玄室を拡張しなくても良い。3号墳の場合なら初葬を左側にすれば良い。このような観点から，棺の左右に優劣があり，左側を上位と見ても良さそうである。また，追葬計画としては，本来の追葬は両墳とも奥の2棺のみが計画されており，初葬棺の配置から1号墳の第2次追葬棺，3号墳の第1次および第3次追葬棺は予定外だったものと思われる。そして予定外の人員を埋葬するために複雑に棺を移動したのであろう。

天神山1号墳および3号墳はともに6世紀後半の築造であり，1号墳がやや遅れるように思われる。この2墳は並行して追葬がなされたと考えられるわけであるが，このような群集墳の構成と先述の追葬計画は無関係とは思われないのである。ただ現段階においては資料不足の感が強く，当地域における天神山古墳群の位置付けを行なうには至らない。類例の増加を待って，より詳細に検討し，さらに他地域との比較を行なうことで当古墳群の群構成と追葬計画の位置付けおよびその関連性が一層明確になってくるものと思われる。

Ⅱ．天神山古墳群の弥生時代の遺構と周辺の遺跡（第70，71図）

天神山古墳群では，２号墳の下層を中心に土壙墓10基以上を検出している。これらのうち，時期を推定できるものは弥生中期末～後期初頭の土器を出土したＳＴ202およびＳＴ208，３号墳に付随すると見られるＳＴ301，弥生前期末～中期初頭の甕を出土したＳＴ303の４基のみであるが，２号墳下層のその他の土壙墓群も主軸をＳＴ202やＳＴ208と平行あるいは直交させるため，同じく弥生中期末～後期初頭の所産であると考えたい。ＳＴ101，ＳＴ102についてはここでは除外する。

また，天神山古墳群の立地する独立丘陵の麓から壺棺２基以上，およびそれに伴うものと思われる高坏，ならびに石室内に混入した石鏃のいずれもが当該期に属するものと見て大過ないであろう。これらの遺構・遺物を周辺に立地する同時期の遺跡から考えてみたい。なお，以下では後期古墳群との混同を避けるため，鹿伏天神山と呼ばれる当丘陵上および山裾に位置する弥生中期末から後期初頭にかけての遺構を総称して「天神山遺跡」，天神山遺跡を構成する土壙墓や壺棺を一括して「土壙墓群」と呼称する。

天神山遺跡は言うまでもなく墓域であり，生活域ではない。そして天神山遺跡にも当然付随する，生活域としての集落が存在したはずであるが，現段階においてその所在は不明である。しかし，天神山遺跡とほぼ同時期と思われる遺跡が数ヶ所調査されており，これらの関連性を指摘できれば，自ずと当該期の白山周辺地域の様相が明確になってくるものと思われる。一部第２章「遺跡の立地と環境」と重複するが，ここでは当地域の弥生中期～後期像を解明する足掛りとして周辺の遺跡を概観し，比較することで弥生時代のまとめとしたい。

白山遺跡群

鹿伏天神山の東約1.0kmにそびえる，標高約203mの独立山塊である。山頂付近に立地する白山２遺跡[1]では中期末，南西麓にあたる白山３遺跡[2]では弥生中期末～後期初頭頃の集落が形成されている。また，南側の斜面では時期不詳ながら土壙墓や配石土壙墓，箱式石棺が検出されている。白山西麓に位置する白山１遺跡[3]でも弥生中期末に属する「六区袈裟襷文銅鐸」が出土している。

鹿伏・中所遺跡[4]

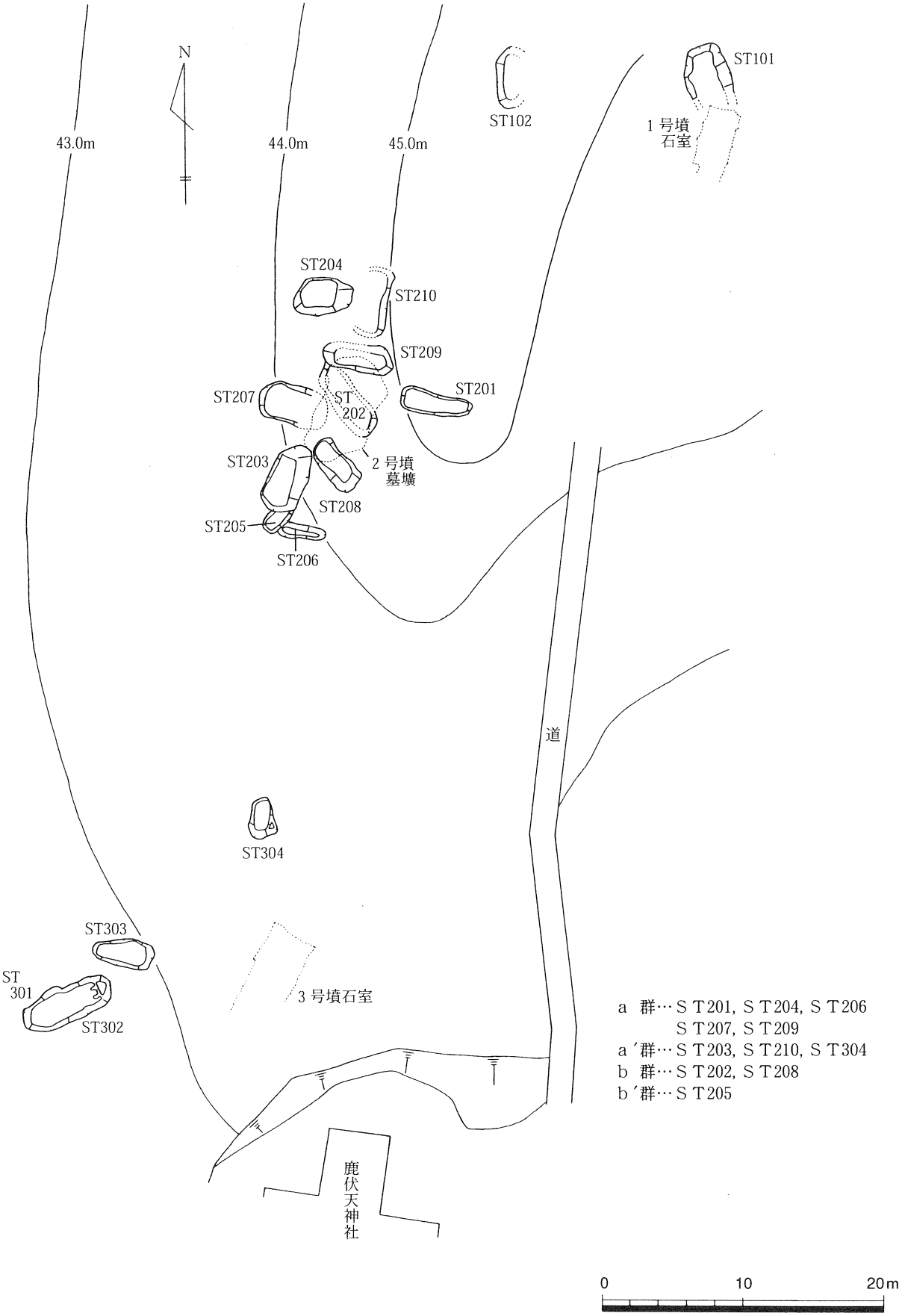
鹿伏天神山の西約0.4kmの微高地および南外延部に立地する集落遺跡で，集落の東側を新川が北流している。この集落は弥生時代中期～古墳時代前期における周辺地域の拠点集落と考えられており，特に弥生時代後期以降は集落が拡大する傾向にあるようである。特に弥生後期後半～末にかけての土器棺が18基検出されており，それらの主軸が白山のある，東方に向いている。また，その周囲には墓の可能性のある長方形の土坑が分布している。なお，天神山遺跡が形成される弥生中期末～後期初頭にかけての遺構遺物はそれ以降のものに比べると希薄なようである。

鹿伏天神山の丘陵上に構成される土壙墓の主軸には２パターンあり，１つには主軸をＥ15°Ｎ前後を採るもの（ａ群）とそれに直交するもの（ａ′群），もう１つは主軸にＮ40°Ｗ前後を採

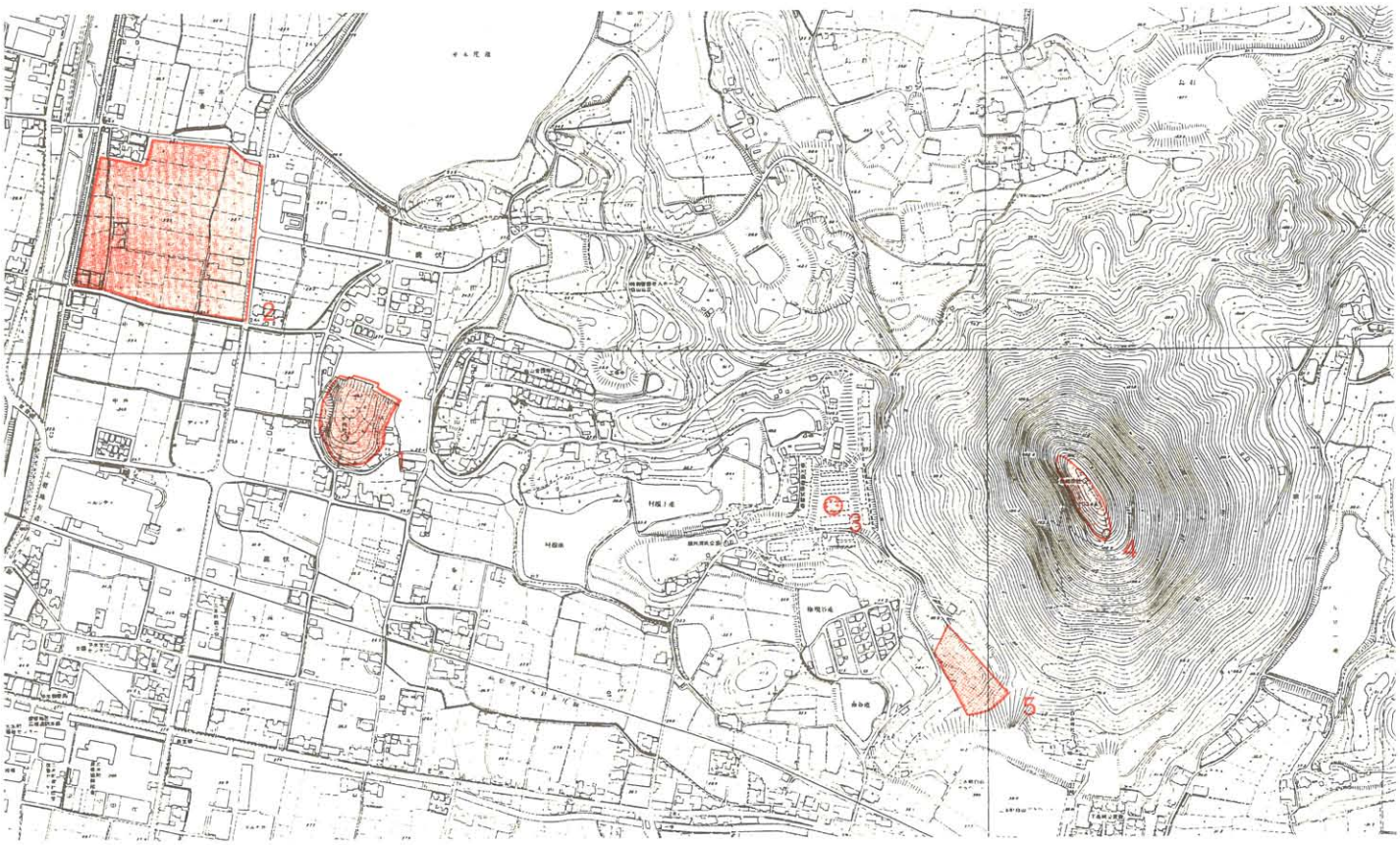
るもの（ｂ群）とそれに直交するもの（ｂ′群）である。これらの立地は，ＳＴ201以外は丘陵頂上付近の西側緩斜面上である。弥生時代前期末～中期初頭に含まれるＳＴ304も主軸はａ群である。

ａ群の主軸の延長線上に見られるものは白山である。そしてｂ群の主軸の延長上は鹿伏・中所遺跡である。ｂ群については，それらの指す方位は別の場所かもしれないが，現況においての候補は鹿伏・中所遺跡のみである。鹿伏・中所遺跡では後続する弥生後期後半の土器棺の主軸が白山方向を向き，また，白山山頂と山麓には，天神山遺跡とほぼ同時期にあたる中期末～後期初頭の小集落および埋納された銅鐸の存在，そして天神山遺跡の立地と主軸には非常に興味深いものがある。しかし，鹿伏・中所遺跡は当該期の遺構が希薄であり，また周囲の状況を関連させるにもまだまだ資料不足である。

今後，発掘調査が広く実施され，当地域の弥生中期末～後期初頭の集落や墓域，祭祀を含めた空間の構造を復元できれば，当地域における天神山遺跡の位置付けも自ずとなされるものと思われる。



第70図　土壙墓群配置図（Ｓ＝1／200）



第71図　天神山遺跡周辺の弥生時代の遺跡（S＝1／12,500）

1　天神山遺跡（天神山古墳群）
2　鹿伏・中所遺跡
3　白山１遺跡
4　白山２遺跡
5　白山３遺跡

《参考文献》

1　「白山遺跡」　『新編　香川叢書　考古編』1983

2　石井健一　『白山３遺跡』三木町教育委員会　2001

3　１と同じ

4　西村尋文・古野徳久「鹿伏・中所遺跡」『高校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』1995
　西村尋文・中村昭浩「鹿伏・中所遺跡」『高校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』1996

遺　物　観　察　表

天神山古墳出土遺物観察表

1号墳出土遺物

土器

図版番号	出土地点	器種	現存部位	現存率	法量（cm）			成形および調整技法（外面／内面）	施文の特徴	色調（外面／内面）	胎　土	焼成	備考
					口径	器高	底径						
1	石室内	坏蓋		2/3	12.2	4.3		磨滅(ヘラケズリ?・回転ナデ／回転ナデ)		青灰(5B6/1)／青灰(5B6/1)	やや密・微砂少量	良	
2	石室内	坏蓋		ほぼ完形	13.0	4.4		磨滅(ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ)		灰白(2.5Y8/2)／灰白(2.5Y8/1)	密・長石，微砂少量	良	
3	石室内	坏蓋		3/4	12.4	4.5		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗赤灰(5R4/1)／赤灰(5R6/1)	やや粗・微砂多	不良	
4	石室内	坏蓋		ほぼ完形	12.8	4.3		磨滅（回転ナデ／回転ナデ）		青灰(5B6/1)／青灰(5B5/1)	やや粗・微砂を含む	良	
5	石室内	坏蓋		ほぼ完形	13.4	4.2		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		黄灰(2.5Y6/1)／灰(5Y5/1)	密・0.5mm以下の長石，微砂ごく少量	不良	
6	石室内	坏蓋		1/6	12.8	4.0	4.0	磨滅（ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ）		灰白(5Y8/1)／灰白(2.5Y8/1)	密・2mm以下の長石・粗砂少量	不良	
7	石室内	坏蓋		ほぼ完形	12.9	4.2		カキメ・回転ナデ／回転ナデ		灰白(2.5Y7/1)／灰白(2.5Y8/1)	密・1mm以下の長石，石英，細～中砂少量	不良	
8	石室内	坏身		ほぼ完形	12.9	4.4		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5PB5/1)／暗青灰(5PB4/1)	やや密・微砂少量	良好	
9	石室内	坏蓋		完形品	14.3	3.9		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B3/1)／暗青灰(5PB4/1)	密・微砂多く含む	良好	
10	石室内	坏蓋		完形品	14.6	4.7		ヘラケズリ・回転ナデ／磨滅(回転ナデ)		青灰(5B5/1)／青灰(5PB6/1)	密・微砂少量	良	
11	石室内	坏蓋		完形品	13.7	4.3		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B3/1)／緑灰(10GY6/1)	やや粗・0.5mm以下の長石，微砂多	良好	
12	石室内	坏蓋		完形品	14.0	4.0		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		緑灰(10G5/1)／青灰(5B5/1)	密・微砂少量	良好	
13	石室内	坏蓋		ほぼ完形	13.7	4.8		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(10BG5/1)／暗青灰(5B5/1)	やや粗・長石，微砂を含む	良	
14	石室内	坏蓋		3/4	13.8	4.7		磨滅(不明／回転ナデ)		浅黄橙(10YR8/2)／にぶい黄橙(10YR7/2)	やや密・微砂少量含む	不良	
15	石室内	坏身		完形品	10.6	3.7		磨滅(回転ナデ／回転ナデ)		灰白(5Y7/1)／灰白(5Y8/1)	密・細砂少量含む	不良	
16	石室内	坏身		完形品	11.4	4.1		磨滅（ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ）		灰白(2.5Y8/1)／灰白(2.5Y7/1)	密・0.5mm以下の長石，石英少量	不良	
17	石室内	坏身		ほぼ完形	11.2	4.1		磨滅（カキメ・回転ナデ／回転ナデ）		灰白(5Y8/1)／灰白(5Y8/1)	密・細～中砂少量	不良	
18	石室内	坏身		ほぼ完形	11.3	4.3		カキメ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(10BG5/1)／暗青灰(5PB3/1)	密・微砂を含む	良好	
19	石室内	坏身		ほぼ完形	11.9	4.0		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		灰白(10YR8/1)／にぶい黄橙(10YR7/3)	密・細砂少量	不良	
20	石室内	坏身		完形品	12.8	3.9		カキメ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5PB4/1)／暗青灰(5PB3/1)	密・0.5mm以下の長石，微砂を含む	良好	
21	石室内	坏身		ほぼ完形	12.6	4.4		カキメ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5B6/1)／青灰(5B6/1)	密・微砂少量含む	やや良	
22	石室内	坏身		完形品	12.0	4.1		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(10BG5/1)／青灰(5BP6/1)	密・微砂少量含む	良	
23	石室内	坏身		完形品	13.0	4.0		回転ナデ／回転ナデ		緑灰(10G5/1)／青灰(5PB5/1)	やや粗・0.5mm以下の長石，細砂多	良好	外面全体に自然釉(暗オリーブ灰 2.5GY3/1)
24	石室内	坏身		完形品	13.2	3.7		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		緑灰(10G5/1)／青灰(5B5/1)	やや密・微砂少量含	良好	
25	石室内	口縁部		5/6	21.4	3.2		ナデ／ハケ		赤(10R5/1)／赤(10R5/1)	粗・0.5mm以下の長石，石英，中砂多	良好	土師器
26	石室内	提瓶		完形品	4.0	7.8		磨滅（回転ナデ・カキメ／回転ナデ）		暗青灰(5B4/1)	粗・0.5mm以下の長石，微～細砂多	良好	
27	石室内	高坏		0.5	(14.2)	8.1	(9.2)	磨滅(不明 ／ 不明)		灰白(7.5YR8/1)／灰白(5Y8/1)	密・細砂を多く含む	不良	
28	石室内	平瓶		ほぼ完形品	6.6	17.1	9.1	磨滅（回転ナデ）		青灰(5B5/1)	やや粗・細～粗砂多	良	
29	石室内	体部		1/6		(7.0)		磨滅（カキメ？ヘラケズリ）／回転ナデ		青灰(5PB6/1)／青灰(5PB6/1)	やや粗・3mm以下の長石，細砂多く含む	やや不良	
30	石室内	瓶		完形	3.6	17.6		磨滅（カキメ・ヘラケズリ・ナデ）		青灰(5B6/1)	やや粗	良	
31	石室内	提瓶		完形品	6.1	18.3		カキメ・回転ナデ		暗青灰(5PB4/1)	密・微砂少量	良	
32	周溝内	蓋		1/4	12.4	(3.8)		回転ナデ／回転ナデ		青灰(5PB6/1)／青灰(5PB6/1)	粗・微砂多く含む	良	試掘
33	周溝内	坏蓋		1/2	14.4	4.0		カキメ・回転ナデ／回転ナデ		緑灰(10G6/1)／青灰(10BG6/1)	やや粗・5mm以下の長石，微～粗砂を含む	やや不良	
34	周溝内	坏蓋		2/3	14.4	3.7		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		緑灰(10GY6/1)／青灰(5B6/1)	密・2mm以下の長石，細～中砂多く含む	良	
35	周溝内	坏身		2/3	12.5	4.4		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5BG6/1)／青灰(5B6/1)	やや粗・1mm以下の長石，微～中砂少量含む	良	
36	墓道	高坏		1/2	11.8	7.7	8.4	磨滅（回転ナデ／回転ナデ）		坏部：灰白(2.5Y8/1)／淡黄(2.5Y8/3) 脚部：青灰(5B6/1)	密・0.5mm以下の微砂少量		坏部焼成不良，脚部焼成良
37	墓道	高杯	脚部	1/8		(6.4)		回転ナデ	スカシ	青灰(5BG6/1)／緑灰(10G6/1)	密・微砂少量	良	
38	周溝内	壺	頚～底部	2/3				回転ナデ／回転ナデ	沈線２条	青灰(5B6/1)／青灰(5B5/1)	粗・1mm以下の長石，細砂多	良	
39	周溝内	壺	口縁～底部		21.9	(15.1)		回転ナデ・タタキ・／回転ナデ・タタキ		灰白(7.5YR8/1)／灰白(5Y8/1)	密・微砂を多く含む	不良	

鉄鏃

図版番号	出土地点	法量（cm）			茎の断面	重量(g)	備考
		現存長	鏃身				
			長	幅			
47	石室内	7.4	(5.2)	(2.0)	長方	19.89	腸抉三角形鏃，逆刺欠損
48	石室内	9.7	5.8	3.7		27.88	
49	石室内	12.8	(5.6)	(2.6)	方	21.73	腸抉三角形鏃，逆刺欠損
50	石室内	13.3	2.8	1.2	不明	39.27	a 長頸鏃，刃部に鉄片銹着
50	石室内	16.5	3.0	1.4	不明		b 長頸鏃

刀子

図版番号	出土地点	法量（cm）				重量(g)	備考
		現存長	刃部長	刀身幅	刀身厚		
43	石室内	8.0	(8.0)	1.7	0.5	21.45	
44	石室内	4.3	(1.9)	1.6	0.3	24.57	刀身と柄の結合部に金属性の板を巻きつける
45	石室内	8.0	(3.7)	1.4	0.4	20.62	

鉈

図版番号	出土地点	法量（cm）			頸の断面	重量(g)	備考
		現存長	刃部				
			長	幅			
46	石室内	8.9	3.4	1.3	方	10.43	

馬具

図版番号	出土地点	種類	現存長	現存幅	断面の形状	重量(g)	備考
40	石室内	鞍金具	6.0	5.1	楕円	41.28	磯金具か？

不明品

図版番号	出土地点	法量（cm）			断面の形状	重量(g)	備考
		現存長	現存幅	最大厚			
41	石室内	13.1	1.2	0.5	三角形（刃部），方形（基部）	19.73	
42	石室内	5.3	1.1	0.4	三角形	10.26	刀子か？

耳環

図版番号	出土地点	器種	素材	箔	色調	法量(mm)		重量(g)	備考
						径	長さ		
58	石室内	耳環	銅	銀	緑青・緑～赤褐	4.9	25.3	7.47	
59	石室内	耳環	銅	銀	緑青・銀・深緑	9.5	27.4	21.83	
60	石室内	銅環	銅		緑青・黒褐	2.0	16.0	0.54	
61	石室内	耳環	銅	銀	緑青・灰黒	3.8	19.0	2.25	
62	石室内	耳環	銅		緑青・黒褐色（内部）	6.4	26.4	14.54	
63	石室内	耳環	銅	金	緑青・金	6.4	25.2	14.14	
64	石室内	耳環	銅		緑青	8.2	26.8	21.53	
65	石室内	耳環	銅	銀	緑青・灰黒	8.5	28.0	20.39	

玉類

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
51	石室内	勾玉	瑪瑙	赤褐～橙色	7.5	25.8	2.8	3.44	0.37	3.80		
52	石室内	勾玉	翡翠	濃深緑	9.2	29.5	3.5	3.21	0.38	6.25		
53	石室内	勾玉	瑪瑙	黄橙に乳白のしま	9.3	33.4	2.8	3.59	0.30	6.59		
54	石室内	切小玉	水晶	薄乳白色	16.0	22.6	2.6	1.41	0.16	6.34		
55	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	11.5	3.9	31.4	0.34	2.73	7.71		
56	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	11.6	27.8	4.4	2.40	0.38	7.66		
57	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	9.9	26.6	2.5	2.69	0.25	5.00		
66	石室内	小玉	ガラス	明水色	2.7	2.2	1.3	0.81	0.48	0.04		
67	石室内	小玉	ガラス	濃青緑	2.5	2.4	1.0	0.96	0.40	0.03		
68	石室内	小玉	ガラス	薄青緑	2.3	2.5	0.9	1.09	0.39	0.03		
69	石室内	小玉	ガラス	水色	3.0	2.0	1.1	0.67	0.37	0.03		
70	石室内	小玉	ガラス	水色	3.3	1.5	1.1	0.45	0.33	0.02		
71	石室内	小玉	ガラス	水色	3.3	2.0	1.3	0.61	0.39	0.03		
72	石室内	小玉	ガラス	水色	3.2	2.8	1.2	0.88	0.38	0.04		
73	石室内	小玉	ガラス	濃水色	3.3	2.3	1.0	0.70	0.30	0.04		
74	石室内	小玉	ガラス	明水色	3.4	2.7	1.2	0.79	0.35	0.04		
75	石室内	小玉	ガラス	水色	3.4	2.3	1.3	0.68	0.38	0.04		
76	石室内	小玉	ガラス	濃水色	3.2	2.8	1.1	0.88	0.34	0.04		
77	石室内	小玉	ガラス	濃水色	3.6	3.0	1.1	0.83	0.31	0.05		
78	石室内	小玉	ガラス	濃水色	3.4	3.5	1.1	1.03	0.32	0.07		
79	石室内	小玉	ガラス	淡水色	3.5	1.5	1.4	0.43	0.40	0.02		
80	石室内	小玉	ガラス	濃水色	3.5	1.8	1.3	0.51	0.37	0.04		
81	石室内	小玉	ガラス	明水色	3.6	1.9	1.2	0.53	0.33	0.02		
82	石室内	小玉	ガラス	明水色	3.9	2.0	1.3	0.51	0.33	0.05		
83	石室内	小玉	ガラス	明水色	3.8	2.3	1.3	0.61	0.34	0.04		
84	石室内	小玉	ガラス	薄水色	3.9	2.2	1.3	0.56	0.33	0.04		
85	石室内	小玉	ガラス	明水色	4.0	2.0	1.3	0.50	0.33	0.04		
86	石室内	小玉	ガラス	明水色	4.0	2.3	1.4	0.58	0.35	0.04		
87	石室内	小玉	ガラス	明水色	3.5	2.3	1.3	0.66	0.37	0.03		1/2欠損
88	石室内	小玉	ガラス	薄水色	3.5	2.4	1.2	0.69	0.34	0.04		
89	石室内	小玉	ガラス	濃水色	3.5	2.6	1.1	0.74	0.31	0.04		
90	石室内	小玉	ガラス	水色	3.6	2.5	0.9	0.69	0.25	0.06		
91	石室内	小玉	ガラス	明水色	4.6	3.0	1.3	0.65	0.28	0.06		
92	石室内	小玉	ガラス	濃水色	3.8	2.6	1.2	0.68	0.32	0.06		
93	石室内	小玉	ガラス	濃水色	3.7	3.0	1.4	0.81	0.38	0.06		
94	石室内	小玉	ガラス	濃水色	4.2	2.4	1.2	0.57	0.29	0.05		
95	石室内	小玉	ガラス	水色	4.3	3.3	1.4	0.77	0.33	0.09		
96	石室内	小玉	ガラス	濃水色	4.2	3.5	1.6	0.83	0.38	0.08		
97	石室内	小玉	ガラス	水色	3.9	3.6	1.5	0.92	0.38	0.07		
98	石室内	小玉	ガラス	水色	4.2	4.0	1.6	0.95	0.38	0.09		
99	石室内	小玉	ガラス	水色	4.6	3.7	1.5	0.80	0.33	0.11		
100	石室内	小玉	ガラス	濃黄緑	3.7	2.7	1.1	0.73	0.30	0.05		
101	石室内	小玉	ガラス	濃黄緑	3.5	2.9	1.3	0.83	0.37	0.06		
102	石室内	小玉	ガラス	濃黄緑	3.8	3.0	1.8	0.79	0.47	0.07		
103	石室内	小玉	ガラス	濃黄緑	4.4	1.9	1.8	0.43	0.41	0.04		
104	石室内	小玉	ガラス	濃黄緑	4.5	2.5	1.6	0.56	0.36	0.07		
105	石室内	小玉	ガラス	薄青緑	3.0	2.0	0.9	0.67	0.30	0.03		
106	石室内	小玉	ガラス	薄青緑	3.1	2.3	1.1	0.74	0.35	0.02		
107	石室内	小玉	ガラス	薄青緑	3.2	2.5	0.8	0.78	0.25	0.03		
108	石室内	小玉	ガラス	薄青緑	3.1	2.6	0.9	0.84	0.29	0.04		
109	石室内	小玉	ガラス	青緑	3.3	2.8	1.0	0.85	0.30	0.05		
110	石室内	小玉	ガラス	濃青緑	3.1	3.6	1.2	1.16	0.39	0.05		
111	石室内	小玉	ガラス	濃青緑	3.7	2.5	1.5	0.68	0.41	0.05		

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
112	石室内	小玉	ガラス	群青	5.2	2.4	1.4	0.46	0.27	0.11		
113	石室内	練玉	土	褐	6.9	4.7	1.6	0.68	0.23	0.25	良	
114	石室内	練玉	土	褐灰	7.0	5.8	1.7	0.83	0.24	0.35	不良	
115	石室内	練玉	土	褐	7.0	6.0	1.1	0.86	0.16	0.31	良	
116	石室内	練玉	土	明灰黒	7.4	5.9	1.6	0.80	0.22	0.35	良	
117	石室内	練玉	土	灰黒	7.7	6.1	2.0	0.79	0.26	0.35	良	
118	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.0	1.3	0.77	0.17	0.32	良	下面剥離
119	石室内	練玉	土	灰黒	7.8	6.0	1.6	0.77	0.21	0.37	良	
120	石室内	練玉	土	褐灰	7.2	6.3	2.0	0.88	0.28	0.34	良	
121	石室内	練玉	土	灰黒	7.6	6.1	1.6	0.80	0.21	0.35	良	
122	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.2	1.7	0.79	0.22	0.37	良	
123	石室内	練玉	土	黄灰	7.9	6.2	1.2	0.78	0.15	0.39	良	
124	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.4	1.6	0.85	0.21	0.34	良	一部欠損
125	石室内	練玉	土	黒	7.3	6.5	1.8	0.89	0.25	0.37	良	
126	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.5	1.8	0.87	0.24	0.45	良	
127	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.6	1.8	0.85	0.23	0.37	良	
128	石室内	練玉	土	灰黒	8.0	6.5	1.4	0.81	0.18	0.45	良	
129	石室内	練玉	土	黒	8.1	6.4	2.1	0.79	0.26	0.31	良	
130	石室内	練玉	土	黒	8.0	6.5	2.3	0.81	0.29	0.40	良	
131	石室内	練玉	土	灰黒	6.8	6.8	1.9	1.00	0.28	0.34	良	
132	石室内	練玉	土	灰黒	7.0	6.9	2.0	0.99	0.29	0.32	良	
133	石室内	練玉	土	灰黒	7.4	6.9	1.8	0.93	0.24	0.40	良	側面に亀裂
134	石室内	練玉	土	灰黒	7.3	6.6	1.5	0.90	0.21	0.46	良	
135	石室内	練玉	土	黒	7.1	7.0	1.7	0.99	0.24	0.36	良	
136	石室内	練玉	土	黒	7.0	7.2	1.8	1.03	0.26	0.37	良	
137	石室内	練玉	土	灰黒	7.8	6.1	1.6	0.78	0.21	0.30	良	
138	石室内	練玉	土	黄灰	7.7	6.3	1.8	0.82	0.23	0.31	良	
139	石室内	練玉	土	灰黒	7.4	6.0	1.9	0.81	0.26	0.29	良	下面一部剥離
140	石室内	練玉	土	黒	7.4	6.4	1.9	0.86	0.26	0.33	良	
141	石室内	練玉	土	黒	8.0	6.5	1.8	0.81	0.23	0.44	良	下面一部剥離，側面に亀裂あり
142	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.7	2.0	0.89	0.27	0.34	良	両端面一部剥離
143	石室内	練玉	土	黒	8.0	6.6	2.0	0.83	0.25	0.38	良	
144	石室内	練玉	土	黒	7.9	6.8	1.5	0.86	0.19	0.38	良	側面に粘土接合痕，一部剥離
145	石室内	練玉	土	灰黒	(7.4)	(6.6)	1.6			0.21	良	1/2欠損
146	石室内	練玉	土	黒	7.4	6.9	1.7	0.93	0.23	0.38	良	側面一部剥離
147	石室内	練玉	土	黒	7.3	7.0	1.8	0.96	0.25	0.39	良	
148	石室内	練玉	土	灰黒	7.4	7.0	1.6	0.95	0.22	0.40	良	
149	石室内	練玉	土	灰黒	(7.2)	7.4	(2.3)			0.20	良	1/2欠損
150	石室内	練玉	土	黒	7.9	6.8	1.7	0.86	0.22	0.39	良	
151	石室内	練玉	土	黒	(7.8)	(5.5)	1.8			0.22	良	側面および下端面一部欠損
152	石室内	練玉	土	灰黒	7.8	4.3	1.6	0.55	0.21	0.21	良	下1/2欠損
153	石室内	練玉	土	黒	7.8	(4.5)	1.4		0.18	0.23	良	1/2欠損
154	石室内	練玉	土	灰黒	7.9	6.9	1.7	0.87	0.22	0.44	良	
155	石室内	練玉	土	灰黒	(7.8)	(7.0)	1.8			0.30	良	側面一部欠損，亀裂あり
156	石室内	練玉	土	黒	8.0	6.8	1.7	0.85	0.21	0.39	良	
157	石室内	練玉	土	黒	7.7	7.0	1.8	0.91	0.23	0.34	良	側面一部剥離
158	石室内	練玉	土	褐灰	7.7	7.0	1.8	0.91	0.23	0.38	良	
159	石室内	練玉	土	灰黒	8.0	7.0	2.2	0.88	0.28	0.41	良	
160	石室内	練玉	土	黒	7.9	7.1	1.6	0.90	0.20	0.39	良	
161	石室内	練玉	土	灰黒	7.8	7.2	2.5	0.92	0.32	0.43	良	一部欠損
162	石室内	練玉	土	黒	7.8	7.3	1.7	0.94	0.22	0.37	良	
163	石室内	練玉	土	黒	7.9	7.0	1.5	0.89	0.19	0.43	良	
164	石室内	練玉	土	黒	7.6	7.4	1.6	0.97	0.21	0.47	良	
165	石室内	練玉	土	黒	7.8	7.6	1.6	0.97	0.21	0.50	良	
166	石室内	練玉	土	褐灰	7.6	7.7	1.7	1.01	0.22	0.41	不良	

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
167	石室内	練玉	土	黒	7.0	8.0	1.9	1.14	0.27	0.38	良	下面一部剥離
168	石室内	練玉	土	黒	8.3	5.9	1.8	0.71	0.22	0.32	良	一部欠損
169	石室内	練玉	土	灰黒	8.4	5.7	1.5	0.68	0.18	0.39	良	
170	石室内	練玉	土	黒	8.4	6.0	1.9	0.71	0.23	0.44	良	
171	石室内	練玉	土	黒	8.2	6.3	1.6	0.77	0.20	0.38	良	
172	石室内	練玉	土	黒	8.2	6.2	1.5	0.76	0.18	0.35	良	
173	石室内	練玉	土	黒	8.4	6.3	1.8	0.75	0.21	0.35	良	側面一部剥離
174	石室内	練玉	土	灰黒	8.2	6.5	1.6	0.79	0.20	0.45	良	
175	石室内	練玉	土	黒	8.1	6.5	1.5	0.80	0.19	0.39	良	
176	石室内	練玉	土	黒	(8.0)	6.6	1.8			0.21	良	1/2欠損
177	石室内	練玉	土	黒	8.2	6.6	2.3	0.80	0.28	0.41	良	
178	石室内	練玉	土	黒	8.2	6.6	1.6	0.80	0.20	0.43	良	
179	石室内	練玉	土	黒	8.3	6.5	1.6	0.78	0.19	0.37	良	
180	石室内	練玉	土	黒	8.3	6.5	1.9	0.78	0.23	0.37	良	
181	石室内	練玉	土	黒	8.2	6.7	1.5	0.82	0.18	0.46	良	
182	石室内	練玉	土	灰黒	(8.2)	(6.6)	1.4			0.34	良	広範にわたって剥離
183	石室内	練玉	土	黒	8.6	6.4	1.5	0.74	0.17	0.21	良	
184	石室内	練玉	土	黒	8.6	6.5	1.3	0.76	0.15	0.24	良	1/2欠損
185	石室内	練玉	土	黄灰	8.6	6.5	1.8	0.76	0.21	0.43	良	
186	石室内	練玉	土	黒	8.7	6.5	2.3	0.75	0.26	0.39	良	
187	石室内	練玉	土	黒	8.8	6.6	1.6	0.75	0.18	0.48	良	
188	石室内	練玉	土	黒	8.6	6.5	2.3	0.76	0.27	0.39	良	側面に粘土の接合痕
189	石室内	練玉	土	黒	8.5	6.6	1.6	0.78	0.19	0.47	良	下端面剥離
190	石室内	練玉	土	黒	8.5	7.0	2.3	0.82	0.27	0.46	良	
191	石室内	練玉	土	灰黒	8.7	7.0	2.0	0.80	0.23	0.54	良	
192	石室内	練玉	土	黄灰	8.2	7.0	1.4	0.85	0.17	0.44	良	下端面剥離
193	石室内	練玉	土	黄灰	8.3	7.0	2.4	0.84	0.29	0.39	良	
194	石室内	練玉	土	灰黒	8.3	7.0	1.8	0.84	0.22	0.44	良	側面に亀裂
195	石室内	練玉	土	黒	8.4	6.9	1.9	0.82	0.23	0.47	良	
196	石室内	練玉	土	灰黒	8.4	7.1	1.7	0.85	0.20	0.51	良	
197	石室内	練玉	土	黄灰	8.6	7.0	1.8	0.81	0.21	0.57	良	
198	石室内	練玉	土	黒	8.6	7.1	2.2	0.83	0.26	0.60	良	
199	石室内	練玉	土	褐灰	8.7	7.1	1.6	0.82	0.18	0.53	良	一部剥離
200	石室内	練玉	土	黄灰	8.5	7.4	1.9	0.87	0.22	0.50	良	一部剥離
201	石室内	練玉	土	黄灰	8.5	7.4	1.8	0.87	0.21	0.48	良	一部剥離
202	石室内	練玉	土	黒	8.5	7.3	1.6	0.86	0.19	0.54	良	一部欠損
203	石室内	練玉	土	黒	8.3	7.3	1.5	0.88	0.18	0.49	良	
204	石室内	練玉	土	灰黒	8.3	7.5	1.6	0.90	0.19	0.56	良	
205	石室内	練玉	土	黒	8.3	7.5	1.6	0.90	0.19	0.50	良	
206	石室内	練玉	土	黄灰	8.2	7.6	1.7	0.93	0.21	0.50	良	
207	石室内	練玉	土	黒	8.3	7.4	1.8	0.89	0.22	0.51	良	
208	石室内	練玉	土	黒	8.3	7.7	1.6	0.93	0.19	0.45	良	1/6欠損
209	石室内	練玉	土	黒	8.4	7.5	1.6	0.89	0.19	0.43	良	
210	石室内	練玉	土	黒	8.8	7.2	1.8	0.82	0.20	0.55	良	
211	石室内	練玉	土	灰黒	8.4	7.5	2.5	0.89	0.30	0.44	良	
212	石室内	練玉	土	黒	8.4	7.8	1.8	0.93	0.21	0.53	良	
213	石室内	練玉	土	黒	8.8	7.6	1.7	0.86	0.19	0.56	良	
214	石室内	練玉	土	黒	8.8	7.4	1.6	0.84	0.18	0.58	良	
215	石室内	練玉	土	黒	8.8	7.5	1.7	0.85	0.19	0.55	良	
216	石室内	練玉	土	黒	8.7	7.5	1.4	0.86	0.16	0.56	良	
217	石室内	練玉	土	灰黒	8.7	7.4	1.3	0.85	0.15	0.51	良	
218	石室内	練玉	土	黒	8.8	7.8	1.7	0.89	0.19	0.60	良	
219	石室内	練玉	土	黒	9.1	6.6	1.1	0.73	0.12	0.49	良	
220	石室内	練玉	土	灰黒	9.0	7.0	1.4	0.78	0.16	0.48	良	
221	石室内	練玉	土	灰黒	9.0	6.9	1.8	0.77	0.20	0.50	良	

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
222	石室内	練玉	土	黒	9.0	7.3	1.7	0.81	0.19	0.50	良	
223	石室内	練玉	土	灰黒	9.1	7.6	2.0	0.84	0.22	0.67	良	
224	石室内	練玉	土	黒	9.4	7.6	1.8	0.81	0.19	0.66	良	
225	石室内	練玉	土	黒	9.6	7.5	1.4	0.78	0.15	0.61	良	
226	石室内	練玉	土	灰黒	9.5	8.0	1.8	0.84	0.19	0.62	良	
227	石室内	練玉	土	灰黒	9.3	8.5	1.4	0.91	0.15	0.66	良	
228	石室内	練玉	土	黒	9.4	8.6	1.5	0.91	0.16	0.41	良	1/2欠損
229	石室内	練玉	土	黒	9.8	7.0	1.6	0.71	0.16	0.61	良	孔を2度穿った痕跡
230	石室内	練玉	土	黒	10.4	8.6	1.8	0.83	0.17	0.84	良	

2号墳出土遺物

土器

図版番号	出土地点	器種	現存部位	現存率	法量（cm）			成形および調整技法（外面／内面）	施文の特徴	色調（外面／内面）	胎　土	焼成	備考
					口径	器高	底径						
231	主体部	蓋		1/4	11.2	(2.9)		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(10BG5/1)／暗青灰(5B4/1)	やや粗・0.5 mm以下の長石，微砂少量	良好	
232	主体部	坏蓋		1/4	11.8	3.8		磨滅（回転ナデ）／回転ナデ		オリーブ灰(2.5GY6/1)／青灰(5PB6/1)	粗・0.5mm以下の長石，細～粗砂を多く含む	良	
233	周溝(東部)	蓋				(2.7)		磨滅（回転ナデ）／回転ナデ		紫灰(5RP5/1)／青灰(5PB5/1)	やや粗・1mm以下の長石・中砂多く含む	良好	
234	主体部	坏蓋		1/4	15.0	(3.2)		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(10BG7/1)／青灰(5B7/1)	密・0.5mm以下の長石，微砂少量含	良	
235	主体部		底部	1/3		(7.5)	7.5	ハケのちナデ／磨滅（不明）		明橙(7.5YR5/8)／橙(7.5YR6/8)	粗・2mm以下の長石・石英，中砂を含む	良好	240と同一個体か？

銅製品

図版番号	出土地点	法量（cm）			茎の断面	重量(g)	備考
		現存長	鏃身				
			長	幅			
237	石室内	3.8	3.8	3.1		10.14	銅鏃？下層遺構からの混入か？

鉄鏃

図版番号	出土地点	法量（cm）			茎の断面	重量(g)	備考
		現存長	鏃身				
			長	幅			
238	石室内	7.0	7.0	2.7		18.19	鑿頭式？

玉類

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	備考
					径	長さ	孔径				
236	石室内	切小玉	翡翠	濃深緑	15.2	21.7	4.3	1.43	0.28	5.39	

ST202出土遺物

土器

図版番号	出土地点	器種	現存部位	現存率	法量（cm）			成形および調整技法（外面／内面）	施文の特徴	色調（外面／内面）	胎　土	焼成	備考
					口径	器高	底径						
239		壺		2/3	6.1	(13.8)		ハケ・ヘラミガキ・ナデ／指頭圧		にぶい赤褐(5YR4/4)／暗赤褐(5YR3/6)	粗・3mm以下の長石，石英，雲母多	良好	

ST208出土遺物

土器

図版番号	出土地点	器種	現存部位	現存率	法量（cm）			成形および調整技法（外面／内面）	施文の特徴	色調（外面／内面）	胎　土	焼成	備考
					口径	器高	底径						
240		鉢		0.25	31.2	(7.4)		磨滅(ヨコナデ／不明)		橙(5YR6/6)／橙(7.5YR6/6)	粗・5mm以下の長石，石英，細～粗砂を多く含む	良	235と同一個体か？

3号墳出土遺物

土器

図版番号	出土地点	器種	現存部位	現存率	法量（cm）			成形および調整技法（外面／内面）	施文の特徴	色調（外面／内面）	胎　土	焼成	備考
					口径	器高	底径						
241	石室内	坏蓋		ほぼ完形	11.5	4.3		磨滅（回転ナデ／回転ナデ）		青灰(5B5/1)／青灰(5PB6/1)	密・1mm以下の中砂多	やや良	
242	石室内	坏蓋		完形品	13.3	4.6		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(10BG6/1)／青灰(5B6/1)	密・0.5mm以下の長石，微砂多	やや良	
243	石室内	坏蓋		完形品	13.5	4.5		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰（5PB6/1)／青灰(5PB6/1)	密・微砂多く含む	良	焼成時における変形
244	石室内	坏蓋		完形品	13.5	4.5		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰（5PB6/1)／青灰(5PB6/1)	やや密・細砂多く含む	良	
245	石室内	坏蓋		ほぼ完形	14.4	3.9		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5B5/1)／暗青灰(5B4/1)	やや粗・中砂やや多く含む	良	焼成時に変形
246	石室内	坏蓋		ほぼ完形	14.5	4.4		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		灰白(10Y7/1)／灰白(5Y7/1)	粗・0.5mm以下の長石，微砂多	不良	
247	石室内	坏蓋		ほぼ完形	14.1	4.5		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		緑灰(5G5/1)／緑灰(10G5/1)	やや粗・粗砂多	良	
248	石室内	坏蓋		完形品	14.2	4.7		回転ナデ／回転ナデ		緑灰(5G6/1)／灰(10Y6/1)	密・0.5mm以下の微砂多	やや不良	
249	石室内	坏蓋		完形品	13.9	4.6		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5BG5/1)／青灰(5B5/1)	微砂少量	良	
250	石室内	坏蓋		ほぼ完形	13.6	3.7		磨滅（ヘラケズリ・回転ナデ）／回転ナデ		青灰(5B4/1)／青灰(5B4/1)	やや密・長石多	良	
251	石室内	坏蓋		完形品	13.4	3.8		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(10BG6/1)／青灰(5B6/1)	密・0.5mm以下の長石，微砂少量	良	
252	石室内	坏蓋		ほぼ完形	14.2	3.8		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B4/1)／青灰(5PB5/1)	やや密・微砂多	良好	
253	石室内	坏蓋		ほぼ完形	12.8	4.8		カキメ・ヘラケズリ・回転ナデ・/回転ナデ		灰白(5Y8/2)／灰白(5Y8/2)	密・微砂少量	不良	
254	石室内	坏蓋		完形品	13.6	4.6		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5B7/1)／青灰(10BG6/1)	密・0.5mm以下の長石，石英，細砂含む	やや不良	
255	石室内	坏蓋		ほぼ完形	13.7	4.5		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		灰(N6/)／灰(N6/)	やや粗・0.5mm以下の長石，細砂多	良	やや磨滅，焼成時にひずみ
256	石室内	坏蓋		1/2	14.4	(3.8)		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B4/1)／暗青灰(5PB4/1)	やや粗-0.5mm以下の長石・石英・微砂多	良好	
257	石室内	坏蓋		2/3残存	14.9	4.7		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B4/1)／青灰(5PB6/1)	やや粗・0.5mm以下の長石，微砂少量	良	天井部外面に須恵器片付着
258	石室内	坏蓋		ほぼ完形	14.4	4.1		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B4/1)／暗青灰(5PB4/1)	粗・1mm以下の長石，中砂多	良好	
259	石室内	坏蓋		ほぼ完形	13.5	4.3		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B4/1)／暗青灰(5B4/1)	粗・2mm以下の長石，細～粗砂含む	良好	
260	石室内	坏蓋		完形品	14.3	4.4		磨滅（ヘラケズリ・回転ナデ）／回転ナデ		青灰(5B5/1)／暗青灰(5B3/1)	やや粗-2mm以下の石英，長石，微細砂を含む	良好	
261	石室内	坏蓋		ほぼ完形	14.7	4.6		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5B5/1)／暗青灰(5B4/1)	粗2mm以下の長石・石英・中砂多	良好	
262	石室内	坏蓋		3/4残存	14.1	3.9		磨滅（ヘラケズリ・回転ナデ）／回転ナデ		暗青灰(5PB3/1)／暗青灰(5B3/1)	やや密・0.5mm以下の長石，微砂少量	良好	
263	石室内	坏蓋		完形品	23.8	4.2		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B4/1)／暗青灰(5PB4/1)	やや粗・0.5mm以下の微砂多	良好	天井部外面にヘラ記号
264	石室内	坏身		完形品	10.4	3.5		磨滅（部分的に回転ナデが残る）／回転ナデ		青灰(5PB6/1)／青灰(5B6/1)	1mm以下の長石，細砂多	良	
265	石室内	坏身		完形品	11.8	4.2		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		灰(N7/)／灰(N7/)	やや密・0.5mm以下の長石・微砂多	やや不良	
266	石室内	坏身		ほぼ完形	11.6	4.7		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		オリーブ灰(2.5GY6/1)／明オリーブ灰(2.5GY7/1)	密・微砂少量含む	やや不良	
267	石室内	坏身		完形品	14.4	4.2		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5B6/1)／青灰(5PB6/1)	やや粗・微砂を多く含む	やや良	
268	石室内	坏身		5/6残存	12.2	4.5		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5PB6/1)／青灰(5B6/1)	密・細砂少量	良	
269	石室内	坏身		ほぼ完形	13.6	4.3		磨滅（ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ）		青灰(10BG6/1)／青灰(5B6/1)	やや密-0.5mm以下の長石，雲母，微砂多	良	自然釉（7.5Y4/3）
270	石室内	坏身		完形品	12.0	3.7		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		緑灰(10G6/1)／青灰(10BG6/1)	密・微砂多く含む	やや不良	
271	石室内	坏身		1/3	12.8	3.9		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5B5/1)／暗青灰(5PB5/1)	密・0.5mm以下の長石，微砂少量	良好	
272	石室内	坏身		ほぼ完形	12.2	4.2		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B4/1)／暗青灰(5B4/1)	やや粗・1mm以下の石英・長石・中砂多	良好	
273	石室内	坏身		ほぼ完形	12.0	4.1		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B3/1)／暗青灰(5B4/1)	0.5mm以下の長石，細砂多	良好	焼成時のひずみあり
274	石室内	坏身		完形品	12.4	4.1		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ	口縁部に幅広の沈線	暗青灰(5BG4/1)／暗青灰(10BG4/1)	1mm以下の長石，細砂多	良	
275	石室内	坏身		ほぼ完形	12.8	4.3		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		オリーブ灰(2.5GY6/1)／明オリーブ灰(2.5GY7/1)	密・0.5mm以下の長石，微砂多	不良	焼成時のひずみあり
276	石室内	坏身		完形品	11.6	4.1		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B3/1)／青灰(5PB5/1)	密・粗砂少量	良	
277	石室内	坏身		完形品	12.2	3.8		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(10BG6/1)／青灰(5B5/1)	やや密・0.5mm以下の長石，微砂少量	良	
278	石室内	坏身		ほぼ完形	13.0	4.4		磨滅（ヘラケズリ・回転ナデ）／回転ナデ		紫灰(5RP5/1)／暗紫灰(5P4/1)	0.5mm以下の長石・細砂多	良好	
279	石室内	坏身		ほぼ完形	13.2	4.6		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		オリーブ灰(2.5GY6/1)／灰(N5/)	密・0.5mm以下の長石，微砂少	やや良	
280	石室内	坏身		ほぼ完形	12.4	3.8		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		緑灰(10GY6/1)／緑灰(5G6/1)	やや粗・0.5mm以下の長石，微砂多	やや良	
281	石室内	坏身		ほぼ完形	13.0	4.3		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5PB4/1)／青灰(5PB5/1)	やや粗・微砂少量	良	
282	石室内	坏身		完形品	12.8	4.4		磨滅（回転ナデ）／回転ナデ		青灰(5B5/1)／青灰(5B5/1)	1mm以下の長石，細砂多	良	
283	石室内	坏身		ほぼ完形	11.8	3.7		磨滅（ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ）		青灰(5PB6/1)／青灰(5B5/1)	密・0.5mm以下の長石・微砂少量	良	

図版番号	出土地点	器種	現存部位	現存率	法量（cm）			成形および調整技法（外面／内面）	施文の特徴	色調（外面／内面）	胎　土	焼成	備考
					口径	器高	底径						
284	石室内	坏身		ほぼ完形	12.7	4.4		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		灰白(7.5Y7/1)／灰白(5Y7/1)	密・細砂を含む	やや不良	
285	石室内	坏身		完形品	12.9	4.3		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		暗青灰(5B4/1)／暗青灰(5B3/1)	やや密・1mm以下の石英，長石，細～中砂	良好	
286	石室内	坏身		ほぼ完形	12.2	4.1		回転ナデ・／回転ナデ		暗青灰(5PB4/1)／暗青灰(5PB4/1)	密・微～細砂多く含む	良好	
287	石室内	坏身		ほぼ完形	15.0	4.8		回転ナデ／回転ナデ		明青灰(5BP7/1)／青灰(5BP6/1)	やや密・0.5mm以下の長石，微砂多	やや良	
288	石室内	坏身		2/3残存	12.6	4.9		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		オリーブ灰(5GY6/1)／暗青灰(5PB4/1)	0.5mm以下の長石，微砂多	良	
289	石室内	坏身		ほぼ完形	13.0	(4.1)		磨滅（回転ナデ）／回転ナデ		明青灰(5B7/1)／暗青灰(5B3/1)	密・2mm以下の長石，中～粗砂少量	良好	
290	石室内	口縁部		1/2	5.8	(3.1)		回転ナデ／磨滅(回転ナデ)		青灰(5B5/1)／青灰(5B5/1)	粗・0.5mm以下の長石，微砂多	良好	
291	石室内	鉢		1/3	11.4	(5.4)	7.0	指頭圧／指頭圧		にぶい橙(7.5YR6/4)／橙(5YR6/6)	粗・細～粗砂多	良	土師器
292	石室内	蓋		完形品	8.7	3.0		ヘラケズリ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5PB5/1)／青灰(5PB5/1)	やや密	良好	
293	石室内	台付椀		ほぼ完形	8.5	9.4	7.9	回転ナデ／回転ナデ	体部外面に沈線2条	青灰(5B5/1)／暗青灰(5PB4/1)	密・微砂	良好	
294	石室内		体部	1/3		(6.9)		回転ナデ／回転ナデ		青灰(5B5/1)／青灰(5B5/1)	粗・長石・細砂多	良好	
295	石室内		底部	1/2		(5.0)	10.2	指頭圧／指頭圧		橙(7.5YR6/6)／橙(7.5YR7/6)	粗・1mm以下の長石，石英，細～中砂多く含む	良好	土師器
296	周溝内東部	甕		1/2	19.2	7.3		磨滅（ナデ？タタキ？／タタキ？）		灰白(5Y7/1)／浅黄橙(10YR8/1)	密・微砂少量	不良	
297	石室内	提瓶		1/2	5.6	(12.5)		磨滅（カキメ・回転ナデ／回転ナデ）		青灰(5PB6/1)／青灰(5PB5/1)	密	良好	
298	石室内	提瓶		完形品	4.7	15.9		ハケ・回転ナデ／回転ナデ	肩部に形骸化した把手	暗青灰(5B3/1／暗青灰(5B3/1)	やや密・1～2mmの長石，粗砂少	良好	
299	石室内	提瓶		ほぼ完形	(5.1)	14.6		ハケ・回転ナデ／回転ナデ		青灰(5B6/1)	やや粗・0.5mm以下の長石，微砂多	良	

鉄鏃

図版番号	出土地点	法量（cm）			茎の断面	重量（g）	備考
		現存長	鏃身				
			長	幅			
302	石室内	3.8	(2.7)	2.0		9.69	
303	石室内	5.2	(5.2)	(1.4)		7.35	
313	石室内	3.1	(1.6)	2.4	長方	4.67	三角形鏃
314	石室内	4.4			長方	7.53	長頸鏃の頸部か
315	石室内	5.3	1.1	0.7	長方	9.48	三角形鏃の茎部か？矢柄残存
316	石室内	6.9			円	4.83	
317	石室内	8.0			円	6.15	長頸鏃？矢柄残存
318	石室内	8.6			円	12.37	長頸鏃？
322	石室内	6.1	(6,1)	(3.3)		15.77	三角形鏃
323	石室内	3.6	(3.6)	3.1		8.17	三角形鏃，頸部欠損
324	石室内	8.3	4.8	2.8	方	17.38	腸抉三角形鏃，頸部欠損
325	石室内	8.1	5.4	2.2	方	13.87	三角形鏃，矢柄残存
326	石室内	6.1	6.1	2.4		12.56	三角形鏃，頸部欠損
327	石室内	8.1	5.6	2.5	円	16.16	三角形鏃，矢柄残存
328	石室内	8.9	(5.6)	2.0	方	14.41	三角形鏃，矢柄残存
329	石室内	10.9	5.6	2.3	円	14.82	三角形鏃，矢柄残存
330	石室内	8.7	4.9	2.6	円	7.66	三角形鏃，矢柄残存
331	石室内	8.7	4.9	2.5		14.24	腸抉三角形鏃
332	石室内	7.5	(4.9)	2.4		14.63	腸抉三角形鏃，逆刺欠損
333	石室内	6.4	(1.3)	(1.6)	円	8.26	腸抉三角形鏃，先端および逆刺欠損
334	石室内	8.1	(2.8)	2.3	円	6.63	腸抉三角形鏃，先端および逆刺欠損
335	石室内	9.6	(5.2)	(1.5)	円	11.78	腸抉三角形鏃，逆刺欠損，矢柄残存
336	石室内	11.3	(4.8)	(2.0)	円	14.48	矢柄残存
337	石室内	12.1	(5.3)	(3.1)		20.84	腸抉三角形鏃，逆刺欠損
338	石室内	8.6	4.8	2.5	円	21.56	三角形鏃，矢柄残存

刀子

図版番号	出土地点	法量（cm）				重量(g)	備考
		現存長	刃部長	刀身幅	刀身厚		
305	石室内	10.2		1.5	0.5	20.21	
306	石室内	6.8	(6.8)	1.4	0.4	10.22	
307	石室内	8.1	(5.1)	1.8	0.4	17.63	
308	石室内	6.2	(3.1)	1.4	0.5	16.88	柄材残存
309	石室内	11.4	(6.2)	11.4	0.4	20.40	柄材残存
310	石室内	11.7	(6.8)	1.7	0.5	19.74	
311	石室内	12.9	(9.7)	1.6	0.6	31.04	柄材残存
312	石室内	16.4	(10.3)	16.4	0.5	36.12	柄材残存

鉈

図版番号	出土地点	法量（cm）			頸の断面	重量(g)	備考
		現存長	刃部				
			長	幅			
319	石室内	7.2	3.2	1.0	方	8.99	錐の可能性も
320	石室内	7.7	1.2		方	8.98	
321	石室内	7.9	3.3	1.0	方	7.83	

馬具

図版番号	出土地点	種類	現存長	現存幅	断面の形状	重量(g)	備考
326	石室内	兵庫鎖	11.3		円	222.80	

不明品

図版番号	出土地点	法量（cm）			断面の形状	重量(g)	備考
		現存長	現存幅	最大厚			
317	石室内	4.8	2.4	0.3		7.66	鉄鏃？鉄片が銹着
327	石室内		直径 0.9		円	14.33	馬具？
328	石室内	4.7	2.1	0.3	方形	5.78	鑿頭式鏃？
331	石室内	4.9	2.3	0.3		11.09	

耳環

図版番号	出土地点	器種	素材	箔	色調	法量(mm)		重量(g)	備考
						径	長さ		
347	石室内	耳環	銅		緑青	3.6	22.6	2.72	
348	石室内	耳環	銅	銀	緑青・灰黒	8.8	29.0	23.21	
349	石室内	耳環	銅	銀	緑青・銀・灰黒	8.6	29.0	25.47	
350	石室内	耳環	銅		薄緑青	6.8	26.5	15.86	
351	石室内	耳環	銅	金	緑青・赤銅・金・灰黒	7.4	25.8	16.66	

玉類

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
340	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	8.7	25.3	3.0	2.91	0.34	3.63		
341	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	8.3	25.2	2.8	3.04	0.34	3.27		
342	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	8.8	24.2	3.3	2.75	0.38	3.42		
343	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	8.3	24.4	2.6	2.94	0.31	3.25		
344	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	8.0	23.9	1.8	2.99	0.23	2.99		
345	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	10.8	27.4	2.9	2.54	0.27	6.13		
346	石室内	管玉	翡翠	濃深緑	6.9	29.9	4.1	4.33	0.59	2.41		
352	石室内	小玉	ガラス	淡い水色	3.3	2.0	1.0	0.61	0.30	0.04		約1/2を欠損
353	石室内	小玉	ガラス	水色	(2.8)	1.8	1.0			0.01		約1/2を欠損
354	石室内	小玉	ガラス	淡い水色	3.7	1.8	0.8	0.49	0.22	0.05		
355	石室内	小玉	ガラス	水色	3.2	2.4	0.9	0.75	0.28	0.05		
356	石室内	小玉	ガラス	水色	3.5	2.5	1.0	0.71	0.29	0.03		約1/2を欠損
357	石室内	小玉	ガラス	水色	3.8	1.8	1.2	0.47	0.32	0.05		
358	石室内	小玉	ガラス	濃い水色	4.2	2.0	1.4	0.48	0.33	0.05		
359	石室内	小玉	ガラス	水色	3.9	2.2	1.3	0.56	0.33	0.05		
360	石室内	小玉	ガラス	水色	4.1	2.8	1.2	0.68	0.29	0.05		
361	石室内	小玉	ガラス	緑	3.1	2.2	0.9	0.71	0.29	0.04		
362	石室内	小玉	ガラス	黄緑	4.5	2.0	1.5	0.44	0.33	0.08		
363	石室内	小玉	ガラス	黄緑	4.5	2.5	1.2	0.56	0.27	0.07		
364	石室内	小玉	ガラス	黄緑	4.6	2.2	1.7	0.48	0.37	0.08		
365	石室内	小玉	ガラス	黄緑	4.5	2.8	1.2	0.62	0.27	0.11		
366	石室内	小玉	ガラス	黄緑	4.5	2.9	1.5	0.64	0.33	0.08		
367	石室内	小玉	ガラス	黄緑	4.6	2.7	1.3	0.59	0.28	0.08		
368	石室内	小玉	ガラス	薄青緑	3.1	2.0	1.0	0.65	0.32	0.04		
369	石室内	小玉	ガラス	青緑	4.6	3.2	1.3	0.70	0.28	0.10		
370	石室内	小玉	ガラス	青	3.2	1.7	0.8	0.53	0.25	0.04		
371	石室内	小玉	ガラス	群青	(3.7)	1.9	1.1			0.04		
372	石室内	小玉	ガラス	濃紺	3.8	2.0	1.0	0.53	0.26	0.07		切断面に稜
373	石室内	小玉	ガラス	青	4.0	2.5	1.1	0.63	0.28	0.08		
374	石室内	小玉	ガラス	群青	4.2	2.1	1.3	0.50	0.31	0.06		
375	石室内	小玉	ガラス	群青	4.7	2.2	1.2	0.47	0.26	0.05		
376	石室内	小玉	ガラス	群青	4.6	2.7	1.4	0.59	0.30	0.07		
377	石室内	小玉	ガラス	群青	4.4	2.8	1.2	0.64	0.27	0.07		両端面にやや明瞭な稜線
378	石室内	小玉	ガラス	群青	4.5	3.0	1.3	0.67	0.29	0.08		
379	石室内	小玉	ガラス	群青	4.9	3.7	1.5	0.76	0.31	0.13		裁断面に明瞭な稜
380	石室内	丸玉	ガラス	群青	6.9	3.8	1.9	0.55	0.28	0.25		
381	石室内	丸玉	ガラス	群青	6.8	4.5	2.0	0.66	0.29	0.26		亀裂
382	石室内	丸玉	ガラス	濃紺	7.2	4.0	1.5	0.56	0.21	0.33		
383	石室内	丸玉	ガラス	濃紺	8.7	5.6	2.6	0.64	0.30	0.63		
384	石室内	丸玉	ガラス	濃紺	8.7	7.4	1.7	0.85	0.20	0.81		
385	石室内	小玉	滑石	灰白	5.4	2.0	1.9	0.37	0.35	0.09		
386	石室内	小玉	滑石	明灰	6.2	2.3	1.8	0.37	0.29	0.16		中央が凹む
387	石室内	小玉	滑石	黄灰白	6.4	2.5	2.2	0.39	0.34	0.15		
388	石室内	練玉	土	暗褐	5.8	5.0	1.3	0.86	0.22	0.18	良	
389	石室内	練玉	土	黒	6.7	4.0	1.3	0.60	0.19	0.24	良	
390	石室内	練玉	土	黒灰	6.4	5.2	1.4	0.81	0.22	0.22	良	
391	石室内	練玉	土	黒	6.9	5.0	1.3	0.72	0.19	0.27	良	
392	石室内	練玉	土	黒灰	6.6	5.1	1.5	0.77	0.23	0.24	良	
393	石室内	練玉	土	黒褐	6.8	5.0	1.6	0.74	0.24	0.30	良	
394	石室内	練玉	土	黒	6.5	5.6	1.7	0.86	0.26	0.26	良	
395	石室内	練玉	土	黒灰	6.9	5.1	1.3	0.74	0.19	0.29	良	両端面は地肌が露出
396	石室内	練玉	土	黒	6.9	5.5	1.4	0.80	0.20	0.33	良	
397	石室内	練玉	土	黒	6.8	5.4	1.7	0.79	0.25	0.27	良	

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
398	石室内	練玉	土	黒	6.7	5.5	1.5	0.82	0.22	0.28	良	
399	石室内	練玉	土	黒	(4.2)	5.5	1.5			0.16	良	1/2欠損
400	石室内	練玉	土	黒	6.9	5.5	1.8	0.80	0.26	0.31	良	
401	石室内	練玉	土	黒	6.5	5.6	1.0	0.86	0.15	0.13	良	1/2欠損
402	石室内	練玉	土	黒	6.6	5.9	1.3	0.89	0.20	0.34	良	
403	石室内	練玉	土	黒	6.7	5.8	1.4	0.87	0.21	0.29	良	
404	石室内	練玉	土	褐	6.8	5.9	1.5	0.87	0.22	0.29	良	
405	石室内	練玉	土	黒	6.9	6.0	1.7	0.87	0.25	0.34	良	
406	石室内	練玉	土	黒灰喝	6.8	6.0	1.1	0.88	0.16	0.35	良	
407	石室内	練玉	土	黒	6.8	6.0	1.2	0.88	0.18	0.29	良	
408	石室内	練玉	土	黒灰	6.8	6.2	1.6	0.91	0.24	0.35	良	
409	石室内	練玉	土	黒	6.8	6.5	1.5	0.96	0.22	0.36	良	
410	石室内	練玉	土	黒	6.8	6.4	2.0	0.94	0.29	0.37	良	
411	石室内	練玉	土	黒	6.8	6.6	1.7	0.97	0.25	0.36	良	
412	石室内	練玉	土	黒	6.9	6.4	1.7	0.93	0.25	0.41	良	
413	石室内	練玉	土	黒	6.9	6.9	2.0	1.00	0.29	0.38	良	
414	石室内	練玉	土	黒	6.7	7.0	1.6	1.04	0.24	0.33	良	
415	石室内	練玉	土	黒	6.6	7.3	1.7	1.11	0.26	0.38	良	
416	石室内	練玉	土	黒	6.8	7.3	1.9	1.07	0.28	0.36	良	
417	石室内	練玉	土	灰褐	7.1	5.1	1.2	0.72	0.17	0.32	良	
418	石室内	練玉	土	黒	7.2	5.0	2.0	0.69	0.28	0.36	良	
419	石室内	練玉	土	黒	7.1	5.2	1.8	0.73	0.25	0.26	良	
420	石室内	練玉	土	黒	7.2	5.2	0.8	0.72	0.11	0.32	良	
421	石室内	練玉	土	黒	7.3	5.2	1.3	0.71	0.18	0.31	良	
422	石室内	練玉	土	黒	7.2	5.5	1.6	0.76	0.22	0.31	良	
423	石室内	練玉	土	暗褐	7.3	5.5	1.6	0.75	0.22	0.25	良	1/3欠損
424	石室内	練玉	土	黒	7.2	5.0	1.5	0.69	0.21	0.28	良	
425	石室内	練玉	土	黒	7.0	5.6	1.5	0.80	0.21	0.36	良	
426	石室内	練玉	土	黒褐	7.1	5.6	1.3	0.79	0.18	0.34	良	
427	石室内	練玉	土	黒	7.2	5.6	1.4	0.78	0.19	0.36	良	
428	石室内	練玉	土	黒	7.2	5.6	1.7	0.78	0.24	0.36	良	
429	石室内	練玉	土	黒灰	7.3	5.6	1.6	0.77	0.22	0.37	良	
430	石室内	練玉	土	黒	7.4	5.6	1.4	0.76	0.19	0.33	良	
431	石室内	練玉	土	黒	7.3	5.7	1.4	0.78	0.19	0.34	良	
432	石室内	練玉	土	黒	7.3	5.7	1.5	0.78	0.21	0.35	良	
433	石室内	練玉	土	黒	7.0	5.8	1.9	0.83	0.27	0.37	良	
434	石室内	練玉	土	黒灰	7.0	5.8	1.9	0.83	0.27	0.29	良	
435	石室内	練玉	土	黒	7.0	6.0	1.5	0.86	0.21	0.36	良	
436	石室内	練玉	土	黒	7.0	6.0	1.5	0.86	0.21	0.33	良	
437	石室内	練玉	土	黒褐	(6.5)	(3.1)	1.4			0.12	良	5/6欠損
438	石室内	練玉	土	灰黒	7.1	6.0	1.3	0.85	0.18	0.36	良	
439	石室内	練玉	土	黒	7.1	5.6	1.9	0.79	0.27	0.34	良	
440	石室内	練玉	土	黒灰	7.1	(5.2)	1.6		0.23	0.23	良好	
441	石室内	練玉	土	黒	7.2	6.0	1.5	0.83	0.21	0.37	良	
442	石室内	練玉	土	黒褐	7.3	6.0	1.6	0.82	0.22	0.37	良	
443	石室内	練玉	土	黒褐	7.3	6.7	1.5	0.92	0.21	0.34	良	
444	石室内	練玉	土	黒	7.3	6.0	1.9	0.82	0.26	0.33	良	
445	石室内	練玉	土	黒	7.4	6.0	1.5	0.81	0.20	0.34	良	
446	石室内	練玉	土	黒	7.2	5.7	1.7	0.79	0.24	0.37	良	
447	石室内	練玉	土	黒褐	7.3	6.1	1.7	0.84	0.23	0.34	良	
448	石室内	練玉	土	黒	7.3	5.8	1.7	0.79	0.23	0.32	良	
449	石室内	練玉	土	黒	7.0	5.9	1.5	0.84	0.21	0.33	良	
450	石室内	練玉	土	黒褐	7.0	6.3	1.4	0.90	0.20	0.31	良	
451	石室内	練玉	土	黒	7.2	6.2	1.5	0.86	0.21	0.36	良	
452	石室内	練玉	土	黒	7.2	6.3	1.3	0.88	0.18	0.38	良	

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
453	石室内	練玉	土	黒	7.0	6.4	1.7	0.91	0.24	0.35	良	
454	石室内	練玉	土	灰黒	7.1	6.4	2.2	0.90	0.31	0.34	良	
455	石室内	練玉	土	暗褐	7.2	6.4	1.4	0.89	0.19	0.36	良	
456	石室内	練玉	土	黒灰	7.3	6.4	1.6	0.88	0.22	0.37	良	
457	石室内	練玉	土	黒	7.2	6.5	1.5	0.90	0.21	0.40	良	
458	石室内	練玉	土	黒	7.1	6.6	1.5	0.93	0.21	0.29	良	1/4欠損
459	石室内	練玉	土	黒	7.2	6.5	1.7	0.90	0.24	0.37	良	
460	石室内	練玉	土	灰褐	7.1	7.0	1.6	0.99	0.23	0.37	良	
461	石室内	練玉	土	黄灰	7.1	7.3	1.5	1.03	0.21	0.41	良	
462	石室内	練玉	土	黒	7.6	5.0	1.6	0.66	0.21	0.32	良	
463	石室内	練玉	土	黒灰	7.5	4.9	1.4	0.65	0.19	0.28	良	
464	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.2	1.5	0.67	0.19	0.20	良	1/2欠損
465	石室内	練玉	土	黒	7.6	5.2	1.5	0.68	0.20	0.35	良	
466	石室内	練玉	土	黒	7.5	5.3	1.6	0.71	0.21	0.33	良	
467	石室内	練玉	土	黒	7.6	5.0	1.6	0.66	0.21	0.32	良	
468	石室内	練玉	土	黒	7.5	5.4	1.4	0.72	0.19	0.17	良	1/2欠損
469	石室内	練玉	土	黒	7.4	5.5	1.3	0.74	0.18	0.23	良	1/2欠損
470	石室内	練玉	土	黒	7.5	5.5	1.8	0.73	0.24	0.16	良	1/2欠損
471	石室内	練玉	土	黒	7.4	5.6	1.7	0.76	0.23	0.31	良	
472	石室内	練玉	土	黒	7.4	5.6	1.7	0.76	0.23	0.36	良	
473	石室内	練玉	土	黒灰	7.5	5.6	1.8	0.75	0.24	0.34	良	
474	石室内	練玉	土	黒	7.6	5.7	1.6	0.75	0.21	0.30	良	
475	石室内	練玉	土	黒灰	7.4	6.2	1.5	0.84	0.20	0.34	良	
476	石室内	練玉	土	黒灰	7.4	6.0	1.5	0.81	0.20	0.36	良	
477	石室内	練玉	土	黒灰	7.4	5.5	1.7	0.74	0.23	0.31	良好	
478	石室内	練玉	土	黒	7.4	5.9	1.4	0.80	0.19	0.40	良	
479	石室内	練玉	土	黒	7.4	5.0	1.6	0.68	0.22	0.39	良	
480	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.0	1.4	0.80	0.19	0.37	良	
481	石室内	練玉	土	灰黒	7.5	5.7	1.4	0.76	0.19	0.39	良	
482	石室内	練玉	土	黒灰	7.5	5.7	1.6	0.76	0.21	0.33	良	
483	石室内	練玉	土	暗褐	7.5	5.8	1.5	0.77	0.20	0.36	良	
484	石室内	練玉	土	黒灰	7.5	5.9	1.6	0.79	0.21	0.33	良	
485	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.0	1.8	0.80	0.24	0.38	良	
486	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.0	1.7	0.80	0.23	0.33	良	
487	石室内	練玉	土	黒	7.6	6.0	1.3	0.79	0.17	0.34	良	
488	石室内	練玉	土	灰黒	7.6	5.7	1.7	0.75	0.22	0.27	良	1/3欠損
489	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.0	1.3	0.80	0.17	0.37	良	
490	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.1	1.8	0.81	0.24	0.34	良	側面に粘土の接合痕
491	石室内	練玉	土	黒	7.6	6.1	1.6	0.80	0.21	0.38	良	
492	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.2	1.6	0.83	0.21	0.37	良	側面に粘土の接合痕
493	石室内	練玉	土	黒	7.4	6.3	1.7	0.85	0.23	0.41	良	
494	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.3	1.4	0.84	0.19	0.39	良	
495	石室内	練玉	土	黒灰	7.5	6.0	1.4	0.80	0.19	0.33	良	
496	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.5	1.5	0.87	0.20	0.33	良	
497	石室内	練玉	土	暗褐	7.7	6.3	1.5	0.82	0.19	0.40	良	
498	石室内	練玉	土	褐	7.5	6.4	1.7	0.85	0.23	0.38	良	
499	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.4	1.6	0.85	0.21	0.42	良	
500	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.1	1.8	0.81	0.24	0.37	良	
501	石室内	練玉	土	黒褐	7.4	6.3	1.8	0.85	0.24	0.37	良	
502	石室内	練玉	土	黒	7.4	6.6	1.7	0.89	0.23	0.39	良	
503	石室内	練玉	土	灰黒	7.5	6.6	1.5	0.88	0.20	0.42	良	
504	石室内	練玉	土	黒	7.6	6.6	1.3	0.87	0.17	0.46	良	
505	石室内	練玉	土	黒	7.5	6.1	1.8	0.81	0.24	0.32	良	
506	石室内	練玉	土	暗褐	7.5	7.0	1.5	0.93	0.20	0.41	良	
507	石室内	練玉	土	黒	7.5	7.0	1.5	0.93	0.20	0.47	良	

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
508	石室内	練玉	土	灰黒	7.5	6.2	1.6	0.83	0.21	0.48	良	
509	石室内	練玉	土	黒	7.5	7.1	1.6	0.95	0.21	0.39	良	
510	石室内	練玉	土	暗赤褐	6.0	7.2	1.4	1.20	0.23	0.39	良	
511	石室内	練玉	土	黒	7.6	6.7	1.6	0.88	0.21	0.34	良	
512	石室内	練玉	土	黒	7.7	5.0	1.7	0.65	0.22	0.30	良	
513	石室内	練玉	土	黒	7.7	5.2	1.5	0.68	0.19	0.33	良	
514	石室内	練玉	土	灰黒	7.7	5.3	1.6	0.69	0.21	0.29	良	
515	石室内	練玉	土	黒	7.7	5.3	1.8	0.69	0.23	0.38	良	
516	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.3	1.6	0.68	0.21	0.35	良	
517	石室内	練玉	土	黒	7.7	5.5	1.7	0.71	0.22	0.35	良	
518	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.5	1.8	0.71	0.23	0.41	良	
519	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.5	1.5	0.71	0.19	0.39	良	
520	石室内	練玉	土	黒	7.9	5.4	1.7	0.68	0.22	0.34	良	
521	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.6	1.6	0.72	0.21	0.36	良	
522	石室内	練玉	土	黒	7.9	5.6	1.6	0.71	0.20	0.40	良	
523	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.7	1.4	0.73	0.18	0.32	良	
524	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.8	1.6	0.74	0.21	0.35	良	
525	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.6	2.0	0.72	0.26	0.40	良	
526	石室内	練玉	土	灰黒	7.7	5.8	1.7	0.75	0.22	0.20	良	1/2欠損
527	石室内	練玉	土	黒	7.5	5.8	1.8	0.77	0.24	0.21	良	1/2欠損
528	石室内	練玉	土	褐灰	7.8	5.8	1.5	0.74	0.19	0.37	良	
529	石室内	練玉	土	黒	7.7	5.9	1.5	0.77	0.19	0.37	良	
530	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.0	1.8	0.77	0.23	0.36	良	
531	石室内	練玉	土	黒灰	7.7	6.0	1.4	0.78	0.18	0.36	良	
532	石室内	練玉	土	黒	7.7	5.7	1.7	0.74	0.22	0.37	良	
533	石室内	練玉	土	黒	7.9	5.9	1.4	0.75	0.18	0.42	良	
534	石室内	練玉	土	黒	7.9	6.0	1.7	0.76	0.22	0.36	良	
535	石室内	練玉	土	黒	7.8	5.9	1.6	0.76	0.21	0.38	良	
536	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.0	1.6	0.77	0.21	0.41	良	
537	石室内	練玉	土	黒	7.9	5.9	1.4	0.75	0.18	0.41	良	
538	石室内	練玉	土	黒	7.7	6.1	1.8	0.79	0.23	0.36	良	
539	石室内	練玉	土	黒	7.9	6.1	1.5	0.77	0.19	0.41	良	
540	石室内	練玉	土	暗灰褐	7.7	6.2	1.4	0.81	0.18	0.37	良	
541	石室内	練玉	土	黒褐	7.7	6.3	1.8	0.82	0.23	0.38	良	
542	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.3	1.3	0.81	0.17	0.41	良	
543	石室内	練玉	土	暗褐	(7.9)	5.7	1.4			0.44	良	1/2欠損
544	石室内	練玉	土	黒	7.9	5.8	1.5	0.73	0.19	0.35	良	
545	石室内	練玉	土	黒灰	7.8	(5.5)	1.6		0.21	0.31	良	
546	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.2	1.5	0.79	0.19	0.33	良	
547	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.0	1.4	0.77	0.18	0.35	良	
548	石室内	練玉	土	黒	7.7	6.2	1.7	0.81	0.22	0.37	良	
549	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.5	1.7	0.83	0.22	0.39	良	
550	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.4	1.8	0.82	0.23	0.39	良	
551	石室内	練玉	土	暗褐	7.7	5.4	1.6	0.70	0.21	0.41	良	
552	石室内	練玉	土	黒	7.7	6.4	1.3	0.83	0.17	0.39	良	
553	石室内	練玉	土	暗褐	7.9	6.0	1.4	0.76	0.18	0.43	良	
554	石室内	練玉	土	褐灰	7.8	6.5	1.5	0.83	0.19	0.37	良	
555	石室内	練玉	土	黒	7.7	6.7	1.6	0.87	0.21	0.46	良	
556	石室内	練玉	土	黒	7.7	6.8	1.5	0.88	0.19	0.42	良	
557	石室内	練玉	土	黒	7.8	6.8	1.6	0.87	0.21	0.39	良	
558	石室内	練玉	土	黒	7.9	6.7	1.9	0.85	0.24	0.39	良	
559	石室内	練玉	土	黒褐	7.8	6.5	1.6	0.83	0.21	0.39	良	
560	石室内	練玉	土	黒	7.9	6.9	1.6	0.87	0.20	0.41	良	
561	石室内	練玉	土	黒	7.8	7.0	1.8	0.90	0.23	0.42	良	
562	石室内	練玉	土	黄灰	7.9	7.2	1.3	0.91	0.16	0.45	良	

図版番号	出土地点	種類	材質	色調	法量（mm）			長/径	孔/径	重量(g)	焼成	備考
					径	長さ	孔径					
563	石室内	練玉	土	黒	7.9	7.6	2.7	0.96	0.34	0.50	良	
564	石室内	練玉	土	黒	8.1	4.4	1.7	0.54	0.21	0.35	良	
565	石室内	練玉	土	黒	8.2	5.0	1.3	0.61	0.16	0.37	良	端面に明確な稜を持つ
566	石室内	練玉	土	黒	8.0	5.2	1.8	0.65	0.23	0.35	良	
567	石室内	練玉	土	黒	8.1	5.4	1.8	0.67	0.22	0.37	良	
568	石室内	練玉	土	黒	8.0	5.5	1.5	0.69	0.19	0.37	良	
569	石室内	練玉	土	灰褐	8.4	5.3	1.5	0.63	0.18	0.34	良	
570	石室内	練玉	土	黒	8.0	5.5	1.7	0.69	0.21	0.38	良	端面に稜
571	石室内	練玉	土	黒	8.3	5.5	2.0	0.66	0.24	0.40	良	
572	石室内	練玉	土	黒	8.4	5.7	1.7	0.68	0.20	0.38	良	
573	石室内	練玉	土	黒	8.0	6.0	1.9	0.75	0.24	0.35	良	
574	石室内	練玉	土	黒	8.0	5.2	1.4	0.65	0.18	0.27	良	
575	石室内	練玉	土	黒	8.0	6.0	1.8	0.75	0.23	0.38	良	
576	石室内	練玉	土	黒	8.0	5.5	1.5	0.69	0.19	0.39	良	
577	石室内	練玉	土	黒	8.1	5.7	1.5	0.70	0.19	0.38	良	
578	石室内	練玉	土	黒	8.3	5.5	1.5	0.66	0.18	0.43	良	
579	石室内	練玉	土	黒	8.4	5.7	1.4	0.68	0.17	0.39	良	面取り部に粘土粒付着
580	石室内	練玉	土	黒	8.2	5.7	1.5	0.70	0.18	0.37	良	
581	石室内	練玉	土	黒	8.0	5.8	1.9	0.73	0.24	0.38	良	下端面剥離
582	石室内	練玉	土	黒	8.1	6.2	1.7	0.77	0.21	0.38	良	
583	石室内	練玉	土	黒	8.0	6.2	1.8	0.78	0.23	0.44	良	
584	石室内	練玉	土	黒	8.4	6.1	1.6	0.73	0.19	0.40	良	
585	石室内	練玉	土	黒	8.4	5.6	1.9	0.67	0.23	0.32	良	
586	石室内	練玉	土	黒	8.1	6.3	1.6	0.78	0.20	0.39	良	
587	石室内	練玉	土	黒灰	8.0	6.5	1.8	0.81	0.23	0.41	良	
588	石室内	練玉	土	灰黒	8.2	6.4	1.8	0.78	0.22	0.42	良	
589	石室内	練玉	土	黒	8.1	5.7	1.4	0.70	0.17	0.41	良	
590	石室内	練玉	土	黒	8.2	6.4	1.3	0.78	0.16	0.42	良	
591	石室内	練玉	土	灰黒	8.0	6.3	1.7	0.79	0.21	0.41	良	
592	石室内	練玉	土	黒	8.0	6.2	1.8	0.78	0.23	0.40	良	
593	石室内	練玉	土	暗褐	8.2	6.1	1.4	0.74	0.17	0.39	良	
594	石室内	練玉	土	黒	8.3	6.5	1.5	0.78	0.18	0.41	良	
595	石室内	練玉	土	褐灰	8.1	6.7	1.7	0.83	0.21	0.36	良	
596	石室内	練玉	土	黒	8.3	6.8	1.6	0.82	0.19	0.44	良	
597	石室内	練玉	土	黒	8.2	7.0	1.8	0.85	0.22	0.51	良	
598	石室内	練玉	土	黒	8.3	7.0	1.5	0.84	0.18	0.46	良	
599	石室内	練玉	土	黒灰	8.1	7.3	1.6	0.90	0.20	0.47	良	
600	石室内	練玉	土	黒	8.0	7.3	1.5	0.91	0.19	0.48	良	
601	石室内	練玉	土	黒	8.4	7.3	1.5	0.87	0.18	0.49	良	
602	石室内	練玉	土	黒褐	8.4	7.5	1.5	0.89	0.18	0.51	良	
603	石室内	練玉	土	黒	8.8	5.3	1.4	0.60	0.16	0.36	良	
604	石室内	練玉	土	黒	8.5	5.4	1.5	0.64	0.18	0.39	良	
605	石室内	練玉	土	黒	8.7	5.8	1.7	0.67	0.20	0.37	良	
606	石室内	練玉	土	黒	8.5	6.1	1.7	0.72	0.20	0.44	良	
607	石室内	練玉	土	黒	8.5	6.0	1.5	0.71	0.18	0.46	良	
608	石室内	練玉	土	黒	8.5	6.6	1.7	0.78	0.20	0.41	良	
609	石室内	練玉	土	黒	8.7	6.6	1.7	0.76	0.20	0.56	良	
610	石室内	練玉	土	黒褐	8.7	6.5	1.7	0.75	0.20	0.42	良好	
611	石室内	練玉	土	黒褐	(4.3)	7.0	2.0			0.26	良好	1/2欠損
612	石室内	練玉	土	黒	8.7	7.2	1.7	0.83	0.20	0.55	良	
613	石室内	練玉	土	黒灰	8.5	7.0	1.5	0.82	0.18	0.53	良	
614	石室内	練玉	土	黒	8.6	8.0	1.3	0.93	0.15	0.61	良	

ST301出土遺物

鉄鏃

図版番号	出土地点	法量（cm）			茎の断面	重量（g）	備考
		現存長	鏃身				
			長	幅			
615		9.0	(5.4)	(2.5)	円	13.41	腸抉三角形鏃，矢柄残存
616		9.1	(4.8)	(2.9)		15.78	腸抉三角形鏃，矢柄残存
617		9.4	5.3	(2.4)	方	16.88	腸抉三角形鏃，逆刺欠損
618		8.4	(4.7)	(2.7)		18.19	腸抉三角形鏃，逆刺，茎部欠損
619		9.9	(5.5)	(2.6)	方	14.68	三角形鏃，矢柄残存
620		10.8	4.9	3.0	方	24.39	三角形鏃，矢柄残存
621		10.6	8.0	3.2	楕円	32.83	鑿頭式鏃，矢柄残存
623		11.9	6.6	2.4	不明	68.82	a 矢柄残存
		14.3	7.8	3.3	不明		b 矢柄残存
		4.1			方		c 茎部，矢柄残存
624		8.2	2.1	1.2		31.37	a
		13.0	2.0	1.0			b 刃部が1枚銹着

刀子

図版番号	出土地点	法量（cm）				重量(g)	備考
		現存長	刃部長	刀身幅	刀身厚		
622		10.6		1.5	0.5	22.27	刀身と柄の結合部に金属製の板を巻きつける

ST303出土遺物

土器

図版番号	出土地点	器種	現存部位	現存率	法量（cm）			成形および調整技法（外面／内面）	施文の特徴	色調（外面／内面）	胎　土	焼成	備考
					口径	器高	底径						
625		甕	口縁～底部	1/2	14.2	11.1	6.0	磨滅(板ナデ?／ナデ)		赤褐(2.5YR4/6)／明赤褐(2.5YR5/8)	粗・5mm以下の長石・石英・中～粗砂多く含む	良好	

その他の遺物

土器

図版番号	出土地点	器種	現存部位	現存率	法量（cm）			成形および調整技法（外面／内面）	施文の特徴	色調（外面／内面）	胎　土	焼成	備考
					口径	器高	底径						
632	周溝内		底部	ほぼ完存		1.4	24.3	回転ナデ／回転ナデ			密・微砂少量	良	土器棺
635	周溝内	土錘		完形品	最大径1.3	3.1					密	良	
636	神社石段東道沿い	高坏	坏部	1/8	(20.4)	(3.5)		ヨコナデ・ヘラミガキ	凹線3条	褐(7.5YR4/4)／褐(7.5YR4/6)	密・0.5mm以下の長石・角閃石を含む	良	
637	神社石段東道沿い		底～脚部					不明／不明		橙(5YR6/8)／橙(7.5YR7/8)	密・0.5mm以下	良好	円盤充填
638	神社石段東道沿い	壺	口縁～体部		(18.3)	(26.2)		ヨコナデ・ハケ／ナデ・ハケ・指頭圧	列点文	黄橙(7.5YR7/8)／橙(2.5YR6/8)	密・0.5mm以下の長石・石英少量	良	
639	神社石段東道沿い	壺	底部	ほぼ完存		17.0	12.4	磨滅／指頭圧		明赤褐(2.5YR5/8)／明赤褐(5YR5/8)	粗・3mm以下の石英・長石多く含む	良	

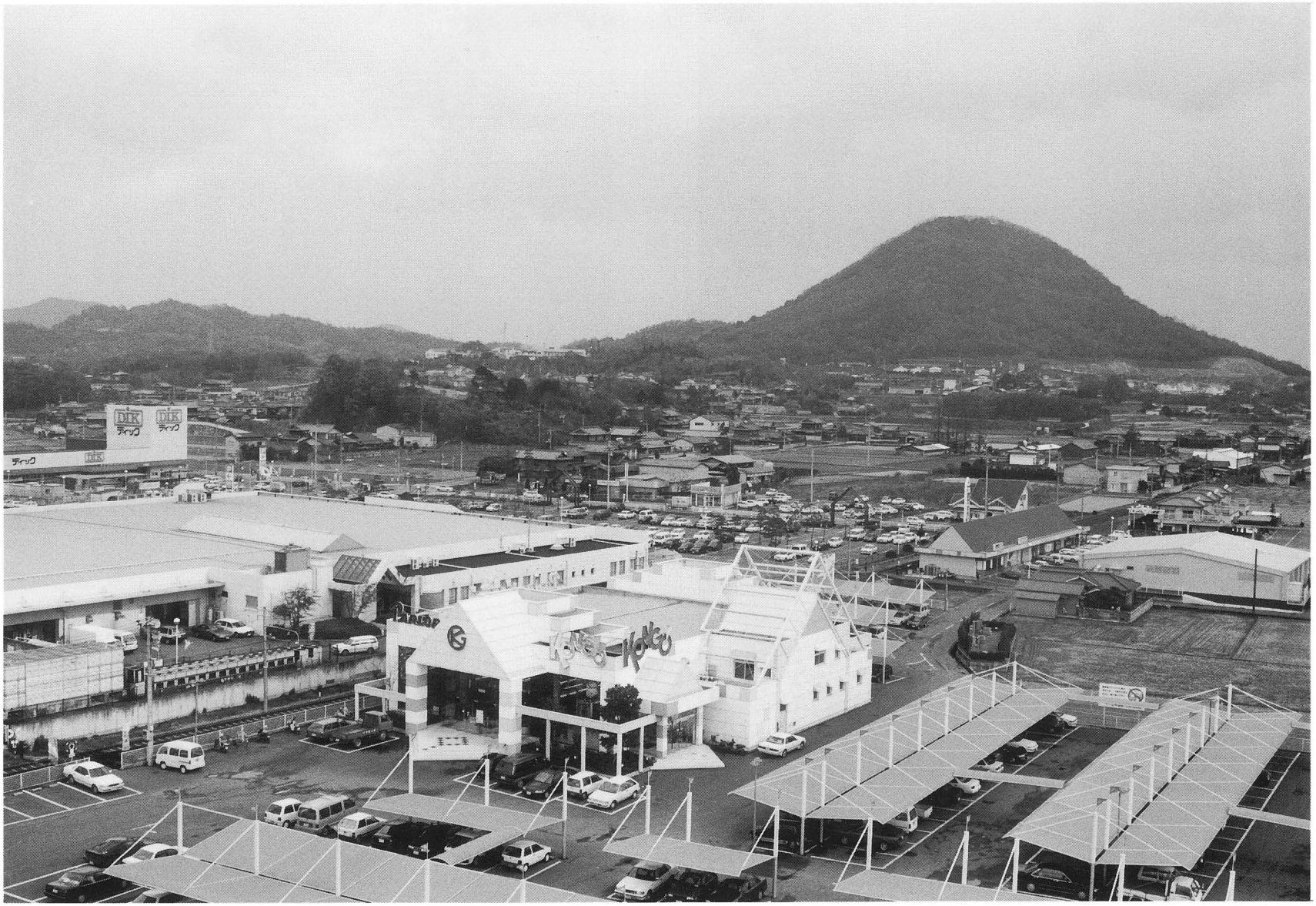
石鏃

図版番号	出土地点	法量（cm）			重量(g)	材質	備考
		長	幅	厚			
633	不明	1.7	1.2	0.2	0.3	サヌカイト	凹基式
634	石室内	2.2	1.6	0.4	0.86	サヌカイト	凹基式

古銭

図版番号	出土地点	器種	現存率	径(cm)	色調	備考
626	周溝内	古銭	完形品	2.5	暗緑灰（10GY3/1）	寛永通宝，中央に6mm大の孔
627	周溝内	古銭	完形品	2.4	暗緑灰（7.5GY3/1）	寛永通宝，中央に6mm大の孔
628	周溝内	古銭	完形品	2.4	暗緑灰（7.5GY4/1）	寛永通宝,中央部に6.5mm大の孔
629	周溝内	古銭	完形品	2.3	暗緑灰（7.5GY4/1）	中央部に7mm大の孔，腐食が進む
630	周溝内	古銭	完形品	2.2	緑黒（10G2/1）	寛永通宝，中央に7mm大の孔
631	周溝内	古銭	完形品	2.3	暗緑灰（5G4/1）	道光通宝，中央に5mm大の孔

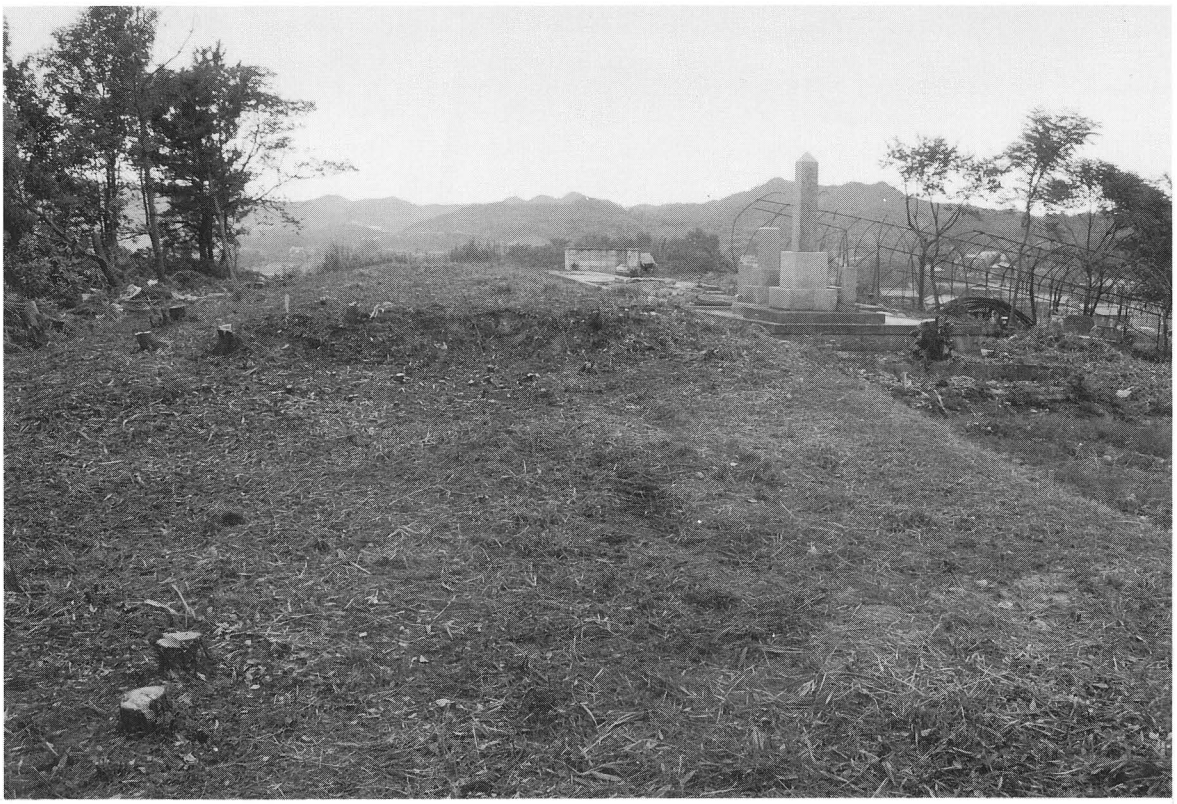
写　真　図　版



調 査 区 遠 景

図版２

調査前の風景（北から）



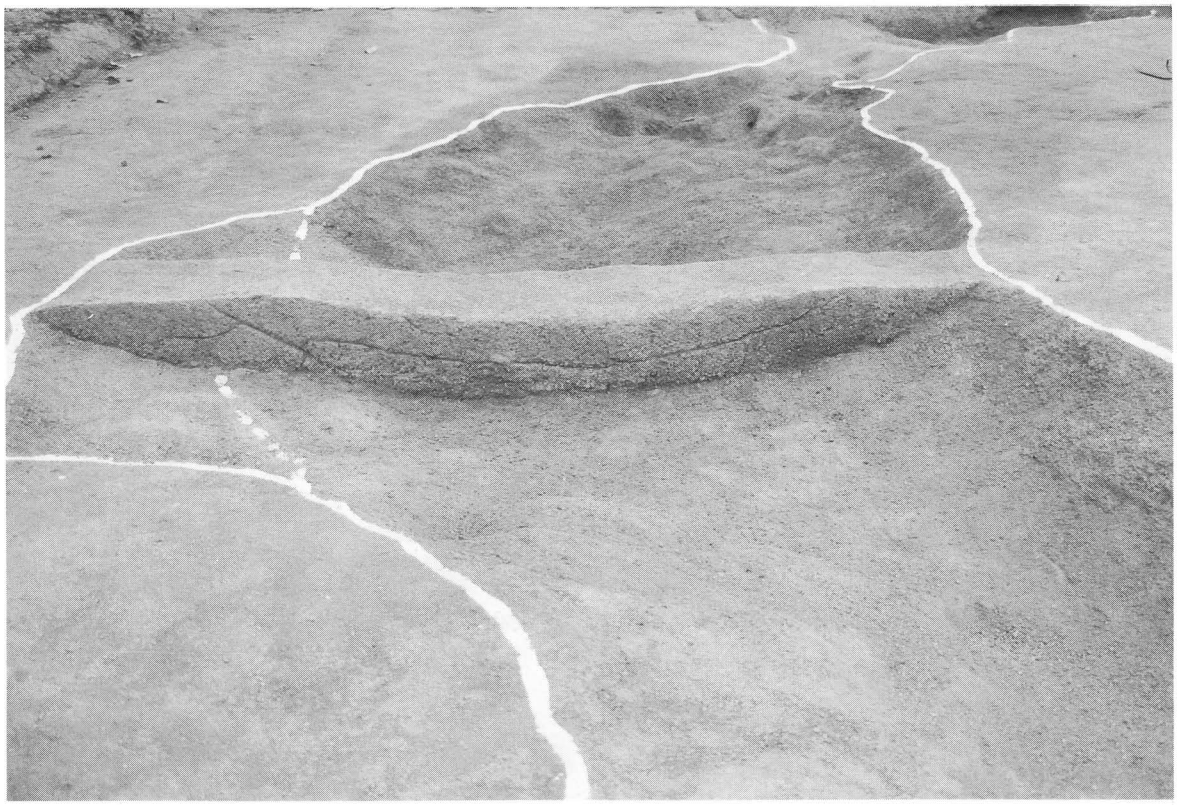
調査前の風景（南から）

1号墳全景（南から）

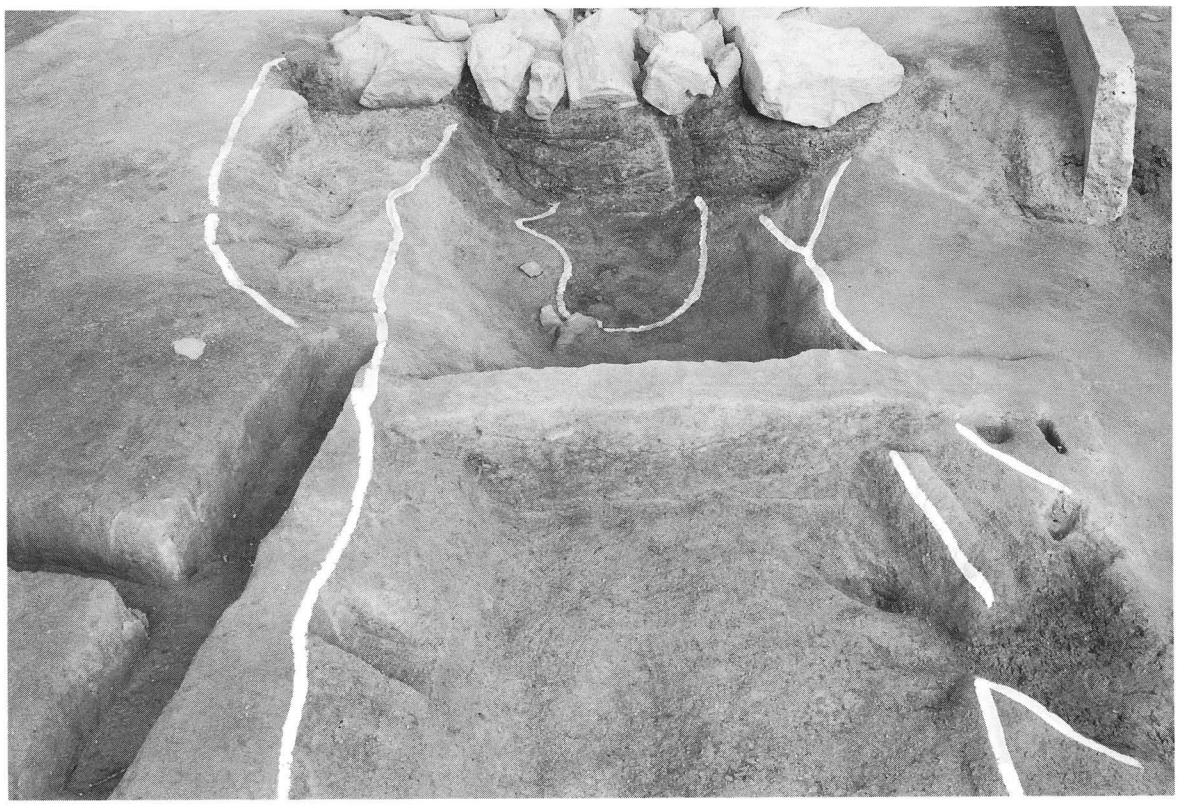
1号墳全景（北から）

図版４

１号墳周溝土層（Ⓓ－Ⓓ′ 北から）



１号墳周溝及びＳＴ102土層（Ⓐ－Ⓐ′ 南から）



1号墳墓道土層（Ⓑ－Ⓑ′ 南から）

1号墳石室土層（北から）

図版６

１号墳石室及び墓道（西上から）

１号墳石室及び墓道（南から）

1 号墳石室内完掘（西上から）

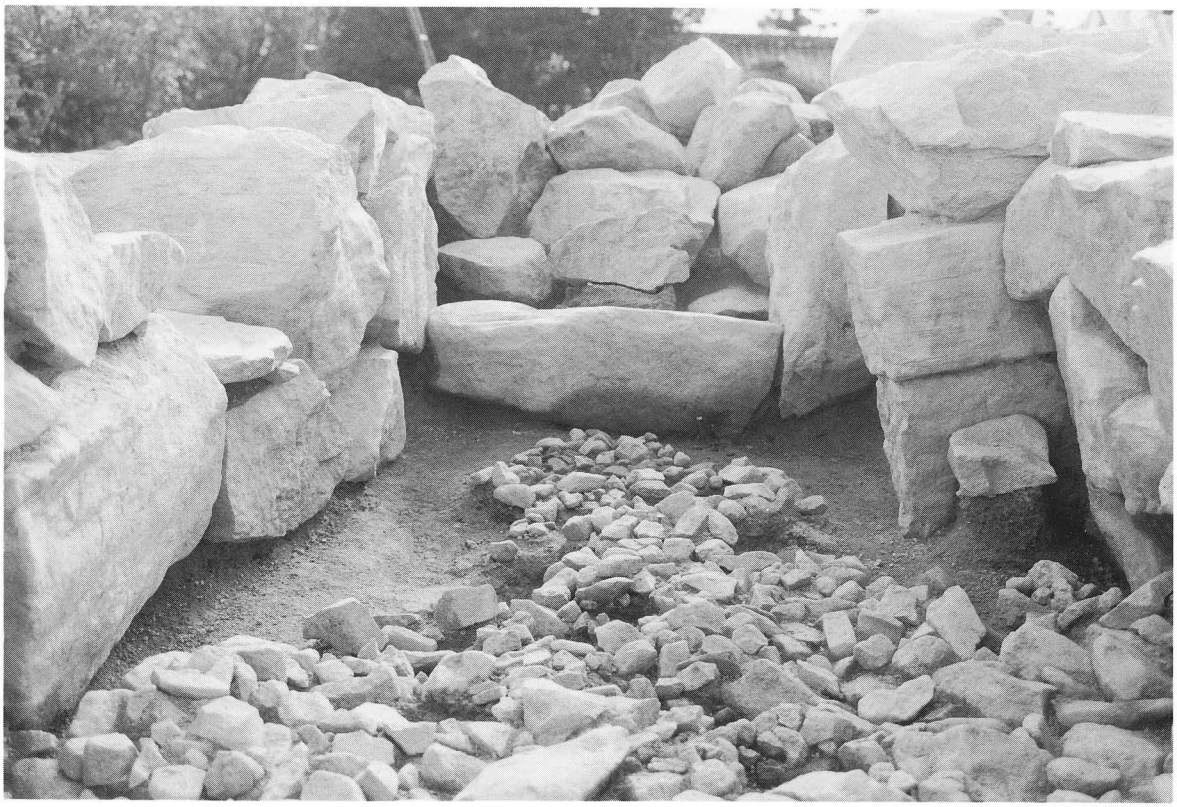
1 号墳石室内完掘（南から）

図版８

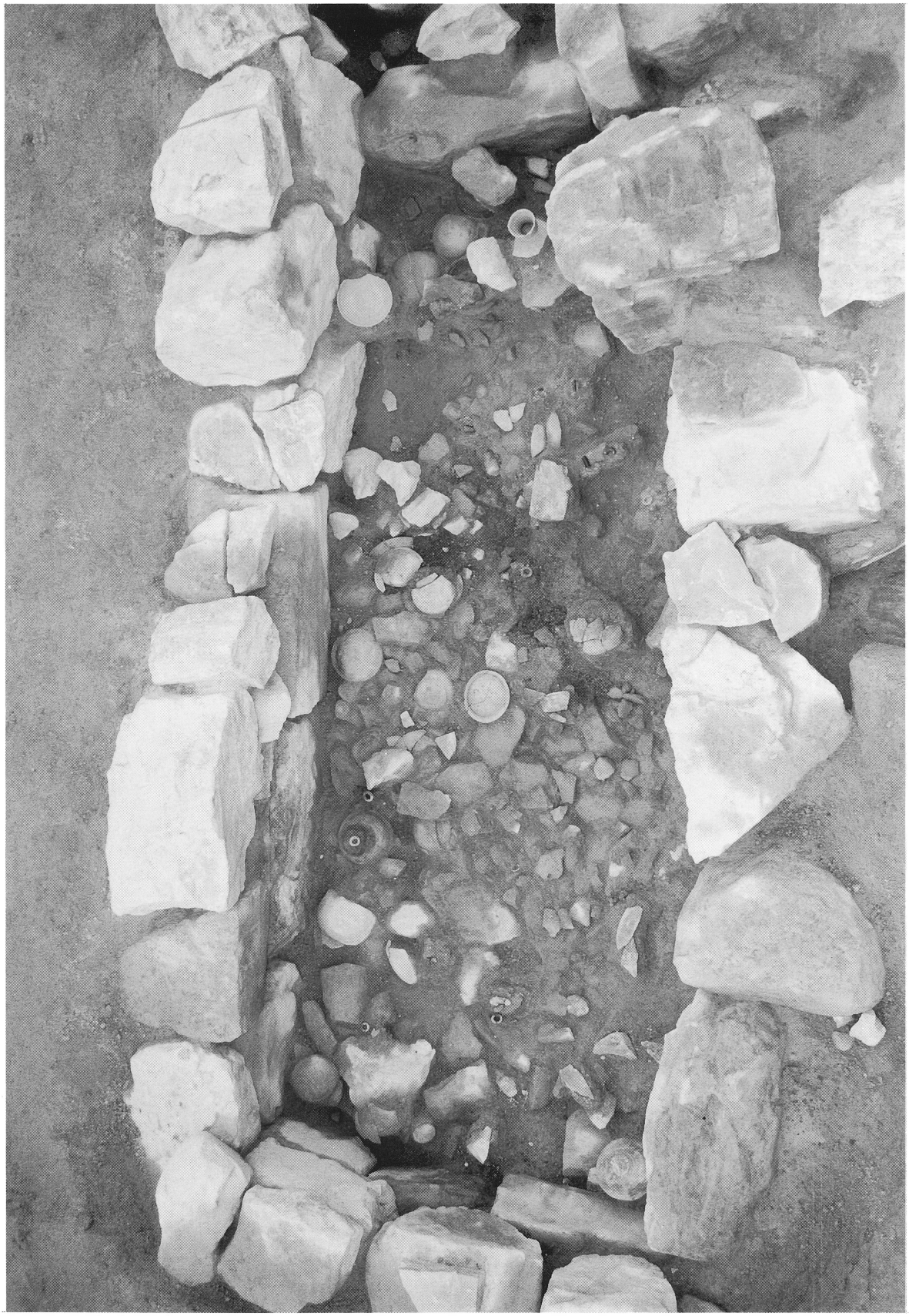
１号墳石室裏込め状況（左側壁・南から）

左　側　壁

1 号墳石室奥壁



1 号墳石室閉塞石



1 号墳遺物出土状況（1）